第二編　經濟組織の發展

第一編に於て今日の經濟組織たる國民經濟を形成する概念を説明したれば、更らに進んで抑も經濟生活の組織は如何なる種類があるか、是等各種の組織は如何なる史的發展を經て今日に至つたものであるかを知らなければならない。既に前編に於て今日の經濟上各般の現象は、一の國民經濟なる經濟組織内に活動する者であつて、此國民經濟は數十年間の史的發展の結果であると云ふことを言つた。されば今日國民經濟の眞相を究めるには、之れに到つた順序を知らなければならないのである。

國民經濟とは何を謂ふかに關しては從來二個の全く相反對する學説がある。一は個人主義説であつて、一は社會主義説である。二説共に今日の經濟組織の成立並に其發展を説明するに足らず、更に新たなる見解を執らざる可らざるに到つた科學的研究の發展

の順序は、第三編經濟學の史的發展を論ずる所に於て之を詳述する(78)。吾人の茲に執る見解は、個人主義的見解にあらずして、現實的見解、發展的觀察である(79)。即ち先づ歴史に徴し實際經濟生活の狀態に照し、各種の發展階段に於ける經濟組織の何なりや、如何にして如此なりしや、進んでは經濟組織内に行はるゝ各般の現象は、此發展しつゝある經濟組織内に於て同じく又如何に發展しつゝあるかを研究するのである、此の如き現實的、歴史的研究するに方つては、總て先入の僻見を去らなければならない。一々歴史に訴へ實際に照して研究し其眞相を知り、複雜な現象の内に一貫の發展の法則を求めなければならない。此の如く一貫の法則を見出さうと欲して從來の學者が立てた說に種々ある。其等を綜合して併せ考ふるによつて、我々は經濟組織の發展の大要を窺ひ得るのであらう。諸說中重なるものは、左の四である。

一、生産の形態より觀たる經濟組織の發展、

二、交換の形態より觀たる經濟組織の發展、

三、生産消費の關係より觀たる經濟組織の形態の發展、

四　生産の主義より觀たる經濟組織の性質の發展、

(78) 個人主義說は又一に原子主義說と稱するも可なり。individualistisch-atomistischの意なり、――社會主義說と本文に云へるは有機體說 (socialistisch-organisch) をも含む、――individualistischの見を取るものにして、必ずしもatomistischの見を併せて唱へざるものもあり、――社會主義說にして必ずしも有機體說を唱へざるものも亦ありと雖も、正統學派の個人主義は全然原子說にして大多數の社會主義論者の所說は有機體說を認むるは即ち掩ふ可からず――但し有機體說を取るもの必ずしも社會主義論者のみにあらず、然れども此等論者は多く修辭的譬喩として有機體說を採るものにして、凡ての點に於て悉く國民經濟を有機體となすものにあらず、――此意味に於て最も重要なるはSchäffleなり、氏を紹繼して更に考究を進めたるはWagnerなり、RoscherもSchmollerも（前揭國民經濟の定義に揭げたる如く）有機體Organismus又は社會體Socialer Körperなる文字を慣用す、――其他の學者に至りても多く考慮を費やさずしてSchäffle, Wagner兩氏を祖述するもの多く、やがて最近經濟學者間の流行たらんとするが如し、――此時運に反對して挺然旗幟を飜して學界の一方に雄視するものは、墺太利派の巨擘Karl Mengerなり、――今其所論の一節を示さん、――

F. I, 67.

Weder die Thatsache, dass die Einzelwirtschaften in einem Volke in Verkehr mit einander, treten, noch der Umstand, dass die Machthaber in einem Volke eine auf die Förderung der Einzelwirtschaften in ihrer Gesammtheit gerichtete Thätigkeit entwickeln, noch aber auch endlich der Bestand einer eigentlichen Finanzwirtschaft in einem Staat vermag die Einzelwirtschaften in einem Volke zu einer einheitlichen Wirtschaft des Volkes, zu einer Volkswirtschaft im eigentlichen Verstande des Wortes zu gestalten; immer stellt sich uns vielmehr jene Erscheinung, welche gemeiniglich mit dem obigen Ausdrucke bezeichnet wird, lediglich als eine organisirte Complication von Einzelwirtschaften, als eine zu höherer Einheit verbundene Vielheit von Wirtschaften dar, die indess nicht selbst eine Wirtschaft im strengen Verstande des Wortes ist.

*　*　*　*　*　*　*

Adam Smith und seine Schule haben es unterlassen, die complicirten Phänomene der menschlichen Wirtschaft überhaupt, und der socialen Form der letzteren, der „Volkswirtschaft," insbesondere, entsprechend der realen Sachlage, auf die Bestrebungen der Singularwirtschaften zurückzuführen, sie als Resultante dieser letztern uns theoretisch verstehen zu lehren; ihr Bestreben ist vielmehr,

allerdings zumeist in ganz unbewusster Weise, darauf gerichtet, dieselben unter dem Gesichtspuncte der obigen Fiction uns zum theoretischen Verständnisse zu bringen, während die historische Schule von deutschen Volkswirten der obigen irrtümlichen Auffassung in bewusster Weise folgt, ja in ihr sogar eine unvergleichliche Vertiefung unserer Wissenschaft zu erkennen geneiget ist. Es ist indess klar, dass unter der Herrschaft der hier in Rede stehenden Fiction ein den realen Verhältnissen adäquates theoretisches Verständniss der „volkswirtschaftlichen" Erscheinungen unerreichbar ist und der geringe Wert der herrschenden nationalökonomischen Theorien nicht zum geringsten Theile seine Erklärung in der obigen irrthümlichen Grundauffassung vom Wesen der heutigen socialen Form der menschlichen Wirtschaft findet. Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaften, und der Politischen Oekonomie. 1883. SS. 235-237.

予は全然メンガーに左袒するものにあらずと雖も、徒らに修辭的 Phrasenmacherei に滿足し、先人の說をのみ踏ふに汲々として、深く其の使用する言語の眞意を究めず、先づ疑て而後ち信ずる眞の學問と觀頭とを缺く學徒に對して、氏の反論は一種の清涼劑たるを免かれざるべからざるなり。——

Brentano 並 Bücher の兩先生は此兩者の中間に立て極めて穩健公正の見解を持たるゝものにして予の全然服從する所なり。——

(79) 歴史的見解を持ちて尚有機體說を取るもの少からず、此等は其稱して歴史的・現實的となす所のものゝ眞意を究明するの勞を厭ふものと云はざる可からず。——

第一章　生産の形態より觀たる經濟組織の發展

フリードリッヒ・リストは經濟組織の發展を歴史的に研究し、之を幾多の階段に分つて說明した嚆矢とも云ふべき人である。卽ち千八百四十一年に出版した『國家經濟全論』の緒論に於て彼は從來の學者が毫も史的發展の跡に思を潛めて綿密の研究を爲さざるを嘆じ、生産の形態に五階段あることを說き、其第五の階段は卽ち現時の經濟組織であることを明かにして頗る學者の注意を引く可き說を爲して居る。リストは之を以て其議論の主眼としたのではなく、生産の五階段を說明して、延て其所論の眼目たる商業政策は、如何なる時代に於て如何なる方針を執るべきやを知るの基礎としやうと欲したのである(80)。故に氏は之を以て其所論の最重要なる部分と看做すのでないとは言ふまでもないが、從來此の如き說を立てた者なかつた爲、リストの說は暫くの間は經濟學者を殆ど支配するに至つた。氏の所謂生産五階段とは、第一狩獵及漁業時代、第二遊牧時代、第三農業時代、第四農工業時代、第五農工商時代である。以上の中、始の三項は必しもリストの創案ではない、既にアリストテレース(81)之を說き、隨つて後世の學者の慣用した所であるが、リストは之に第四第五の階段を加へ、且つ各時代に於ける特性を說くに力を用ひ、一時代と他の時代との間に存する區別を論じ、竝に如何にして一の時代より他の時代に進み來つたかを說くに勉めて居る。固より此の區別は唯だ生産の外形に就て下したに過ぎないので、經濟組織の發展を說明するものとしては頗る不完全たるを免かれない。從つて、第一此生産五階段を以て有機的發展の階段と看做す可きでない。第二此生産五階段說は生産のみに付て經濟生活を區分せんとするものであつて、經濟組織全體に通ずる特色

を說明して其全體を盡したものではない。實際の例に付て見るも、リストの說は完全なるものと看做すことが出來ないで、リストの言ふ樣な狩獵漁業時代より次で遊牧時代に移り轉じて農業時代更に進んで農工業並に農工商業時代に進んだと云ふ樣な順序に當篏まらない實例多々ある(82)。故に此五階段說は順序的發展の階段と看做すべきものでなく、唯だ生產の形態に以上の如き五つの異つた種類があるといふ意味にては亦全く捨つべきものでない。眞の經濟生活の內容を分類したものとしてゞなく、唯だ其外形に付て區分を下したものである。第三此の如く此の五階段說は外形的の區分として見ても尙不完全たるを免れない。例へば農業を以て牧畜時代の後に置くのは許多の實例に付て之を見ると直に首肯し難い所であつて、遊牧時代以前に旣に農業の存在したとは屢々見る所である(83)。又た狩獵時代といふ名詞は頗る漠然たるを免かれない。同じ狩獵に從事するにしても其內容に至つては範圍頗る廣漠なものである。又農業時代から進んで農工商業時代に入るとするも、是亦之を事實に徵して未だ當れりと言ふを得ない。工業の存在しないで商業の存在する例は屢々見る所である。工業は商業の指導あつて初て充分なる發達をなすことが出來るものであつて、商業先づ起るの後でなければ工業は一時代の特性となる程に發達することは到底望むべからざる所である。

(80) Friedrich List, Das nationale System der Politischen Oekonomie. 7. A. Einleitung S. 11 ff. 猶 List は Stand なる文字を用ゐ且其第一期を wilder Zustand と名けたり、——

Die Civilisation, die politische Ausbildung und die Macht der Nationen werden hauptsächlich durch *ihre ökonomische Zustände bedingt*, und umgekehrt. Je mehr ihre Oekonomie entwickelt und vervollkommnet ist, desto civilisirter und mächtiger ist die Nation; je mehr ihre Civilisation und Macht steigt, desto höher wird ihre ökonomische Ausbildung steigen können. a. a. O.

(81) Aristoteles' Politik übers. von Stahr. 1860. Bk. I. K. 1—5. bes. S. 99.

Neumann, Grundlagen. S. 23.

Roscher, N. O. des Ackerbaues. 12. A. 1888. S. 17 ff.

(82) Knies, Pol. Oek. v. geschtl. Standp. S. 364. ff.

Philippovich, Grundriss. S. 18—19.

(83) Grosse, Formen der Familie und Formen der Wirtschaft. S. 30 ff.

Bücher, Entstehung der Volkswirtschaft. S. 50. (12. u. 13. A. S. 41.).

近來人種學竝に人類學の方面から經濟生活の發展を研究する事大に進歩して單に生産の形態のみを特徴として經濟組織の發展を區別するにしても、尙以上リストの生産五階段説を以て足れりとせず更らに進んだ研究が顯はれて來た。卽ち此頃グロッセはリストの分類法を訂正して之を次の五種として居る。第一低度漁獵民、第二高度漁獵民第三低度農民、第四遊牧牧畜民、第五高度の農民是れである(84)。グロッセは此の區別を以て必ずしも經濟的發展の順序を説明し樣と試みたのでない。唯だ此の如き經濟上生産の形態の分類をして、之れを社會學上の分類の標準とし、之に依つて社會組織全體に及ぼす經濟上の影響を研究し樣と試たのである。卽ち獨逸の古諺に『其の食する所を見れば又其の人となりを察することが出來る』(85) との思想を當嵌めて、社會組織の根本である家族形態の發展は、又經濟上生産の形態の發展に伴ふといふことを説明し樣としたに過ぎない。此分類は少くとも今日現存する未開人種竝に人類幼稚の時代に於ける生産の形態を説明するに最も適當したものであるグロッセは啻に生産組織の發展を研究するのみでなく、生産組織は一般社會上の組織、卽ち社會上の組織の中で最重要なる家族の組織と相伴ふことを説明して確かに成功したのである。乍去之を以て純粹の發展的階段と看做すは不可である。此の如き各種の生産形態あり其各種の生産形態は又之に應ずる社會上の組織を生ずといふ意味に於て之を解釋せねばならぬものである。今之を各項に別て少しく説明して見よう。

(84) Grosse の其著の一部は河田博士の手に成る忠實綿密なる邦譯先年出版せられたり、――シュモラーは此書を評して Familie の發展史上 Dargun, Cunow 二氏の著と共に最も有益なる資料を供するものなりと云へり、――Grundriss S. 231. ――猶序に言はんに Grosse は元と經濟學者にあらず人類學者にして兼て審美學者なり、然るに氏の其の Formen der Familie u. Formen der Wirtschaft に論ずる處獨創奇拔の見に富み思想深遠にして明快、亦當て專門經濟學者の中多く其儔を見ざる所なり、――殊に氏は本邦の美術を嗜好すること最も甚しく其造詣亦甚深し、氏の傑作たる kunswissenschaftliche Studien 並に Anfänge der Kunst は唯に審美學者のみならず經濟學者の必ず一讀を要する文化史的大論文なり、――猶氏は其 Formen der Familie und Formen der Wirtschaft を增訂して之れを公けにせらる可

く、其節は日本支那に關する經濟史的研究も亦參酌せらるゝ可しと言へば、其面目を一新して吾人の前に現はる可きや必せり、予輩後進生の翹首して待つ所なり。——

(85) Wenn man weiss, was ein Volk *isst*, so weiss man auch, was es *ist*. Grosse. a. a. O. S. 23.

第一　低度の漁獵民

此時代に屬する漁獵は今日の意味で言ふものゝ混同してはならない。人類が食料を求むる最も單純な最も粗末な方法を言ふのであつて、多くは小き獸類魚蟲・甸匐蟲等を狩獵若くは捕獲して之を食料に充つるに過ぎないのである。此時代ゝ雖も全く植物性食物を取らなかつた譯ではない。げれゞも其植物性食物を求むるも決して秩序的農業を營んだのではない。漁獵業に於けると均しく唯だ天然に存在する草根木皮・菜實の類を探究して之を食料に充てたに過ぎない。男は多く動物性の食料を獲得するに從事し、女は植物性の食物を獲得するに從事する。即ち此時代に在つても既に人類の間に分業は存在して居るのである。男女の間に於ける分業は人類社會的分業の中最も古いもので

あつて、之れが漸次變遷して、今日の如く男は專ら經濟財の獲得に從事し、女は專ら經濟財の充用に從事する樣になつたのである。今日現存する未開人種に付て之れを言へば、此種の低度漁獵民に屬するものは多くは矮少の人種で、亞弗利加・亞米利加等の內地に多く見るものである(86)。從來歐洲の學者の見解によると、人類の最始の時代は動物性食物のみを食し、漸次進歩して初めて植物性の食物を取るに至つたといふのであるが、之れは根本的の誤謬であつて(87)、此根本的の誤謬が又經濟學者に傳つてリストの說の樣に、農業を以て漁獵業より遙かに進歩した時代に初て發生する生產形態とする樣になつたのである。漁獵業時代は漁獵にのみ從事する時代であるから農業は決して營まない、であるから植物性食物は少しも之を食せなかつたのだと云ふ謬說は之れから出て來たのである。ところが之を史に徵し之を今日現存の野蠻人の狀態に就て見ると、人類の幼稚な時代にあつても動植物共に之を食するのであつて、隨つて農業は必ずしも進歩した人民計りの營むものゝ言ふことは出來ない。

(86) Immerhin aber findet man auch heute noch in allen Erdtheilen, mit Ausnahme von Europa,

Vertreter der ältesten Wirtschaftsform (niedere Jäger). Afrika birgt eine Menge von kleingewachsenen jägervölkern; leider aber sind wir bisher nur über ein einziges derselben, die *Buschmänner* der *Kalahari-Steppe*, einigermassen unterrichtet; das Leben der übrigen Pygmäenstämme versteckt sich noch in dem Dunkel der centralen Urwälder. a. a. O. S. 30.——亞細亞にては Ceylon の Wedda. Andamanen の Mincopie, Sumatra の Kubu, Philippine 群島の Aeta (Negritos) 等是なり——。

濠大陸にては歐人來住前に住みたる土人は皆此種に屬せり、今も內地の砂漠には多く住せり、——

亞米利加にも亦其數少からず Cape Horn の Feuerländer, ブラジルの Botocuden, 其他 Bororó あり、中央亞米利加にも亦多し、——猶北極地方に住する Eskimo は疑もなく此種に屬す、a. a. O. 31.

(87) Bücher, Entstehung der Volkswirtschaft. S. 50. (12. u. 13 A S. 42) 經濟進化論七六頁 (經濟學研究第二〇三頁)

Roscher, N. O. des. Ackerbaues. S. 17 ff.

Derselbe, Ansichten der Volkswirtschaft aus dem geschichtlichen Standpunkte. 1878. Bd. I. S. 205.

此時代に屬する生產業は其獲る物の動物性なるか植物性なるかを問はず天然自然に存在する物を手當り任せに取り食ふのであつて、之を獲るが爲めに特別の工夫を費さず、又獲るべきものを得るが爲に種々の設備方法手段等を回らすことなく、唯だ單純に天然に存在する物を取得するに過ぎない。但し單純なる獲得と云つても多少の器具を用ゐることはある。併し器具は單に手力を以てする獲得を助けるに過ぎないのである。原始人類の用ゐた器具類は皆人間又は獸類の手足にかたどつてあるは其證據である。器具とは强められ引延され大きくせられた人間の肢體に過ぎぬとはロッシャーの名言である(88)。所謂手より口へと、其日其日を送るのであつて、獲得する食物の多い時には暴食逸居し、なき時には餓えて死に瀕することあるも、決して食料の貯蓄をしない。殆んど獸類と區別することの出來ない狀態で、其獸類と異るところは極めて幼稚なる器具を用ゐるといふことと是である。故に或學者は原始の人類と獸類との最も重要の差異は、器具を用ゆると用ゐないとにあると云ふ(89)。されば經濟を以て人類が欲望充足の爲に設けた一の秩序一の組織と解する時は、此時代には未だ經濟と云ふ現象はないと言はざるを得ない。經濟の概念に必要なる家、オイコス是れに伴ふ家計の觀念(90)は到底存在しない。

況んや此家計を經營するにノモス即ち一定の秩序規則に從つて行動するが如きことは到底是を見ないのである。故に若し嚴密に言ふ時は此時代は經濟發生以前の時代と觀る可きで經濟を組織することは此時代が進歩して次の時代に至つて初て生じたものと言はなければならぬ(91)。

(88) Roscher, Ansichten. Bd. II. S. 163—4.

Vgl. Schmoller, Grundriss, S. 192 ff. (11-12. Taus. S. 194.)

(89) „Der Mensch hat zwischen sich und die Thierwelt das Werkzeug gesetzt."

Zenker, Die Gesellschaft. Bd. I. Natürliche Entwickelungsgeschichte der Gesellschaft. 1896. S. 51.

(90) Bücher. a. a. O. SS. 21. 109. 167.

經濟進化論二九頁以下（經濟學研究第貳一八七頁以下）

前掲註（40）參照

(91) Bücher. a. a. O. SS. 21. 35.

Zenker, a. a. O. S. 72 ff.

Schmoller, a. a. O. S. 243 ff. (11-12. Taus S. 249.)

Marx, Das Kapital, I. S. 553. ff.——

Platter, Grundlehren der N. O. 1903. S. 29.—— Wenckstern, Einführung i. d. Volkswirtschaftslehre.1903. S. 77.此二新版書は共に本年(明治三十六年)夏頃の出版にして予の入手したるは十月下旬なるが爲め第二編註釋部印刷中にかゝり僅かに頁數をあげ得るに過ぎず。

第二　高度の漁獵民

此時代に於ても植物を培養し又動物を馴致することはないけれども低度漁獵民と異ることゝは欲望充足に當つべき財の遙かに豊なることゝ是れである。低度漁獵民が欲望充足に當つる爲に狩獵若くは漁業に從事するに比しては遙かに進歩した武器若くは器具の類を用ゐ之が爲に生産する財の量多く低度漁獵民に比較して遙かに豊かに欲望を充足するを得ることゝ云ふ點が異なつて居るのである。欲望充足に當つべき財の量が多いと財の一部分を貯蓄して食物を得ることの出來ない時に備へ一たび食物なき時は直に飢餓に瀕する憂を減ずることが出來る。即ち此時代に於ては一定の秩序一定の組織の

意味に解すべき經濟が稍々發生して來るを見るのである。高度漁獵民は多くは天然の豐饒なるところ例へば土地の豐饒なる所若くは山川藪澤の獲物多き所に住居して居る。

此く其性質に於ては、低度漁獵民と高度漁獵民とは大なる差異はないが、其結果に至つては甚だ重大な差異がある。何故と云へば、生産する物多きが爲に餘裕を生じ、餘裕あるが爲に之を貯蓄し、貯蓄したものは更に將來の欲望充足に當つるか、又は一歩進んで更により良き武器若くは道具類を製作し、更に多くの生産をすることが出來る樣になり、手より口へと口腹を充し腹一たび充てば頽然として眠り、獲物の無い時には全く飢餓に瀕するといふやうな狀態を脱することを得るは、人文文化の發展し得る抑々の前提條件である。餘裕の財、蓄積せられたる財は、人類が經濟上の進歩をなし得る根本であつて、此く經濟上に於て進歩をなすことが出來れば、隨つて一般文化の上に大なる進歩を來すのである。此種の高度漁獵民は今日北亞米利加カリフオルニア、アラスカ等に住み、又エスキモーの中にも之を見、亞細亞の東北地方にも存在する(92)。高度漁獵民の中殊に著しく進歩したものは多く海岸に居住して居る者である。居住して居る所に近い海が魚介に富んで居れば、海の無い所の人民に比して遙かに進歩する。是れ文明は多く海岸に於て發生する原因の一である。今日でも亞米利加の西北岸フラッテリー岬より北アトナ河に至る間、亞細亞に在つてはカムチャツカの土人、樺太島の土人の如き皆此種に屬する(93)。是等の蠻民は收穫の多き海から欲望充足の手段を得るが故に、内地に住して居つて專ら植物並に獸類を以て欲望充足に當てゝ居る人民に比較すれば、遙かに進歩して居る。他の條件が悉く同じときは、獵民よりは漁民の方が早く文明が發達し、又發達の度が高いのは此故に外ならない。又海でなく河の岸であつて、其河に魚介の富んで居る地方であれば同樣な發達あることを見る(94)。

(92) 其最も多きは北亞米利加なり、南カルホルニヤよりアラスカに至る迄の海岸と其附近地は、悉く此種の人種の住する所なり、大湖と北極洋との間に住めるエスキモーは亦此種に屬す、――悪細亞にては東北地方に多し、其最も趣味ある例は Kamschatka の Itälmenen 之れなり、然れどもこは今は死絶へたり、Grosse a. a. O. S. 65.

(93) Die Culturform der höheren Jäger erscheint in einer besonders reichen und charakteristischen F. 1. 68.

bei den Fischervölkern, welche sich längs der nordwestamerikanischen Küste, ungefähr von *Cap Flattery* im Süden bis zum Atnaflusse im Norden aneinanderreihen. Grosse, a. a. O. S. 65—66.

(94) Grosse. a. a. O. S. 66. ff.

Ratzel, Politische Geographie. 1897. S. 531 ff.

Roscher, Ansichten. Bd. I. S. 317.

Derselbe, N. O. des Ackerbaues § 10. S. 27.

拙著 Gesell. u. wirtschaftl. Entwickel. i. Japan. S. 27. (日本經濟史論第四七頁) 管沼貞風著大日本商業史第二十頁參照。

此種の高度漁獵民と雖も亦同時に植物性食物は食して居るのであつて、男女の間の分業は矢張り男は主として動物性食物を獲るに從事し、女は專ら植物性食物を獲るに從事して居ることは異らない。生產高が多いが故に餘裕を生ずる財を蓄積するばかりでなく、直接の欲望充足以外に間接に生產に從事することが出來る。卽ち此種の人民の中には既にブュヒアーの所謂種族工業が存在してゐる。彫刻製陶等の如き直接口腹を充すにあらざる物も亦生產するやうになつて工業が發生する。是等の高度の漁獵民は又種族と種族との間の財の交換に從事して商業を營むことも亦間々見る處である(95)。

(95) Grosse, S. 68 ff.

Bücher, S. 67. 68. 76. 95. 82. 拙譯經濟本論九四頁以下

並に同氏の Wirtschaft der Naturvölker 別刷の卷尾に揭げたる附錄 "Stammgewerbe" の條參照。

第三、低度の農民

低度の農民とは一部落に屬する人間は殆ど全く植物性食料の耕作並に培養に從事し、僅の特例を除いては其部落に屬するもので勞働に堪え得る者は悉く同じく植物性の生產に從事するを指して言ふ。卽ち其生活の行動の大部分は皆食料を獲得するが爲に費される時代を言ふのである。此時代は多く高度の漁獵民より稍々進步した狀態にある。多くの場合に於ては遊牧牧畜に從事する以前に在るか、又は遊牧牧畜に從事する人種よりは遙かに進步の劣つた人種が此低度の農業を營んで居る。併ながら既に前にも言つ

た如く必ずしも此の如き順序を經て一たびは必ず低度の農業の時代を經なければ遊牧並に牧畜の時代に移らないといふものでは無い(96)。此種の低度の農民にして今日現存する人種は亞非利加人の大部分南亞細亞の多くの種族・インドネシヤ人・オセヤニヤ人・亞米利加土人等の大部分である(97)。

(96) Roscher, Ackerbau. S. 54. Anm. 1.

Schmoller, Grundriss. S. 195. (11—12. Taus. S. 198.)

Knies, a. a. O. S. 364—565.

Fuchs, a. a. O. S. 27 ff.

Hahn, Haustiere u. ihre Beziehung zur Wirtschaft. 1896.

Nowacki, Entwickelung der Landwirtschaft in der Urzeit. Thiel's Landw. Jahrb. 1880.

(97) Ihre Herrschaft vereint die grosse Mehrzahl der Afrikaner, zahlreiche Stämme in Südasien, fast alle Indonesier, sämmtliche Oceanier, und endlich die ganze eingeborene Bevölkerung Amerikas, soweit sie nicht, wie die Nordweststämme, die *Eskimo* und die *Feuerländer*, bei der Jagd stehen geblieben oder aber, wie die *Peruaner* und *Mexikaner*, zur Civilisation emporgestiegen ist. Grosse, a. a. O. S. 133.

此種の農業は高度の農業と嚴密に區別せねばならぬ。農業と言へば直に高度の農業のことと思ふのは誤りである。高度の農業のみを農業とするときは無論農業の存在し得るには多少人文文化の發展した後であることを必要とするが此低度の農業は殆ど文化の痕跡も止めない人種でもかこれを營んで居るのである。殊に遊牧民に比して其生活の程度も遙かに低く其文化の度も低いのである。近來の學者は此低度の農民の營んで居る農業方法を手鍬耕作と名ける(98)。此如き程度の農業でもこれに從事するには一定の居所を定めることを多く必要とするから漁獵民が此く定住を要する農業に移り行くことは困難である。故に漁獵を營み旁ら農業を營む人種にあつては彷徨的農業とも稱すべき一種の農業を營んで居る。即ち一つの所より他の所へ常に轉住して農業を營むのである。漁獵民と雖も必しも常に全然居所不定で無く廣い範圍内にあつて凡そ夏は何れの所に赴き冬は何れの地に居るといふやうに極まつて居るもので其極まつて居る間

丈けは其所で農業を營むのである。縱し又居住を定めたにした所が、低度の農業に在つては穀芻耕作又は燒畑(99)　なぞゝ稱する耕作法は之を行ふに完全なる定住を以てすることは出來ない。何故となれば是等の方法では一たび耕した土地は次の年には之を耕さないで全く棄てゝ、來年は又丸るで他の土地を耕すのであるから、一年毎に其居所を轉換する必要がある。是は農業の技術の頗る幼稚であつて、最粗放的耕作(100)　方法であるから、僅かの間に土地の力を盡して仕舞ふ。之を掠奪耕作と稱する。一定の土地から常に收穫を得ることは、農業の技術の餘程進歩した後でなければ出來ないことであつて、低度農民の營む農業は僅かの間に地力を疲らせるから、縱し定住をしやうと思つても、少くとも年に一度は所を換えなければならぬのである(101)。

(98) Hahn, Haustiere u. s. w.

Bücher, S. 55. 57.

Schmoller, S. 132. 194—5. 234. 256—7. 368—9.

經濟進化論八一頁、(經濟學研究第一八七頁)

Hackbau に就て適當の譯字を得ず農政を專攻すると稱する某氏之を耘鋤法と譯するが如しと雖もこは頗る滑稽なり、何となれば Hackbau の特色は鋤のなきことに存すればなり、――我邦農家にて用ゆる唐鍬なるものは如何にも此の Hacke の發達したるものゝ如く見ゆ、故に予は手鍬と命名し置く、他日適當の譯字あらば訂正す可くし。――

(99) Buchenberger, Agrarwesen und Agrarpolitik. 1892. Bd. I. S. 26 ff.

燒畑 Brandwirtschaft は今日も猶亞細亞大陸の內部、南亞米利加の Steppe に行はる、其法は野立の儘草を燒て之れを肥料として茲に新なる穀種を播くなり、又山林を燒苅して畑となすこともあり。

歐洲にても山間の地方殊に獨逸の沼地に於て Hackwald, Haubergs 又は Reutfeldwirtschaft, 又は Moorbrandwirtschaft の名の下に一種の燒畑耕作を行ふ、嘗てゲッチンゲン附近に遊びしとき、時として其近郊より此燒畑の異臭を突いて到ること恰も我邦の田舍に於けるが如きものあるは予の經驗せる處なり、――我邦にては此燒畑は必ず未だ其跡を絕たざるべし、蓋し畑の字は元と火田卽ちやきはたより來るものなり　(横山由清田制篇)。

穀芻耕作卽ち Feldgrasswirtschaft とは數年間同一の土地を耕し地力竭くるに及んで後に又數年間之れを放置して草地 (Grasland) となすを云ふ、故に此法と燒畑とは併せ行ふ

を得るものとす、卽ち Grasland を再び耕作に用ふるとき其野生の草を燒き其灰を肥料とするを得ればなり、――タキトス時代の獨逸民族は盛んに此耕作法を行ひ居たることはタキトス其著 Germania に明記する處なり。

Arva per annos mutant et superest ager. Tacitus, Germania 26.

猶詳細は第二編の說明を待て、――

(100) Roscher, N. O. des Ackerbaues. S. 27 ff.

天然の爲すが儘に任せ人力（勞働・資本）を費すこと少きを粗放的耕作方法と云ひ、土地の面積に比して其收穫高の甚少き、最幼稚の技術のみを有する耕作法なり、――

集中的耕作方法とは之れに反し、一定の面積の土地より可成多くの收穫を得んとし、從て天然のみに依賴することなく人力（資本・勞働）を費すこと多き耕作法を云ふ、――

同じく人力を費す中に就ても、資本を多く用ふると勞力を多く用ふるとの差あり、我邦の如く資本を用ふること殆んどなく、之れに反して勞力の浪費濫用甚しき耕作法は、之れを勞力的集中資本的粗放耕作法と名くるも亦可なるに似たり――然れども其實は卽ち然らず、集中耕作は資本的集中を主とす――蠶爾たる農夫の勞力に待つは人爲文化の產物たる生產の要素と云はんより、寧ろ土地に比して却て全然天然力（天然の與へたる體力のみ、――知能の力は更らになし）のみに依賴すとなすを妥當とす、――故に同じく粗放的耕作なり、唯土地の面積に代ふるに人間の動物的の體力腕力を以てするのみ、――

粗放耕作は農業技術の幼稚なるが爲めなりと雖も、農業技術の進步遲々たるは國民經濟完成の今日に方りて共同・共產の遺制永く其跡を絕たず、寄合世帶的經濟組織を存するによることは殊に我邦に於て多く其例を見る也、獨立評論八・九號拙稿を見よ、山林に就ては殊に然り、――偶印刷校正の際近刊の雜誌太平洋を見るに經濟學者に非ずして此弊に着目するものあり、次の如く論ずるを見る、共同・共產の遺制を復舊せんとする一知半解の徒玩味す可き也。

○入會山亡國論

日本の農業は其肥料を雜草に仰ぐところ甚だ多し、而して此雜草を得るがため、到る處秣草山或苅山を備ふ、此秣山には概れ町村或は大字の人民が入會權を有し、隨意に己の希望する秣を採集し得るものにして、而して其入會權を有するものは、或は數大字に係るあり、或は單に一町村、或一大字に限らるゝありと雖も、之れが入會權を有するものは、秣の採集量に制限を有せざるを以て優勝劣敗の現象を生じ、出來得るだけ秣を苅取るの弊を生ず、此入會をなす山を入會山と稱す、作物既に肥料を得るにあらざれば好箇の發育をなす

を得ず、雜草亦植物たるを失はず、故に之が生育には肥料を要し、且つ綠葉を要す、若し夫れ好良の草肥を得んとせば、秣山又之を愛撫するの要あり、入會權を有するもの此理を知らざるにあらずと雖も、入會者が一同協力し規約を設けて以て秣草撫策を講ずるにあらざれば、徒らに他人をして好餌を穫せしむに過ぎざるを以て、止むを得ず出來得るだけ秣草の苅除を事とし、尙ほ之を苅り易からしむるがため、年々入會山の火入を行ふに至る、蓋し火入をなさゞれば荊棘蔓葛萠蘖繁茂して、苅取を困難ならしむればなり、斯くの如くして入會山の秣草は、年々虐げらるゝを以て、適應力の少き良雜草は次第に其跡を絕ち、肥料として價値なき萱芒等發生し、之を久ふすれば萱芒も終に生ずるを得ざるに至りて、地表露出すべし、入會山の此轍を履まざるもの殆どあるなく、只地味によりて其結果に遲速あるのみ、故に予は云ふ、入會山は國を亡ぼす最大原因なりと（太平洋一卷十一號六一、六二頁林學士三村鎰三郎）。

(101) Brentano, Theoretische Einleitung in die Agrarpolitik.

Bücher, a. a. O. S. 56. 經濟進化論八三頁、（經濟學研究第一八七頁）

Waitz, Anthropologie der Naturvölker. Bd. I. S. 406.

„So sind einige Nordamerikaner„ trotz ihres Landbaues *Wandervölker* geblieben; sie treiben ihn unregelmässig, ernten das nachlässig Gesäete ab und ziehen weiter" (Waitz). Ausserdem zwingt schon die Erschöpfung des Bodens, den sie nicht zu düngen verstehen, viele niedere Pflanzenbauer, ihren Wohnsitz von Zeit zu Zeit zu wechseln. Grosse, a. a. O. S. 134.

此種の人民に取つては其經濟上の存在に最必要なるものは土地であつて、漁獵民に比較すれば土地と人間との間の關係が遙かに密接である。又土地を重んずることが遙かに大である。而して此土地に施す耕作も一人一個で營むことは出來ない。漁獵時代に於けるが如くに、各々好む所に隨つて、欲望充足の手段を取ることは出來ない、多人數合同して生產に從事しなければならない。是に於てか低度の農民の間には共同經濟共同所有が必要である。農業は人間と土地との間を密接ならしむるのみならず人間と人間との關係を密接ならしめ、共同の土地の上に共同的の生活を營ましめるのである(102)。從て、農業民間には早くから社會的の生活が發達し、各種の社會上の組織制度の萠芽は低度農民の間に發し、其社會上の組織制度は共同的たることを必要とするから、多くは共產主義、團體共有として發達する(103)。殊に注意すべきは此時代にありては女の男に對する地位

が前の二の時代に比して大いに違ふ。漁獵時代にあつては男は男女ば女で別々に分業して生産に從事し多くの場合は男の生産高の方が遙かに多く男の方が女より遙かに富んで居る。從て男の方が女に對して權力が强い。然るに一たび農業を營むといふと農業は女が昔から營んで居るものであるから女の生産する所も男の生産するところも大した違ひが無くなつて來る。ソコデ低度農民の間には女の地位は男に對して餘程高い。共同的生活を營む農民の間にあつては其共同的生活の中で女の地位が高い。所謂母系的民族は低度農民の間に發達するものである。彼の一時社會學者や經濟學者が一般に信じて居つた母權說なるものは此低度の農民の狀態を見て唱え出したものである。併ながら此說は母系と母權とを混同するものである。又如此狀態は何れの人種に付ても最も原始の時代に存したのではない。此時代の前既に漁獵の時代があつて其時代には母系もなかつた況んや母權が父權に移つたと云ふ說は當つて居ないのである(104)。

(102) Roscher, Ackerbau. S. 53.

.....für den Ackerbauer ist der enger begrenzte Boden, welchen er bearbeitet, der wertvollste Besitz. Dieser wertvollste Besitz des Ackerbauers aber ist nicht wie der bewegliche Reichtum des Viehzüchters Sondereigentum der Einzelnen, sondern er ist, wenigstens ursprünglich, Gemeineigentum einer Gruppe. Und dieser gemeinsame und wertvollste Besitz wird von der ackerbauendcn Gruppe nicht nur mit vereinten Kräften verteidigt, sondern auch mit vereinten Kräften bearbeitet.....; *Der Ackerbau hält also die Menschen nicht nur fest,* sondern er hält sie auch *zusammen:* er besitzt eine weit grössere socialisirende Kraft als die Jagd und die Viehzuchte. Grosse. S. 134-5.

(103) Grosse, S. 136.

Hildebrand, Recht und Sitte auf verschiedenen wirtschaftlichen Kulturstufen. 1896. I Theil. S. 140 ff.

Rachfahl, zur Geschichte des Grundeigentums. Conrad's Jahrbücher. Bd. 19. 1900.

Schmoller, Gruudriss, S. 369 ff. (11—12. Taus. S. 937.)

朋齋 Gesellschaftl. u. wirtschaftl. Entwickelung in Japan S. 24—9. (日本經濟史論四〇—五三頁)

(104) 母權說に就ては後卷詳述する處ある可し此點に於て恩師アレンタノ先生並に最も愛敬する學兄グロッセ兩氏の見解共に全然私見に合致するを見るは快心の極なり一

Brentano, Concrete Grundbedingungen der Volkswirtschaft. Zeit. f. Sozial-u. Wirt-G. Bd. I. (Der wirtschaftende Mensch. S. 1—102.)

Grosse, S. 52 ff.

拙著 Gessll. u. wirtl. Entw. S. 15 ff. (日本經濟史論二五頁)

之れに反してシュモラーは巧妙なる言辭を以て母權說の破綻を拾ひ之れを未倒に歟ふに取も辯めたり、——氏の經濟原論中母權を論ずる條 (S. 236 ff.) は實に全篇中の精華と看做す可く、文辭の流麗たるは指き、其論述の一見極めて明快なる多く其權を見ず、然れども予は全然其根本思想を目して設謬なりと斷ずるに躊躇せざるなり、——猶同氏の Jahrbuch XXIII. 3. に掲げたる論文を併せ見る可し、——之れに對する私見の概概は前掲拙著中に其一部分を敍し置けり。——

René Worms の主宰する巴里發行の L'Année sociologique 1900-1901. Analyses, organisation sociale en general 欄 pp. 342-347 に拙著に對する詳細の批評を掲げ、母權と母系に關し予が所論を攻擊して曰く、——

Le recrutement de la famille et, par consequent, du clan se faisait par voie de filiation en ligne paternelle. Mais quoi qu'en dise l'auteur, à travers les faits même qu'il cite, on voit clairement que, à l'origine, la filiation était utérine. En effet quand l'homme ne pouvait acheter sa femme ou la capturer, il n'avait pas le droit de l'emmener chez lui; il ne pouvait avoir de commerce avec elle que dans la maison de ses beaux-parents et les enfants, issus d'une telle union, appartenaient à la *famille* de la mère (p. 16—17). Sans doute il ne s'ensuit pas que le régime fût matriarcal; mais *famille matriarcale et famille utérine sont choses fort distinctes; M. Fukuda parait ignorer cette distinction. p. 343.* と是れ評者の誤解なり、famille matriarcale 卽ち Mutterherrschaft の意味に於ける母權家族と famille utérine 卽ち Mutterfolge (Muttersippe) の義に於ける母系家族とは choses fort distinctes なることは、予が本文に於て說く所なるのみならず、拙著社會經濟史考に於ても既に曰に之なを明言し置きたり卽ち、——

Ferner trifft die Annahme, dass zuerst Mutter-und dann Vaterrecht geherrscht habe, für Japan nicht zu, wenigstens nicht Mutterrecht *im Sinne von Herrschaft der Mutter.* Die sorgfältige Lektüre von Kojiki und Nihonshoki, den beiden Hauptquellen altjapanischer Geschichte, lässt dagegen folgende Vorstellung viel wahrscheinlicher erscheinen. Das Uji war von Anfang an insofern immer nur patriarchalisch, als es eine der Hausvatergewalt, der *Patria potestas* des Uji-no-Kami unter-

stellte Einheit war. Es gab kein sogenanntes Matriarchat *im Sinne von Herrschaft der Mutter.* Es gab Fälle, und zwar waren sie in dem ersten Teil der ersten Periode überwiegend, wo man seine Frau nicht mit in das Haus seines Vaters mitbrachte. Jedoch ist damit keineswegs ein Matriarchat im oben gedachten Sinne bewiesen. Sondern da herrschte auch das Recht des Uji-no-Kami, *aber allerdings des Uji-no-Kami der Frau.* a. a. O. S. 16.

見る可し'予が Famille utérine. Mutterfolge (Sippe) の存在を許容し Mutterherrschaft なる Famille matriarcale の存在を否定すること最も明白一點の疑の餘る可きなきを'——思ふに予が文節明を倚び嘲語を下して wenigstens と云ひ allerdings aber と言ふが如き一言にして幾多の意味を含む可き文字を用ひたるが爲めに'獨逸人ならざる評者の誤解を惹起せしにはあらざるか'而も評者の了解の不充分なりしは却て偶々其明断透徹を示めし'其の自己の誤解して予の說なりと信ぜるものを攻擊して'賞は予が所論たる處のものを主張せるは'所謂過を見て仁を知るの類'予は佛國倘ほ學者あるを心底より喜ぶものなり'——及之全然予が所論に贊同の意を表して'却て反對の所論を予に歸して之れを吹聽唱和する人あるは予の最も悲む處なり'——伊國社會學雜誌 Rivista Italiana di Sociologia Anno V Fasc. II. (1901) に於ける G. B. de Martini の評論の如き是れなり'——氏曰く'

L'Autore (Fukuda), contrariamente a Weipert, crede che già fino dai tempi mitici esistesse in Giappone il matrimonio fra un uomo e una o più donne, mancando ogni traccia di comunione di donne e di matrimonii per gruppi, L'Uji fu fin da principio patriarcale: un *matriarcato nel vero senso della parola* è ignoto ai Giapponesi. Le donne, rappresentando una preziosa forza di lavoro, si dovevano comperare o rubare o andare a trovare nella case paterna (costume chiamato Yobai): *e i figli appartenevano alla casa della madre.*

是れ即ち Mutterfolge, famiglia uterina にあらずして何ぞや'之れを matriarcato nel vero senso (母權の意なる可し) と區別するは予の最も意を用ひし處なるに單に眞正の意味に於ける母權は存在せずして所出の子は母家に屬すに過ぎずと云ふは schöner Wiederspruch なり'之れを予が所論なりと紹介して伊國の識者を謬るは予が最も遺憾とする處なり'故に茲に一言を添ふるのみ'決して評者の好意を無視するにはあらざるなり。——

第四'　牧畜遊牧の民

牧畜遊牧は低度の農業に比すれば遙かに進歩發達した生産業である。牧畜は啻に天然に存在して居る獸畜を獲得するのみならず'自分の所有して居る獸を育てるこゝが必

F. I. 69.

要である。育てるこ言へば、一定の秩序、一定の計劃を立てることが必要である。又此の如き計劃秩序を立てる目的物たる獸は自己の所有物でなければならない。茲に於て低度の農業時代に見る能はざる特殊的所有權が遊牧牧畜時代に發生する。併しそれは唯だ家畜に對する所有權ばかりで其外には及ばない(105)。此時代は低度農業時代こ違つて男の地位が女の地位に比して遙かに高い。それは男の生産する方が女の生産する所より遙に多いからである。此種に屬する人種は今日現存して居る野蠻人の中ではジャクート人及サモー人、ツングー人、チュクチエー人等、西藏の高原其他所謂亞細亞ステップに彷徨して居る人種等である(106)。此時代に於ても決しも全く植物性食料を絶たない、卽ち女は農業に從事して居る、併ながら遊牧牧畜時代の考に依るこいふこ、農業こいふものは甚だ賤むべきものであつて、一人前の人間のすべきことでない、こ言ふものは其時代に於て之を遊牧牧畜から得るものに比すれば遙かに生産が少いからである、であるから此賤むべき農業を營んで居る女こ云ふものは、亦賤しきものこ看做されてある。

(105) Grosse, S. 99.

Bücher, S. 21. 27. 51.

經濟進化論六二頁（經濟學研究第一八七頁）

Hildebrand, a. a. O. S. 30 ff.

Schmoller, S. 364. (11—12. Taus. S. 892.)

(106) Nirgends hat sich der Nomadismus mächtiger ausgebreitet als in Asien. Die Turkmenen, Kirgisen, Mongolen, ein grosser Theil der Thibetaner, die Jakuten, Samojeden, Tungusen, Tschuktschen,—alle die zahllosen Stämme, welche in den ungeheueren Steppen von dem tibetanischen Hochlande im Süden bis zu dem Eismeere im Norden, von den Küsten des nördlichen Stillen Oceans im Osten bis zu dem Kaspischen See im Westen wandern, leben von der Viehzucht. Ausserdem hat sich in den Nilgiri-Bergen Südindiens eines des einseitigsten und altertümlichsten Hirtenvölker erhalten, die Rinder verehrenden Toda. An die nordasiatischen Rennthierzüchter schliessen sich die einzigen Nomaden Europas an, die Lappen. Den Uebergang von den asiatischen zu den afrikanischen Hirten vermitteln die Araber, deren räuberische Horden aus ihren heimatlichen Wüsten weit über den nördlichen Theil des benachbarten Continentes

ausgeschwärmt sind.... In dem Graslande am oberen Nil weiden die Dinka, Nuër und Bari, den Ackerbau verachtend, ihre unafsehbaren Herden. Die Bergtriften um den Kenia und den Kilimandscharo bieten den gefürchteten Masai reiches Futter für die Rinder....Oestlich von ihnen breiten sich die Völker der Galla und Somal mit ihrem Reichtume an Kamellen, Pferden, Rindern und Schafen bis an das Meer aus, Kaffern.....Hottentotten.

In Amerika gab es vor der Ankunft der Europäer kein Hirtenvolk. Erst seit der Einführung des Pferdes haben sich einige Völker in den südlichen Pampas in der Richtung des Nomadismus entwickelt. Grosse, S. 89—90

前既に言へた通り遊牧と言つても決して無限に定りのない廣い範圍を彷徨するので無く、漂泊して居る間に一定の範圍がある。併し之れを低度の農民に較ぶれば、土地との間の關係は頗る薄弱であつて、己と離れ難い關係のある物は其飼つて居る獸ばかりである。從つて遊牧牧畜時代には共同經濟或は共產主義は農民に於ける樣でなく個人的の經濟の觀念が早く發生する。此種の人種は牧畜に從事して方々に漂泊して居るから、自然に他の人種と衝突することが多い。其結果低度農民よりは遙かに武事に長けて居る。戰爭或は奪掠が多く行はれる。初めて歷史に現はれて來た時のチュートン人は卽ち此時代にあつたので、人民の一半は遊牧に從事し一半は戰爭に從事するといふ狀態で、女若くは老衰者のみが田畑を耕して居つた(107)。此時代は低度農民時代に反して母權でなく父權が早く發達して居る。所謂家長制度、嚴密に言へば父權的家長制度は牧畜民の間に早く發生するのである(108)。女は此時代に在つては多く家畜と同じやうな所有の目的物であつて、最も辛い農業勞働に從事する。此時代には工業は殆ど之を見ない。商業は時に發生するを見る。常に彷徨漂泊して居るから他の人種と相接觸する事が多い。接觸する多ければ或は戰爭するか或は平和的貿易をするか何れかをするやうになつて、所謂旅商隊の形に於て商業を營む(109)。此時代には氏族の制は發達しない、所謂大家族の制度が行れて居る。大家族は氏族に比すれば少い人數から成り立つて居る團體である。其大家族の中にては男の權力は絕對無限であつて女は殆ど權力を有たぬ。又此時代には所有の財の不平均、卽ち貧富の懸隔も亦發生する。獸に對して個人の所有がある以上は、

牧畜の業に巧みなる人間又は戰爭に長じて敵の獸を奪掠するものは多く獸を持ち、然らざる者は僅かの獸しか持つて居らないといふやうになつて、平等が無くなつて富める者は益々富み、貧なるものは何時までも貧である。又屢々敵人と戰爭するから自然に其全體を率ゆべき大將が必要になつて來て、是から政治上の權力が發生する(110)。我日本上古の事はよくは分らないが、日本の國土へ移住して來た頃の大和民族は元の低度農民であつた樣であるが、之れが高度農民に發達する間に於てチュートン民族に同じ樣に漸次此彷徨的生活を營んだものと見へる。但しチュートン民族と異る處は、一は牧畜遊牧卽ち獸類を逐ふ遊泊の生活を送つて歐洲へ渡つて來たが、大和民族は漁類を逐うて遊泊して來たらしい。換言すれば、漁業的遊民又は遊漁と云ふ樣な狀態に於て日本へ渡つて來たものであらうと思はれる(111)。

(107) Tacitus, Germania.
Roscheh, Ansichten. Bd. I. S. 207 ff.
Inama-Sternegg, Deutsche Wirtschaftsgeschichte. S. 10 ff.

Brunner, Deutsche Rechtsgeschichte. S. 56 ff. (2. A. S. 81,)

(108) Schmoller, Grundriss. S. 239. (11—12. Taus. S. 245.)
Grosse, S. 127.
Roscher, Ackerbau. S. 31 ff.
Spencer, Principles of Sociology. 1896 vol. III. p. 423.

(109) Bücher, S. 70—76.
„Wirtschaft der Naturvölker"
Sombart, Der moderne Kapitalismus. 1902. Bd. I. S. 189—181.
Speck, Handelsgeschichte des Altertums. 1900. Bd. I. S. 4. ff.
Roscher, Ackerbau. S. 36.

(110) Roscher, Ackerbau. S. 40.
Schmoller, Grundriss. S. 239 ff. (11—12. Taus. S. 245. ff.)
Grosse, S. 99 ff.
Spencer, Principles of Sociology. 1896. vol. III. p. 331 et seq.

(111) 拙著 Gesell. u. wirt. Entw. S. 5—10.（日本經濟史論第八—一四頁）

第五　高度の農民

高度の農民の低度の農民に比して違ふところは、均しく農業に從事するも、其農業は一部落全體が之に從事することを要しないで、一部分のみが之に從事し、他は農業以外殊に直接に欲望を充足する以外に他の生産業に從事することが出來、是より工業其他種々の業務が發達し來ると之れである。又一部の人の生産した物を以て優に全員を養ひ得るは勿論、低度の農民に比較すれば、生産高が遙かに多い、又農業以外の業務に從事するから、自然に分業が、啻に男女間のみならず色々の方面に於て起つて來る。是から段々發達して遂に專ら工業に從事する者、專ら商業に從事する者が發生し、分業の中職業の分岐を招致する。此時代には共同的の耕作或は共有共産は段々必要が無くなつて來る。一部の人の生産高で優に全部落を養ふことが出來れば、多勢が共同して耕作に從事しないでも、各人が獨立して耕作に從事するを以て足れりとする。又た分業が發達すると皆が協同の土地を所有し共同の耕作を營むことは不都合になつて來て、氏族の制度は漸次に破壞して少人數から成立つ團結が經濟單位として經濟行爲に從事するやうになる(112)。

(112) Grosse, S. 231 ff.
前掲拙著 S. 64.ff　（日本經濟史論一〇六頁）
Schmoller, S. 243—246. (11—12 Taus. S. 249—252.)

以上述べたところは決して有機的發展の階段では無い。併しながら茲に疑を容れないことは以上の中、第一低度の漁獵民は最も幼稚な生産の形態、第五が最も進んだ形態であることである。第一が最始で第五が最終であるといふと丈けは疑を容れない。唯其中間に位して居るものは、其所或は其人種の狀態に從つて必ずしも一定の順序を經るものでは無い。例へば低度の農民は果して高度の漁獵民から進歩して來たものであるか、或は牧畜時代の人間が更に退化して低度の農民になつたか、或は又牧畜民は低度の農民よりは進歩の劣るものであるか無いかは、其所其時其人種特有の事情に隨つて異るので一概に斷定することは出來ない。殊に又遊牧牧畜と一概に言ふも、遊牧が先であつたか牧畜が先であつたかと言ふに、牧畜の觀念無くして遊牧に從事した人種も澤山ある。少

じも獸を飼育することをしないで、大きな範圍の間に唯だ自然の儘に獸の存在して居るを轉々して驅り集めて居る時代もある。此の如き時代から一定の秩序を立てゝ牧畜を營むやうになるには或は一たび農業に從事して、爲めに一定の秩序を經て植物の種子を蒔き、蒔いた種子から收穫を得るといふ秩序的生産方法を學んだ結果、牧畜を營む樣になつた場合もあるであらう。併し以上を通觀すれば粗ぼ次の如く言ひ得ると思ふ。

最も幼稚な第一は經濟といふ秩序或は組織は少しもなく、唯だ各人が飢に迫れば、植物性なり動物性なり天然に存在して居る物を取て食して居る時代。第二は一定の道具を用ゐて稍秩序規則を以て狩獵又は漁業を營んで、欲望を充足して居つた時代、並に手鍬耕作といふ形に於て營む最幼稚な農業の時代。其狩獵若くは漁業は第一の時代に於て男が營んで居つた動物性の食料の探求に一定の秩序が出て來てから發生し、農業は女が營んで居つた草根木皮又は菓實の探求を一定の秩序を立てゝ營む樣に進化したものと見るべきである。第三は穀類耕作農業并に漁獵業が又稍進歩して、一定の牧地を定めて此處に獸を放養する時代。第四は正當なる意味に於ける農業并に牧畜を營む時代。是は第二、并に第三からして各々發達して來たものである。第五は最も進歩せる農業の時代に進んで工業并に商業の發生して來る時代である。以上の如き區別を定めれば稍ゝ發展史的に分類したものと看做すことが出來るであらう。併しその何れにしても、此區別分類は生産の形態、卽ち財を獲得するの手段方法のみからして下した經濟組織の分類に過ぎないのである。

第二章　交換の形態より觀たる經濟組織の發展

此說は千八百四十八年に出版した現在並に將來に於ける經濟學といふ書中にブルノ・ヒルデブランドが初めて唱えた所である(113)。氏は經濟組織の發達を分けて三つの階段とする。第一は自然經濟時代　第二は貨幣經濟時代　第三は信用濟經時代是である。

(113) 此書に關し Lippert (Handwörterbuch d. Staatsw. Bd IV. S. 1200) の言ふ所を摘錄せ

ば下の如し——

„Die Nationaloekonomie der Gegenwart und Zukunft. I. Bd. Frankfurt a/M. 1848.,

,Den Kreis der historischen Schule welcher der Verfasser angehört, erweitert er in vorstehendem Werke insoweit, als er, neben eingehender kritischer Würdigung der verschiedenen nationaloekonomischen Schulen, die wirtschaftlichen Entwickelungsgesetze der Kulturvölker von der ethisch-politischen Seite aus betrachtet. Die Parallele, welche er, S. 17 ff., zwischen Lockes Rechtsphilosophie und den Physiokraten, zwischen Kants Rechtslehre und dem Industriesystem zieht, beweisen, wie tief er in seine Materie eingedrungen. Von Bedeutung sind seine anti-sozialistisch—kritischen Ausführungen über die Engelssche Kritik der Nationalökonomie, nicht um ihrer selbst willen, da sie von sp teren Kritikern Engels überholt sind, sondern weil seine Kritik des Engelsschen Sozialismus die erste aus einer deutschen Feder war. (sic!) Bei „Friedrich List und das nationale System der politischen Oekonomie" ist nur zu bedauern, dass in der scharfen Kritik der Lehre Lists dessen grosse Verdienste um dem Aufschwung von Handelspolitik, Zolleinigung und Verkehrswesen, welche er durch seine Agitation vorbereitet, von Hildebrand nicht genug gewürdigt worden sind, obgleich dieser selbst ein gemässigter Schutzzöllner war.

猶 Knies は其史觀經濟學論に於て屢々本書に批評を下せり——(1. A. 3. 8. 27. 159. 194. 2. A. S. 12. 35 ff.)

Ashley, Eng. Economic History and Theory. vol. 1. Pt. I. 3. E. 1894 p. 43 et seq. 參照。

第一の自然經濟時代は之れを二つの階段に分つ。第一'自己の欲望は又自己の生產するものを以て悉く之を充す'之を自足經濟と云ふ(114)。第二は既に自足經濟の狀態を脫して各經濟單位間に多少の流通はあるけれども其流通たる貨幣の媒介を待つことなく現物の交換のみを營むもの'卽ち當物交換時代(115)' 物と物とを直接に交換する時代是である。ヒルデブランドは自然經濟と云ふ語を第一の意味で無く第二の意味に用ゐて居る。併し貨幣の媒介無く物と物との直接交換は自足經濟と離る可からざる現象である。何となれば'貨幣を用ゐないで物と物とを直接に交換するは非常な手數面倒を要し充分に之を行ふに至るもので無い。卽ち貨幣の媒介の無い時代にあつては'財の獲得方法としては交換は殆んど行はれないので'主として自己の生產を以て滿足して居つたのである。

從つて貨幣の存在せざる直接交換時代なるものは、要するに自足經濟時代と實際に於て區別することは出來ない。唯だ理論の上に於ては區別し得るが、直接交換は僅かな範圍內にしか行はれないので、多少の交換ありとも、大體の性質は矢張り自足主義たることを免れない。故に之を自足經濟の一部と看做して差支ないのである。

(114) 自足經濟なる成語は予の私案に出づ。Bücher 其他諸氏 selbstgenügsame Wirtschaft なる文字を用ゆることあれども、多くは自然經濟 Naturalwirtschaft なる文字を此狹義の概念に向ても使用するが如し。——其他 Sombart の Bedarfsdeckungswirtschaft. Schäffle の Unterhaltswirtschaft 又は Aristoteles の狹義に於ける Oeconomica は皆同一義と解す可し。——Hildebrand 以下 Naturalwirtschaft なる文字を用ゆるもの其實狹二義あることを區別せるもの少し。——明瞭に此區劃を立つることは予これを Philippovich に得たり Grundriss, S. 19. 曰く。——

Das Wort *Naturalwirtschaft* ist doppelsinnig. Es kennzeichnet einmal einen Zustand der Wirtschaft ohne Verkehr, in welchem die unmittelbare Versorgung der Glieder der Wirtschaftsgemeinschaft mit Gebrauchsgütern aus dem eigenen Wirtschaftsbereiche erfolgt. In diesem Sinne spricht man davon, dass auch heute noch die ländliche Wirtschaft, insbesondere der Bauern, namentlich im Gebirge, einen naturalwirtschaftlichen Zug aufweise, weil hier ein nicht unbeträchtlicher Theil der eigenen Produktion zur unmittelbaren Deckung des eigenen Bedarfs dient.

Sodann aber versteht man unter Naturalwirtschaft jene Erweiterung der Wirtschaftsführnng, bei welcher bereits Arbeitsleistungen oder Güter andere Wirtschaften erworben werden, dieser Erwerb aber sich in den Formen des unmittelbaren Güteraustausches vollzieht.....

Entscheidend ist aber, dass man *die Naturalwirtschaft nicht* wie Hildebrand *als Wirtschaft mit Naturalverkehr,* sondern in der zweiten Bedeutung, als *sich selbst genügende Wirtschaft* betrachtet. Philippovich. S. 20.

(115) 當物交換經濟は當人交換經濟と相對立す可きものにして共に全く予が私案に出る術語なり。——更らに適當の字句あらば躊躇なく改訂す可し。——但し其意味丈けは此等の文字によりて充分に言表はさる可しと信ず。——殊に當物と當人との區別は、從來極めて漠然なる說明を存せるのみなりしが、今予の說明の方法によりて其間非常に相違する處あることを明瞭となれりと信ず。而して當物交換を自足經濟と分ち此二者を以て自

然經濟なりとなすによりて初めて自然經濟の眞意を發揮し得べきものなり。——

近來の學者は自足經濟又は自然經濟を稱して孤立經濟又は鎖封經濟と言ふ(116)。自足經濟にせよ直接交換經濟にせよ、自然經濟の行はれる所に在つては、流通は甚だ制限せられたもので、分業も亦殆ど存在しない。各經濟單位の所有する財は、直接に欲望を充足するに供せらるべきものを主とし、自己の生産した物を以て直ちに自己の消費に充てることを以て主眼とする。之を自然經濟と名けた理由は自然の儘に欲望を充足するので、欲望充足の爲に色々な人爲的の秩序或は方法手段を施すこと少く、殊に貨幣と云ふ人爲的の媒介を少しも要さないで、欲望充足は全然自然の命ずる儘に、其生産したものを直ちに消費するのみで、人爲的に生産と消費との間に距離を設けたり、又時間の上から懸隔を附けることのないと云ふ意味で、最も克く此時代の經濟組織の特徴を表して居る言葉である(117)。

(116) 孤立（又は單獨）經濟 isolirte (individual) Wirtschaft とはゾムバルトの名くる處にして鎖封經濟 geschlossene Wirtschaft とはブュヒアーの名くる所なり、——

Sombart, Der mod. Kapitalismus. Bd. I. S. 59.

Bücher, a. a. O. S. 108.

(117) 金井延博士は自然經濟に廣狹の二小分あることを說かず唯だ之を以て當物交換 Barter と同一義なりと前提し、此前提よりして獨語の Naturalwirtschaft を英語に Natural-economy と譯し將亦更に之れに唱和して邦語に自然經濟と譯して顧みざる人あるを非難せらる（社會經濟學第六一六頁）、——而して博士は之れを邦譯するに實物經濟なる語を以てす可しと主張さる、Naturalwirtschaft を natural economy と譯するは近時の事にして米國の學者の多數の如きは未だ Naturalwirtschaft の眞意を悟らざるが故に之れを Barter economy 又は payment in kind と譯すれども其極めて不充分なる譯語なるとは疑を容れず (Ashley, P. i. p. 43) 獨り Cunningham, (Growth I. 22. 106, 457) Ashley (P. 2. p. 395) の如き最近の思想界に立つ人は皆之を Natural economy と譯するが故に共に金井博士の非難を辭する能はざる可く、本邦に於て自然經濟の文字を用ゆる人士は予多く之れを知らざるも、少くとも予一人丈けは勞働經濟論以來此語を使用して毫も顧慮する所なければ同じく金井博士の叱斥を免るゝ能はざる可し。

予の自然經濟なる文字を用ゐて顧みざるは決して金井博士の思ふが如く Natural eco-

nomy を飜譯したるにあらず Naturalwirtschaft を飜譯したるなり而して其理由は本文に述べたるが如し、――金井博士は經濟現象は悉く人爲的のものなれば之れを自然と稱するは誤れり、又社會經濟と雖も自然の法則に支配せらるゝ點より見れば、何れか自然經濟ならざらんと云ふを以て理由とせらるゝが如し、――是れ非常なる誤解なり、――玆に自然經濟と云ふときは其反對は貨幣經濟なり而して之れを兩分する標準は主として財の交換交通より見たるものなり（博士も亦交易の媒介を標準とする社會經濟(?)の種類なる章中に之れを論ず、――卽ち金井博士の語を藉りて云へば或點より論じて爾か云ふことなり、尤も凡ての點より見て爾か云ふも亦妨なきが如し、例へば自然人と云ふも決して全然人爲的文化の存在を否定するにあらざるが如し、猶金井博士自ら自然なる語の中に人爲的のものを含みて論ぜらるゝの例は四八七頁以下生產の三要素自然の條下に就て之れを知る可し卽ち『勞力に依りて生產され而して後始めて人類の使用に適するに至るものの材料』は金井博士に據れば自然其ものゝ第二種類なり）、之を其交換交通に就て見るときは自然的欲望充足の道によるか一步進むも猶自然的當物交換を以て滿足するものと此交換交通を媒介する一大要具たる貨幣なる人爲的の物を標準とするとは其間儼然たる區別の存するものありて一を自然と云ひ他を人爲的の最も著明なるものに就て貨幣經濟と云ふは其當を得たるものなりと云はざる可からず。――

而して金井博士が用ゆる實物經濟なる語は、博士が攻擊せらるゝ用語法よりも猶非難を免れざるが如し、――實物經濟と云ひて貨幣經濟と分つは前述の如く折角 Naturalwirtschaft なる概念を以て從來經濟學者の說きたる淺薄なる Barter の說明に勝り且之れを包含する一新概念を起したるヒルデブランドの苦心を堙滅するのみならず、――貨幣と實物とを相對峙せしむるが故に、恰かも貨幣は實物にあらずとの意を表するが如き誤解を起す可し、――是れ決して完美なる譯語にあらざるなり。

Vgl. Philippovich, S. 20 Anm. zu 3.

然るに以上の時代が進步して貨幣が一般に使用せられ、一般の交換要具就中支拂の要具となるに、自己の消費に充つべき物必ずしも自己之を生產することを要しないで、他の經濟單位から之を得ることが出來又自己は必ずしも自己の消費に充てることを以て目的としないで生產に從事する、其生產したものは之を他人と交換して與へるやうになる。

貨幣は既に第一編に於て說明した如く、一般の交換の要具又は賣買の要具であり又一般共同に認められた價値の尺度であり、價値の保藏要具であり、一般の支拂要具である。

是等の觀念の中で以て何れの觀念が最も早く發達して來たかといふに其れは支拂の用に供するといふことを是である(118)。此の如き一般の支拂要具が生じて來ると總ての物の生産は此一般の支拂要具に換えることを目的とするやうになる。必ずしも己に要しない物でも先づ貨幣に換える目的を以て生産して置くといふことになり從つて自然分業が生じ分業が進歩して各自其力に應ずるもののみの生産に從事することが出來る。貨幣が存在しなければ自分に要しない物を生産することは頗る危險で自分の生産して餘つて居る物を果して他人が買つて呉れるか呉れないか分らない。又買つて呉れることは分つて居ても之に換えて與へられる物が果して自分の要するものであるか無いか保證せられない。然るに一度貨幣が存在すれば自分に餘つて人に與へる樣に思ふ物を先づ貨幣に換へて置く貨幣さへあれば自分の要する物は之に換えて他の經濟單位から何時でも得ることが出來る。此の如く總ての生産は必ずしも生産物其物を目的としないで貨幣を得ることを目的とし貨幣さへあれば何時でも何物でも欲望充足に當つてきものは換えて得ることが出來るやうな經濟組織を稱して貨幣經濟と言ふのである(119)。

(118) 交換の要具と支拂の要具は必ずしも合致せず猶後卷の詳述を要す。

Knies, Geld. 2. A. 1885. S. 9. 11 ff.

Simmel, Philosophie des Geldes. 1900. S. 29—57. (3. A. S. 30-61.)

Dem Ursprung nach bedeutet das deutsche Wort *Geld* nicht *Das was gilt* im Sinne der „allgemein giltigen" Waare, sondern so viel als schuldige Leistung, das was vergelten soll; das wodurch mit Vieh, Frucht, Pfennigen ein *Entgelt* für Empfangenes geleistet, *womit* bezahlt wird. Knies, a. a. O. S. 9. 猶 Menger, Volkswirtschaftslehre S. 254 (gelt=Vergeltung, Abgabe, Lösung). (2. A. S. 254.) 并に Goldschmidt, Handbuch des Handelsrechts 1. A. I. S. 1073 n. 6. S. 1095 n. 18. を併せ見る可し我邦俗語の「代」并に漢字を援用せる幣（イヤシロ）の意義併せ考ふ可きなり。——

(119) 貨幣經濟の特徴に關しては近來ジムメルの研究（前揭書）殊に周到深遠なるものあり——本文述ぶる所の多くは極めて淺薄なる表面上の事に過ぎず——後編經濟心理論の下に於て詳述する所ある可し——尙假りに拙稿企業心理論（內外論叢二ノ二）を一讀し置くを可とす。

1 たび貨幣經濟が起つて來ると流通が容易に行はれるやうになる。交換が輙く行は

れると與へる物とは常に必ず全然均一のものであることを保障することが出來る。而して又之を保障するが爲めに色々な經濟上の制度が起つて來る。即ち自然經濟時代に對しては貨幣經濟時代は嚴然區劃の出來る一つの時期であることは之れを以ても見ることが出來る。

然るにヒルデブランドは第三に信用經濟時代といふものを擧げたのは其當を得て居らない。何故といふと信用經濟は貨幣があつて、初て行はれるので、若し今日の信用經濟から貨幣といふ土臺を取去れば信用は行はれない。ヒルデブランドは貨幣經濟時代は信用經濟時代に移る一つの過渡に過ぎない、人間の道德が進歩して相互の信義が發達すれば貨幣といふ媒介無くして物の交換を自由に行ふことが出來ると言ふが(120)、若し斯う云ふことが行はれるとすればそれは再び元との自然經濟に歸るの外は無いのである。唯だ現金を拂渡さないで之に代えるに小切手手形其他有價證券又は帳簿上の貸借を以て決濟することは、一々貨幣の授受をすることに較ぶれば非常な進歩には相違ない。併ながら是等信用要具たる小切手手形帳簿上の貸借は貨幣といふ共同の價値の標準があれば こそ流通するのである。貨幣の價に見積り貨幣の數量で言顯はすことが出來るからこそ今日のやうな色々な信用の制度が行はれるのである。又貸借の殘高といふものは要するに現金を以て授受するといふ最後の手段が存在すればこそ、中間は少しも貨幣を用ゐることなく行ふことが出來るので貨幣といふ一般共同の支拂要具が無ければ最後の決濟に方つては、再び直接交換時代と同じになる外は無い(121)。故に今日の信用が非常に進歩した時代を目して信用經濟時代と言ふことは一の譬喩的の言葉として用ゐるは差支ないが、自然經濟に對して貨幣經濟時代が嚴然たる區別を持つと同じ意味に於て、信用經濟を貨幣經濟の進んだ新らしい一の階段とするは穩當でない。信用經濟とは、要するに貨幣經濟の最も發達した形態として見るべきもので、全く別の時期に屬するものではない。信用とは給付と反對給付、與ふる者と受くる者との間の期間を隔つるから來るのであることは既に言つた通りで、唯だ期間を隔つる丈けで、最後には貨幣が授受されることを信任して行はれるのである。故に貨幣を其時直ちに授受しないから貨幣を要さないのであると云ふは速斷である(122)。

(120) In der Beurteilung der Kreditwirtschaft irrt er (Hildebrand). Die Kreditwirtschaft bezieht sich in letzter Linie immer wieder auf Geldleistungen und eventuell auch auf Naturalleistungen zurück. Während nach Hildebrand „die Zustände der Geldwirtschaft nur den Uebergang bilden zur Kreditwirtschaft, zu dem Umsatz menschlicher Ezreugnisse gegen das persönliche Versprechen auf Treu und Glauben und auf Grund moralischer Eigenschaften" *löst sich der Kredit in Wirklichkeit niemals von seiner materiellen Unterlage los.* Er steht nur im Gegensatz zum Waarverkehr, indem er die zwei Akte des Tauschverkehrs, Leistung und Gegenleistung, zeitlich zerlegt. Er schafft auf diesem Wege die Möglichkeit von Kompensationen, z. B, durch in der Zwischenzeit entstandene Geschäfte mit umgekehrter Stellung der Kontrahenten, aber er hebt nicht das Geld als Zahlungsmittel auf. Philippovich, S. 20.

猶 Knies, Geld. 2. A. 1885. S. 5 ff. を參照するを要す。

(121) 出納簿は主として支拂要具としての貨幣の力を眼中に置き其價格の標準并に價値保證要具たる能力を看過するより來る。

Knies は (Geld S. 148 ff.) キイネスの如きすらも猶此種の誤を免せず Geeigneter noch als edle Metalle, und in der That der an sich beste Wertausdruck ist das Zeichengeld, das von Eigenwert

möglichst frei ist.....(Geschichte des röm. Münzwesens S. VI,) と云へるを攻擊して僅す所なし'——その全然見解を回ふするを要なり'——

Knies, は猶曰へ'——

So einfach und selbstverständlich dies (貨幣は其自身經濟上の價値を有せざる可からざるの事) klingt, so wichtig ist es doch. Ein grosser Theil der Misverständnisse, Irrungen und Thorheiten in der Lehre und Praxis des Geldwesens hat darin seinen Grund, dass man unberücksichtigt liess: der Wert eines Gutes könne nur durch einen anderen Gegenstand von Wert geschätzt und gemessen werden. Mag sich also sonst herausstellen, was da will, Geld in dem Sinne, dass durch es wirtschaftlicher Wert zur Vorstellung gebrächt, abgeschätzt und bemessen werden soll, kann nur ein Wertgegenstand, (also nicht eine blosse *Anweisung* auf ein bestimmtes Güterquantun und *nicht* ein blosses Symbol, Zeichen für ein Wertquantum) nur eine Sache mit eigenem wirtschaftlichen Wert sein.——Es darf unbedingt als ein selbstverständlich absurder Gedanke gelten, dass wir den wirtschaftlichen Wert eines Hauses u. s. w. etwa in einem Quantum Luft, Wolken, Tageshelle u. s. w. oder in blossen Grammen, Litern, nach geographischen Meilen, in Graden Celsius, unbenannten Zahlen u. dergl. sollen bemessen können. Knies, a. a. O. S. 148—149.

論法明犀銳利能く紛々たる俗論を一掃するに足る予の全然唱和する處なり、

(122) Knies Der Kredit. 1879 II. S. 205 ff. に詳細の批評あり、――企業心理論參照、――猶後卷信用の條下に詳論を試む可し。

第三章　生産と消費との關係より觀たる經濟組織の形態の發展

以上生産の形態并に交換の形態より觀て經濟組織の發展順序を叙述したが、茲に此生産并に交換の消費に於ける關係から、更らに廣く研究した說がある。それは千八百九十三年に公けにした『國民經濟の成立』に於てカール・ブュヒアーの論じた所で、今日一般に最も汎く學者の採用する處となつて居る說である(123)。是れより先グスタフ・シュモラーは社會的團體殊に政治的團體は何時も必ず之に伴ふ經濟團體を有して居る、社會組織の史的發展は又經濟組織の史的發展であると云ふ考から、第一村落經濟、第二都市經濟、第三領域經濟、第四國家經濟の四の發展の階段を主として獨逸の歷史に就て研究した(124)。ブュヒアーの說も亦之れに似通つて居る處がある、唯彼は獨逸のみに限らず一般に適用すべき發展階段を分類するを目的とし、政治團體は經濟團體に密接の關係ある所以を、生産消費間に於ける關係の異るより來るとして說明し、經濟組織の發展を三つの時期に區劃して論じて居る。第一は鎖封的自足經濟時代卽ち家屬經濟並に莊園經濟時代、第二は都市經濟時代、第三は國民經濟時代是である。

(123) Karl Bücher, Entstehung der Volkswirtschaft. Vorträge und Versuche. 3. A. 1901.
同上英譯、Industrial Evolution by S. M. Wickett. London 1901.
同上佛譯、Etudes d'histoire et d'économie politique avec preface par Prof. Pirenne. Bruxelles 1901.
同上和譯、樋田保之助氏譯『經濟的文明史論』大正十年一月再刻出版
史的研究經濟本論（後經濟進化論と改題す）福田德三譯述雜誌經濟世界第十一號（三十五年十二月）以降綴揭、（經濟學研究第一八七頁）

猶本文の叙述は私見を加へたる所少からず、例せば經濟單位の發展を中心として論ぜるが如きはプュヒアーの說かざる處にして、予の所信に基きて說明を加へたるものなり。

(124)　本論に先づ Schmoller 自身の編纂にかゝる Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reiche. 第八卷十五頁 (1884) 以下に公けにし、近來に至り同氏の論集 Umrisse und Untersuchungen zur Verfassungs—, Verwaltungs—und Wirtschaftsgeschichte besonders des Preussischen Staates im 17. u. 18. Jahrhundert. Leipzig 1898. S. 1—59 に收錄せらる。——

本論に英譯あり Ashley 其の經濟名著集 Economic Classics の一冊として 1896 MacMillan 社にて出版せり。——

佛國の Revue d'economie politique にも其大要の解說を掲げたり、——

猶シュモラーの經濟原論 S. 277—322. (11—12. Taus. 284—345) を參照す可し。

第一期は交換全く存在せず純然自己の消費する物のみを生產し生產者と消費者と全く一致する自己生產時代である。第二期は所謂顧客生產卽ち註文を受けて初めて生產に從事する時代で、或は當人交換卽ち人と人との直接交換の時代と言つても宜い(125)。生產せられた財は直ちに消費者の手に移り其間に中間媒介者存在せざる時代である（當物交換は勿論當人交換の一種である）。第三期は生產は主として他人の爲にし、生產せられた財は規則として、直ちに消費者の手に移らず、中間媒介者の手を經る時代で、流通の發達した市場生產の時代である。

(125)　當人交換なる語は全く私案に出で顧客生產時代の眞相を表はすに適すと信ず。予は之れを以て當物交換卽ち Barter と相併用し而して當物交換は當人交換の更らに幼稚なるものなるの理を明瞭ならしめんことを欲するなり。——

クニースの用ゆる interpersonaler Tausch 幷にジムメルの用ゆる interindivideueller Tausch なる語は稍々予の用語に近きものにして其意義一層深博なるものなり註 (128) 參照。

第一節　自足經濟

自足經濟時代にあつては經濟單位と經濟組織とは全く同一で、血緣に基いた氏族又は

大家族巨等が經濟單位たると同時に經濟組織である。此經濟組織は全く鎖封孤立して少しも他の經濟單位と相涉らずして其氏族家門の中で要する物は悉く其氏族家門の力を以て生産し生産した物は直ちに其家門内で消費して仕舞ふ。經濟行爲は始から終りまで悉く同一經濟内に起り又終る。純然自足的で少しも他に求むるところ無く生産消費間に中間者は存在しない。又經濟と企業營業と家計は全然區別することが出來ない。此くの如き時代にあつては人類は一般に交換を嫌ふ。何故かといふと一般の認めた價値標準即ち貨幣が存在しないから交換に當つて非常な不便があるのみならず個々交換しやうとしても非常な損と煩雜を招く虞がある。又そればかりで無い幼稚な人間に在つては勞働の結果生産した物を自我の一部分とする考を脱しない。之を離して人に渡すことは恰も自分の身體を割いて人に與くるやうなものといふ觀念を持つて居る(126)。故に交換が發生して後も之を行ふには嚴重な儀式を用ゐて證人の面前殊に神の宮の境内で爲すといふやうにしたので(127)　從來の經濟學が說く樣に人間は天性生れながら交換をしやうといふ傾向を持つて居るもので無いのみならず却つて其反對に交換を避けやうとしたものである(128)。

(126)　企業心理論第一至十六頁（經濟學研究七五一頁）參照。

(127)　後段註(148)を見よ。

(128)　Bücher, S. 71. 109.

Gide, p. 207.

Tarde, Psychologie économique. 1902. 2. T. p. 346 et seq.

タルドは此理を兒童の心理に就きて次の如く說明せり。——

Une chose manifeste, pour qui a observé les enfants, c'est que l'échange n'est nullement un fait primitif dans leurs rapports mutuels. En cela, ils resemblent parfaitement aux sauvages. L'enfant que séduit la vue d'un objet en la possession de l'un de ses camarades, cherche d'abord à se le faire donner——ou à le voler par ruse ou à le prendre de force. Il est né voleur, pillard, donaetur——surtout donataire——mais il ne nait pas échangiste. Il le devint quand l'experience lui a montré les inconvénients du don ou du vol et quand il ne se sent ni assez fort pour prendre de force ni assez fin pour voler. C'est conforme à la loi d'après laquelle les relations unilatérales précédent les rela-

tions réciproques. loc. cit. p. 348—9.

ゥィスネルは其後進の精密透徹なる思想を以てこれを經濟心理の上より組々スネルに同じくして而も更らに深遠なる說明をなして曰へ——

Die Ethnologie belehrt uns über die erstaunlichen Willkürlichkeiten, Schwankungen, Unangemessenheiten der Wertbegriffe in primitiven Kulturen, sobald mehr als die dringendste Notdurft des Tages in Frage steht. Nun ist kein Zweifel, dass dies infolge——allenfalls in Wechselwirkung mit——der anderen Erscheinung stattfindet: der Abneigung des primitiven Menschen gegen den Tausch. Für diese sind mehrere Gründe geltend gemacht. Weil es jenem an einem objektiven und allgemeinen Wertmassstab fehlt, müsse er stets fürchten, imm Tausche betroge zu werden; weil das Arbeitsprodukt immer von ihm selbst und für ihn selbst hergestellt sei, entäussere er sich damit eines Teiles seiner Persönlichkeit und gebe den bsöen Mächten Gewalt über sich. Vielleicht stammt die Abneigung des Naturmenschen gegen die Arbeit aus derselben Quelle. Auch hier fehlt ihm der sichere Massstab für den Tausch zwischen Mühe und Ertrag, er fürchtet auch von der Natur betrogen zu werden, deren Ojektivität unberechenbär und schreckhaft vor ihm steht, ehe er in ausgeprobtem und geregeltem Austausch mit ihr auch sein eigenes Thun in die Distanz und Kategorie der Objektivität eingestellt

hat. Das Versenktsein also in die Subjectivität des Verhaltens zum Gegenstand lässt ihm den Tausch ——naturaler wie interindividueller Art——, der mit Objektivierung der Sache und ihres Wertes zusammengeht, als unthunlich erscheinen. Es ist thatsächlich, als ob das erste Bewusstwerden des Objektes als solchen ein Angstgefühl mit sich brächte, als ob man damit ein Stück des Ich als von ihm losgerissen empfände. Daher sogleich die mythologische und festischistische Deutung, die das Objekt erfährt——eine Deutung, die einerseits dieses Angstgefühl hypostasiert, ihm die einzige für den Primitivmenschen mögliche Begreiflichkeit giebt. andererseits aber es doch mildert und, indem es das Objekt vermenschlicht, es der Versöhnung mit der Subjektivität wieder näherbringt. Aus dieser Sachlage erklären sich vielerlei Erscheinungen. Zunächst die Selbstverständlichkeit und Ehrenhaftigkeit des Raubes, des subjektiven und unnormierten Ansichreissens des gerade Gewünschten. Noch weit über die homerische Zeit hinaus erhielt sich in zurückgebliebnen griechischen Landschaften der Seeraub als legitimer Erwerb, ja bei manchen primitiven Völkern gilt der gewaltsame Raub sogar für vornehmer als das redliche Bezahlen. Auch dies letztere ist durchaus verständlich: beim Tauschen und Bezahlen ordnet man sich einer objektiven Norm unter, vor der starke und autonome Persönlichkeit zurückzutreten hat, wozu sie eben oft nicht geneigt ist. Daher überhaupt die Verachtung des

F. I. T.

Handels durch sehr aristokratisch-eigenwillige Naturen. Simmel, Philosophie des Geldes. 1900. S. 52—53. (3. A. S.55.)

此自足經濟の時代は主として土地に依賴する。漁業であれ狩獵業であれ又は農業であれ、總て一片の土地を土臺とし、土地を離れては經濟上の行動を考ふること能はず、人間の經濟上の進歩が段々增し、技術上の熟練を重ぬるに及んで、初めて土地に依る以外の方法に依つて欲望を充す道が發生して來た。是が愈々複雜になると、土地に依賴すること亦益々少くなる。乍去尙長い間土地を所有して居る者でなければ、一個獨立の經濟を立てること能はず、土地を持たない者は土地を持つ者の從屬として僅かに生活を保ち得るのみであつた(129)。

(129) Kiesselbach, Der Gang des Welthandels. 1860. S. 246 ff.

企業心理論參照、

P. Lafargue, Evoiution of Property 1890. p. 79—135.

此自足經濟に在つては人間の消費する物は皆自ら力を生產するは勿論のこと、生產の用に供する各種の器具も亦銘々自分の力で作り出す、住ふ家屋、使ふ家具悉く自ら作る。此目的の爲には一の家門又氏族中に於て分業が發達する。此分業は今日の所謂分業とは大いに異つて居る。加之、此の如き經濟的進歩の幼稚な時代にあつては、勞働の生產力が甚だ乏しいから、農業にせよ牧畜にせよ商工業にせよ、少しく重大なことは家門又は氏族の全員が悉く擧つて之に當るにあらざれば充すことは出來ない。卽ち分業して各々業に從事することは雖も、大きな事に付ては皆共に力を戮せて共同に從事しなければならぬ。已に言つた通り氏族又は家門は今日の家族と同樣なもので無く、數代に涉る人間を包含し多數の人から成立つ家屬共產體である。此の如き自足經濟時代にあつては多數の人が集つて、一の經濟單位を形づくるので無ければ充分なる欲望充足の道は見出すことが出來ない(130)。今日のやうに各個人が各々獨立して一つの經濟單位を爲すは、人間一人一人の生產力が非常に大となつた時代に於て初て望み得可きである。一人一人の生產力の多いことを要するやうになつて來れば、どうしてもさうなければならぬ。各人の生產力乏く、勞力の効程低い時代にあつては、多勢の人が團結して一つの經濟單位を拵え

て居るのでなければ欲望充足は充分なるを得ない。勿論此の如き團結を作るやうになる前には、既に前章に述べたやうに、各人が唯だ飢餓の迫るに隨つて欲望充足に從事して居つた個人的食料探求の時代もある。併し是は一定の組織、一定の秩序のある經濟と看做すことは出來ないから問題外である(131)。苟くも人間が一定の秩序を立て、經濟を營むやうになつた最始の組織は、多勢の人が團結して形成する經濟單位であり、其經濟單位が又同時に經濟組織である。經濟單位以外には何等の組織も無い。自足鎖封的の經濟單位は他の經濟單位と相涉らない。從つて幾多の經濟單位を包含して成立つ經濟組織はない(132)。故に氏族又は家門の何れかに屬せぬ人間は存在することが出來ない。孤立は生存不能と殆ど同意義である。殊に氏族經濟は漁獵時代から進んで農業に從事するやうになつて愈々確定の性質を得て來る。各經濟單位が欲望を充足する材料を主として土地に仰ぎ、主として農業に依つて食料を得るやうになると、土地を共同に所有し、土地の耕作も亦共同にし、各個人は土地に對する個人的の所有權を少しも持たない、全體の共同所有あるのみで、各大家族は皆土地に對する使用權を均一に與へられるのみである(133)。

個人的特殊使用權はない。然るに段々經濟上の進歩に隨つて此の如く多勢の人から成立つ經濟單位は經濟上の行動に於て大に制限せられることが明かになり、是が段々崩壞する。併し崩壞して直に今日のやうな狹い意味に於ける家族が起つて來たのではない。氏族組織が崩壞し始めると先づ二の現象が起る。第一各家族の範圍が愈々擴張して血族關係の無い他の階級の分子を家族の中に收容するに至る。即ち奴隷並に體僕等を多く收容し是等を用ゐて耕作に從事させる。是等奴隷の起源は、其々の事情に依つて異るが、兎も角も是が經濟單位の崩壞の急激なる變遷を緩くするに與つて力あつたことは疑ふ可からざることである。希臘羅馬カルタゴ等の經濟組織は丁度氏族經濟が段々崩壞して家族經濟に移る道行として澤山の奴隷を使つた經濟である。希臘語のオイコスは此く共同の經濟をして居る家族並に之に屬する奴隷の全體の謂で、今日の意味で言ふ家又は家族とは大いに違ふ(134)。拉丁語のファミリアも亦同じ意味でファムリは奴隷の總稱で、ファムリといふ奴隷の總稱を「ファミリア」といひ其「ファミリア」の頭をパーター！ファミリアス即ち家長と言ふ(135)。日本上古の「部」も亦同じ樣なものである(136)。

(130) Spencer, Principles of Sociology. vol. III. p. 321. 404 ff.

Zenker, Gesellschaft. Bd. I. S. 51 ff.

(131) 然れども如此 Horde 時代にも猶完全なる意味に於ける單獨孤立の爲し得ざることは Bücher 自身の說く所なり。—— Entstehung S. 10.—— 猶 Grosse, S. 37. 39. 41. を參照せよ。——殊に母權を否認する以上は少くとも男女間の結合は或期間一定の共同生活をなさしめたることを信ぜざるを得ず。——Grosse, S. 45. 參照。

(132) 是れ即ち Bücher の唱ふる處の眞意を得たるものなる可し。——Sombart の Individual 又は isolirte Wirtschaft と云ふ又此意なり。——Grosse, S. 44 ff. を參照せよ。

(133) 韓國にては近き時代に至る迄土地私有權を認めず土地は共有（國有）にして各人の有するものは其使用權たるに過ぎずして田結とは地租と云はんより寧ろ地代なりき。

我邦に關しては別著 Gesellschaft. u. Wirtl. Entw. in Japan (日本經濟史論) に詳論せり。——猶田口卯吉氏の經濟雜誌に屢々論ぜらるゝ處殊に日本新聞社出版にかゝる同氏と谷氏との論爭を集錄せる地租增否論參照す可し。——法制論纂二十一、三十五、四十八、横井時冬氏不動產法治非史等併せ參照す可し。——

猶後卷所有權の條に至り詳論す可し。——

(134) Bücher, Die Aufstände der unfreien Arbeiter 1874. K. IV.——Entstehung, S. 116.

カイロス經濟なる語は Rodbertus の初めて用ゆる處なり。——Rodbertus 前揭著并に Jahrbücher u. 1894. S. 318 ff. を見よ。——

Pöhlmann, Geschichte des antiken Communismus und Socialismus. 1893.

Laveleye, De la propriété etc. p. 388—392.

フュステル・ド・クーランジュの說明は最も明晰に其眞相を示す曰く。——

"Mais cette famille des anciens âges n'est pas réduite aux proportions de la famille moderne. Dans les grandes sociétés la famille se démembre et s'amoindrit, mais en l'absence de toute autre société elle s'étend, elle se développe, elle se ramifie sans se diviser. Plusieurs branches cadettes restent groupées autour d'une branche aînée, près du foyer unique et du tombeau commun.

Un autre élément encore entra dans la composition de cette famille antique. Le besoin réciproque que le pauvre a du riche et que le riche a du pauvre fit des serviteurs. Mais dans cette sorte de régime patriarcal serviteurs ou esclaves, c'est tout un. On conçoit, en effet, que le principe d'un

service libre, volontaire, pouvant cesser au gré du serviteur, ne peut guère s'accorder avec un état social où la famille vit isolée. D'ailleurs la religion domestique ne permet pas d'admettre dans la famille un étranger. Il faut donc que par quelque moyen le serviteur devienne un membre et une partie intégrante de cette famille. C'est à quoi l'on arrive par une sorte d'initiation du nouveau venu au culte domestique.

Un curieux usage, qui subsista longtemps dans les maisons athénienns, nous montre comment l'esclave entrait dans la famille. On le faisait approcher du foyer; on le mettait en présence de la divinité domestique; ou lui versait sur la tête de l'eau lustrale, et il partageait avec la famille quelques gâteuax et quelques fruits. (Démosthène, in Stephanum, I, 74. Aristophane, Plutus, 768.) Cette cérémonie avait de l'analogie avec celle du mariage et celle de l'adoption. Elle signifiait sans doute que le nouvel arrivant, étranger la veille, serait désormais un membre de la famille et en aurait la religion. Aussi l'esclave assistait-il aux priéres et partageait-il les fêtes, Le foyer le protégeait; la religion des dieux Lares lui appartenait aussi bien qu' sonâ maître. C'est pour cela que l'esclave devait être enseveli dans le lieu de sépulture de la famille. Fustel-de-Coulanges, La cité antique. l. ii. ch. x. pp. 126—128.

(135) 前頁註釋出論書件ヲ參照ス可シ。

Laveleye, op. cit. p. 361 et suiv.

Der Sklav ist Träger eines Willens, welcher nach Massgabe der soeben aufgeführten Rechtssätze auch seine rechtliche Geltung findet. Nur dass der Wille, überhaupt die geistige Begabung des Sklaven von Rechts wegen grundsätzlich für den Herrn arbeitet. Der Herr hat an dem Sklaven nicht bloss Eigentum wie an einen Sache, sondern andererseits eine Gewalt ähnlich wie über seinen Sohn, die potestas dominica, d. h. eine Gewalt auch über den *Willen* des Sklaven. *Alles, was der Sklav erwirbt, erwirbt er dem Herrn,* Sohm, Institutionen des römischen Rechts. 8. u. 9. A. 1899. S. 162.

.....*Was der filiusfamilias erwirbt, erwirbt er dem paterfamilias;* das Eigentum, das Forderungsrecht, ja auch die eheherrliche Gewalt über seine Ehefrau, die väterliche Gewalt über seine Kinder wird nicht ihm, sondern seinem paterfamilias erworben. Im römischen Hause giebt es nach altem Recht nur ein einziges Eigentum, das des Hausvaters, nur eine einzige eheherrliche, väterliche Gewalt, die des Hausvaters. Lediglich seine Schulden erwirbt das Hauskind sich selbst. Der filiusfamilias ist des passiven Vermögens fähig, des activen Vermögens unfähig. a. a. O. S. 174.

Die Familie im Sinne des römischen Civilrechts ist die Agnatenfamilie d. h. die Gesamtheit aller,

welche durch die Gemeinschaft der *patria potestas* miteinander verbunden sind. Agnaten sind alle diejenigen, welche unter derselben *patria potestas* stehen oder stehen würden, falls der gemeinschaftliche Stammvater noch lebte.....

Die civilrechtliche Familie der Agnaten stellt die Hausgenossenschaft dar. Die Gemeinschaft der patria potestas, welche entweder wirklich noch besteht oder doch idealerweise in ihren Wirkungen fortlebt, bedeutet die Gemeinschaft des *Hauses* im rechtlichen Sinne des Wortes. a. a. O. S. 428.

Die Freilassung ist eine Art von Wiedergeburt. Der Herr (patronus) tritt daher zu seinem Freigelassenen in ein *väterahnliches Verhältnis*. Das *Patronat* besteht in dem väterlichen Erb-und Vormundschaftsrecht gegen den *libertus*, in einem Zuchtigungsrecht (levis coercitio), einem Recht aus *Ehrerbietung* (wie gegen einen Sohn), auf *Alimente* (falls der Patron verarmt) und auf *Dienste*. a. a. O. S. 166.

Die Menschenarbeit ward regelmässig durch Sklaven beschafft. An der Spitze der Gutsklavenschaft (familia rustica) stand der Wirthschafter (vilicus, von villa), der einnimmt und ausgiebt, kauft und verkauft, die Instructionen des Herrn entgegennimmt und in dessen Abwesenheit anordnet und straft. .....Der Wirthschafter stand naütrlich freier als die übrigen Knechte; die magonischen Bücher

riethen ihm Ehe, Kinderzeugung und eigene Kasse zu gestatten und Cato ihn mit der Wirthschafterin zu verheirathen; er allein wird auch Aussicht gehabt haben im Fall des Wohlverhaltens von dem Herrn die Freiheit zu erlangen. Im Uebrigen bildeten alle einen gemeinschaftlichen Hausstand. Mommsen, Römische Geschichte. Bd. I. 8. A. 1888. S. 833—4.ff.

(136) 同著 Gesell. u. wirtschaftl. Entw. S. 19. 50. 經濟進化論九九頁以下（經濟學研究第一八七頁）

栗田寛氏族考（明治三十二年再版）上卷三十一頁以下「氏上之制」に曰く

……各書にて譬へ書はゞ大氏は本家小氏は分家なり同部の大氏は大同のごとは異くたれど氏人いと多かりしかば是に准へて小氏にも十二十の人はありしなるべし其下にまた部曲（イヘ）の人あり是には准はなく同部長田氏某者と云人々あれば同部長田氏朝田雄某と云人人ゝ上として管領ち大氏の同部朝田某と云人氏ゝ上なれば同部某といくる部曲の人々其他小氏氏上よりして各部曲までも統領る事也物部氏大伴氏また其他諸氏の小氏にも氏上ありて各部曲を統る事も之に准へて知るべしかゝる故に少故の事は小氏の氏上大氏の氏上とはかりて事を正し大故事にあらざれば朝廷に奏請ゝとなく又朝廷より詔命ある時は大氏の氏上承りて氏人等に傳へしまゝに用ゆるから朝廷

の閑寂無爲なる事は云ふまでもなく、各國も諸氏の人々領領りて、天皇の御料地の御田なも作り、男は弓弭の調、女は手末の貢を奉りて、いといと簡易に治りき。

三十四頁「部曲の氏屬之氏上云々」に曰く、

又諸氏に隷屬る部曲と云ものは、中臣連に中臣部、忌部首に紀伊ノ忌部、阿波ノ忌部、讃岐ノ忌部、筑紫ノ忌部あり、大伴ノ連に大伴部、佐伯ノ連に佐伯部あり、阿刀連に阿刀部、伊福部ノ連に伊福部、輕部ノ造に輕部、紀ノ朝臣に紀部、日下部ノ連に日下紀部あり、坂合部宿禰に坂合部、建部ノ君に建部みえ、物部ノ連に物部、土師ノ連に土部、六人部ノ連に六人部あり、倭文ノ連に倭文部、膳ノ臣に膳の大伴部あり、膳部あり、田部ノ連に田部、韓鐵師毘登に韓鐵師部、來目ノ臣に來目部ありて、隷屬るが如き、卽是にて、其部曲は各も其氏も上を君と仕る故に、氏神の祭祀などある時には各氏ノ氏人相聚て、古の事を語らひつゝ、其祭の業を行ひしなるべく、又朝廷に大禮儀ある時は、天下の諸氏、京都に參上りて、皇子又大臣大連に從ひて、(部々の人々氏ノ上に仕ふるが如く)御門を拜み奉り、或は其禮儀を助け奉り、御軍を徵發整ひ給ふ時も、皇太子また大臣連に附屬て不順者を征伐きたむる御制にてありし、ちかはあれど部長罪あれば、其姓を貶して之を黜け、或は其部曲を奪て、之を他人に賜ふ事もありき。

是等の家族に屬する者は銘々己の爲に己自ら生産するので無く、共同の家の爲に生産に從事するのである。然るに家長の權利が段々增大するに從ひ皆が生産に從事するは家長の爲に生産に從事し、家長は家を代表するもので、總ての經濟行爲を監督するのみならず、家の所有財産は悉く家長の特殊的の所有財産となる、斯う云ふ制度にしなければ大家族制は益々崩壞して行く(137)。然るに當時の進歩しない經濟狀態に在つては此く家族が崩壞し愈々縮少しては經濟上の進歩に大障碍となるから、家長の權は愈々增大して、無限の權力を揮つて家族經濟の崩壞を防ぐは必要なことであつた(138)。

(137) Hiernach müssen nun Wesen, die ohne einander nicht bestehen können, sich notwendig paarweise einander zugesellen, wie Männliches und Weibliches zum Zweck der Zeugung. Es geschieht dies nicht etwa aus freier Wahl, sondern nach dem auch den anderen Geschöpfen und Gewächsen von Natur inhaftenden Triebe, ein ihnen gleiches Wesen zu hinterlassen. Sodann geselt sich von Natur ebenso Herrschendes und Beherrschtes zu einander, zum Zweck der Erhaltung. Dasjenige nämlich, was als intellektuelles Wesen der Voraussicht fähig ist ist von Natur zum Herrschen und Gebieten, dasjenige aber, was nur mit den Kräften des Leibes die ertheilten Befehle auszuführen vermag, ist von

Natur zum Gehorchen und zum Stande des Sklaven bestimmt.

Deshalb haben Sklave und Herr ein und dasselbe Interesse. Dagegen ist die Bestimmung des Weibes von der des Sklaven von Natur verschieden; denn nirgends verfährt die Natur in ihren Schöpfungen so, wie die Eisenschmiede mit dem de'lphischen Messer, sie kargt nicht in dem Haushält ihrer Zwecke, sondern es hat ein jedes ihrer Wesen auch nur einen Zweck, und allerdings erhält dadurch ein jedes Werkzeug seine höchste Vollendung, wenn es so eingerichtet ist, dass es nicht zu mehreren, sondern nur zu einem Zwecke dient. Dagegen haben bei den Barbaren Weib und Sklave dieselbe Stellung, und das rührt daher, weil es ihnen an dem fehlt, das von Natur zum Herrschen bestimmt ist, und die eheliche Vereinigung bei ihnen vielmehr nur die einer Sklavin mit einem Sklaven wird.....

Aus diesen zwei Vereinigungen besteht nun die erste Familie; und mit Recht sang Hesi'odus:

Allererst nun ein Haus und ein Weib und den puflügenden Stier dann!

Denn der Stier vertritt bei dem armen Manne die Stelle des Sklaven. So ist denn also die für die ganze Lebensdauer zusammengetretene Vereinigung dieser Elemente naturgemäss die Familie, deren Glieder Charo'ndas *Tischgenossen*, der Kreter Epime'ndes *Herdgenossen* nennt. Aristoteles' Politik Buch.

I. K. I. 4, 5, 6. uebers. Stahr. S. 82—84.

即ち大家族の存在は當時希臘の經濟組織に不可缺處にしてアリストテレースの奴隷制度存續を主張したるの理由の一は確に茲に存せるものと見る可し。

(138) 前掲註(135)に示せるが如く羅馬に於ける家長の權は絶大のものなりしなりSohm それを說明して曰へ。——

Die *patria potestas* des alten Civilrechts bedeutet volle Gewalt des Vaters über den Gewaltunterworfenen (das Kind, das Enkelkind vom Sohne, die Frau in Manu): das Recht über *Tod* und *Leben* (jus vitae ac necis) und das Recht, *in die Knechtschaft zu verkaufen.* Nur der Einfluss der Verwandten in dem bei schweren Fällen herkömmlicherweise zu berufenden Familiengericht und die Rüge des Censors (nota censoria) sowie die geistliche Strafe, welche in Fällen des Missbrauchs drohte, stellte einen thatsächlichen Schutz für den Gewaltunterworfenen dar. Sohm, Institutionen. S. 459.

孝德天皇大化三年秋八月の詔に

.....而始王之名々'臣連伴、造國、造分其品部'別其名々'復以其民、品部交雜使居國縣'遂使父子易姓兄弟異宗'夫婦更互殊名'一家五分六割'由是爭競之訟盈國充朝'終不見治'相亂聞達'云々

とあるは卽ち氏族の制によりて治めたる社會が漸次人口の增殖經濟上の進歩と共に經濟單位の急調なる縮少を促し大家族の崩壞せんとする狀を云へるものにして大化改新の政は卽ち之れに備へんとするの用意怠りなかりしものなり、——

栗田寬氏は氏族考上卷六十三頁以下に言て曰く、——

かく制給ひしより後、臣連伴造國造等、其遠祖より傳來し職を失ひし程に職號卽加婆禰なる古義はうせて、加婆禰と云者は、宇遲と連れ呼びて、家の尊卑を分つ外には、さして用なきものとぞなりける、上古は氏々の貢調賦役を氏上にて掌りしを、大化以來諸氏の部曲を除きて、皆公民とせしにより、其公民を統治むる官職卽國司郡司を置ける後も、なほ上古の如く一氏々々を統る者なくては、得あらぬ勢なれば、氏上をば猶しかすがに其名を存して、後々までも任されたり、所謂氏上を殊に重くせられし事は　（中略）、如此重きものにせられたれど、混亂たる事もありしにや、天武の十年九月云々　（中略）、此時に正しく改紛たまへるならん、其眷族多在者、則分各定氏上とは喪葬令に別祖氏宗といふ事ありて、義解に別祖者別族之始祖也、氏宗者氏中之宗長也と見ゆ、これを漢土に擬ていへば、氏宗は大宗の如く、別族は小宗の如く、皆一家よりわかれて、數族となれるなり、さる氏々には、その一族々々の內にて、氏上を定めよといふ事なり、因承官判云々とあるは、氏上を官判にて定る事にはあらず、こは族多かる者は、一族々々にて氏上を定め、此を理官に申せは、理官に於て此一族には氏上あるべし、此一族にはなくても事缺ましければ、彼氏上に攝しめて、こなたをば氏上を除くべしなと斷りて、さて奏を經て、勅を聞て定むるなり、また眷族多在者分定氏上とあるにて、大氏には分家多く、小氏はその分流の家なる事を知るべし……（中略）

さて此氏上と云ものは後の氏長者なりける、如此氏上の定れるから、各氏のすち亂る事なく、氏人の悉々小氏大氏に隷る故に、大氏の氏上に詔あれば、氏人ともみなうけ給はり傳へて、其事をなすが故に、事通り易く亂るゝ事なし、故古はなす事少くて、よく事の整ひし也、さはいへ氏上又氏人の威力つきゝゝに强大なり、大命に違ひぬる事ともの出來しかば、部曲、民人を除れたり、部曲民人を除れても、猶氏上の事は、後世までも傳はれり、されど其本源を失ひしかば、氏上の人の氏人を統領せる事もうせしなるべし……（中略）

古にありて尊卑の等を明らかにするは、氏族を亂れしめさるによる、氏族を亂れさらしむるは氏上をもて統領しむるにありければ、國を治むるの基本も此に有る事を知るべし、さて尊卑の階級を定め、人々の系統を正し、皇神蕃の三種を明にし氏上を置て之を統領しむるものは、其職をむれとせさすべき爲なり、之の職業を專とすれば、它に心を動す事なければなるべし、云々、

「栗田先生の遺著を讀む毎に眼孔紙背に徹し、紛糾せる箇々の記事を綜合して一條の行程を明示せらるゝこと、國學者間に稀なるものあるを嘆賞せずんばあらず、今此に引用せる條の如き元より全然他國他時との比較對照をなさず一に國史の上に就て之れを論ぜられたるものなれば、論斷の非科學的の跡を止むるは免れざる處なりと雖も、之れを熟讀玩味するときは大家族の崩壞と之れに對する人爲的維持の設備の史的發展は一貫して吾人の眼底に映ぜずんばあらざるなり。——

第二、既に氏族又は戸の如き大きな經濟單位は崩壞して、各家族が小さな經濟單位になつたが一躍直ちに完全なる意味に於ける經濟單位となつたのでは無い。即ち總ての經濟上の行動に對して單位たる地位を有するに非ず、猶多くの經濟行爲は一の團體として營まれる。其團體は即ち昔日の血族團體、平和團體である。然るに此血族團體は定住の進歩に伴つて地域團體となる。血族關係を以て集合して起つたのが、一變して同一の土地の上に住むことを以て團體結合の基礎とするやうになつた。是も亦經濟上の進歩に必要なことで、同じ血族に屬する者でも、住居地を異にすれば經濟上の利害は一致しない。一致しないものを無理に團結しては經濟上の行動を妨げる。同一の地方に共に住んで居ると血族の關係はなくとも、遠くの親類よりは近くの他人で、經濟上の利害は多くの點に於て一致する。其一致して居る經濟上の利益を充すには幾多の家族を結合して地域團體を形つて共同に營むを適當とする。殊に之に依りて氏族經濟の崩壞から來る急激な變遷を緩うすることが出來た(139)。此等の團體の共同に營んだことは、各經濟單位が個別的に營むに困難多くして出來ないか、或は其事業の性質上個々の團體全般の利害に關係のあること、例へば山林の開拓、道路の修築、河堤の修築、運河の開鑿、灌漑、疏水等皆此共同經濟で營む。露國のアルテル、ブルガリヤのドルチナ、セルヴヤのモバ等は經濟組織が其力に及ばないものを共同的に營む團體の組織である(140)。

(139) 我邦五保、井五人組制度、英國の Tithing and Frank Pledge の制は共に血族團體より地域團體に發展する中間に位せる顯著なる現象なり、殊に經濟上の目的を有せる Artjel, moba, druzina の如きは既に稍 Zweckverband 目的團體の形を具ふるものなるに比し五人組并に Tithing and Frank Pledge は社會生活の全般に渉りて最も重要なる單位たりしなり、拙著 Gesell. u. wirtschaftl. Entw. S. 46—50. S. 147—50 に稍詳細の論究あり猶 Tithing and Frank Pledge に關しては Pollock and Maitland, History of English Law. 2. E. 1898. vol. I. p. 568 以下

を見る可し、

五人組制度に關しては著述少なからず、就中穗積陳重氏五人組制度（法理論叢第十一編、明治三十五年有斐閣出版）幷に三浦周行氏五人組制度の起源あり、殊に穗積博士の研究は周密精詳本邦に於ける特殊研究的のMonographieの龜鑑たる可き名著なり、本邦經濟學書にして克く本書に比す可きもの一も之あるなし、蓋し此書は法制史上の價値頗る重大なるのみならず經濟學、經濟史の上に寄與する處實に尠少にあらず、最近數年間に出版せられたる數百の經濟學關係書中には經濟學研究の上に裨益を與ふること能く本書の右に出づ可きものなし、――唯遺憾とす可きは著者の愼重を尙ぶに過ぎ輕々たる論斷を避けんとするの用意は其結論に現はれて材料の豐富なるに比しては結論の論定する處簡單に過ぎ未だ以て法律發展史上に於ける五人組制度の位置を闡明し盡さざるものあること之れなり、殊に外國に於ける類似制度との比較はPost氏の數言を援引するに止りて其他に及ばざるは遺憾とせざるを得ず、予は殊にTithing and Frank Pledgeの制と五人組制度の頗る類似の點あることを思ひ一言を拙著に叙し他日の研究を期したりしも今日に至る迄未だ何等の得る所なし、故に穗積氏の五人組制度論の上梓は予が渴望を充たすものたりしも此點に關しては一言も論及する所なきを見て聊か失望の感なきを得ざりしなり、……（下略）

附記。　予が慫慂に於ける以上の妄言は端なく穗積博士の眼に觸れ、博士は此研究を約せられ、而して五人組論の再版（大正十年九月刊）に至りて周到綿密なる研究の結果を公けにせられたり。二十年一事を忘れざる篤學博士の如きは今世稀に見る所敬畏の念に堪へず。――本書出版に先つ二年前公けにせるに拙著に其一端を述べたる見解と全然合致し而して更らに說て精しき次の一節は今も猶予の徹頭徹尾唱和せんとする處なり、――曰く

――『今夫れ五人組制度を見るに、組合の單位は家にして即ち血族よりなる團體なりと雖も其所謂町家は家並村方は最寄次第に組合へるものは是れ即ち地域上の團體なり、五人組は、姓氏を基礎とする血族的大團體は既に政治上の位置（經濟單位としての位置も）を失ひ、地域的團體之に代はるの時に當り血族的小團體なる家は尙ほ存して地域的團體の單位をなしたるものなり、由是觀之五人組制度は血族團體と地域團體の連鎖にして血族團體時代より地域團體時代に進まんとする變遷時期に於て發生し、地域を以て國の行政區劃の通則となすに至るの後ち尙ほ遺存するものなりと云はざるを得ず、（初版二三九頁再版五八〇頁）

博士は更らに再版に於て曰く『世界は循環す。既往を回顧すれば人類共同生活の形體は血族團體より地域團體に進み更に進んで地域團體より目的團體に移りたるも上來叙說せるが如し。而も五人組は其原始狀態なる血族團體と地域團體との中間に在る比隣集團なりしなり。支那に於ける保甲、朝鮮に於ける統亦然り。英國に於る「フランクプレッヂ・タイシング」も亦「メーガ」なる血族團體より進化せる比隣集團にして、只東西兩洋に於ける

差異は其團體組織の單位が家族なりしと個人なりしとに存するのみ』。（五八〇―一頁）

『英國に於ては「フランクプレッヂ・タイシング」制度が數百年間人民に自治の觀念及慣習を發成し、後に發達せる自治制の基礎を爲りたるも、我現行市町村制は本邦固有の五人組制度の發達したるものに非ずして「フランクプレッヂ」制度の系統に屬する英國の自治制の影響を受けたる泰西諸國の自治制に倣ひて新たに制定せられたるものなり。故に我自治制は沿革上五人組の系統に屬するものと云はんよりは、却て「フランクプレッヂ・タイシング」の遺裔なりと云ふを以て當れりとすべきが如し』。（再版五五〇―一頁）

(140) 是れ卽ち純然たる經濟上の目的より人爲的經濟單位にして、大家族崩壞より近世の個人的家族に至る迄の過渡時代に於て見るものにして、一時多くの學者の信ぜしが如く Slav 民族に特有なる制度にあらず、何れの民族も同一の必要の下には又類似の制を有したるもの也、Slav 民族は經濟上の發展進步非常に遲れたるものなるが故に現今に至る迄未だ如此人爲的特殊の經濟單位を殘留するに過ぎざるなり、――拙稿經濟單位發展史上韓國の地位第一編內外論叢二卷一號（經濟學研究七〇頁以下）を參照す可べし、尙關係書目も同處に揭げあり、――猶 Artjel に關して近來露國に於ける畏友 Dr Apostol の著 Das Artjel. 1898. ありて最も詳細の研究の結果たり、氏は昨年之を佛譯し且增補訂正を加へ巴里に於て出版せり、――此種の制度一般に關しては Cohn, Gemeinderschaft und Hausgenossenschaft 1898 は材料豐富頗る參照に價す、―― Vgl. Bücher, a. a. O. S. 114. (12. u. 13. A. S. 97.)

中古の始に於ける日本幷に西歐羅巴諸國の經濟狀態は右の自足經濟組織の進步したものに外ならぬので、人爲的に家族の範圍を擴げ、經濟單位の包含する奴隷若くは體僕を增加するに依つて出來たものが卽ち自足的莊園經濟である(141)。莊園經濟は君王、貴族又は寺院等が之を宰る經濟主體となつて、多數の臣民、奴隷體僕等が之に附屬して居つた。莊園の經濟組織では交換は極めて微々たるものである。奴隷は賃銀を受けて勞働に從事するに非ず、生產物は悉く領主の手に歸し、唯だ自分の生活に必要な物を貰ふ丈けである。今日の經濟組織に於て交換の特色たる給付と反對給付、勞と報の關係は毫も見る能はず。莊園經濟は全く自足的、排他的であつて一の莊園と他の莊園との間には殆ど流通がない、然るに莊園の範圍大となり生產力上進し富も亦增進するに從つて、一の莊園經濟の中に在つて、有る物は非常に有り餘り、無いものは甚だしく缺くことになる。是に於て新しい現象が起る。卽ち他の經濟と流通を開くこと是れである。併し此流通も其始は交換其ものを目的としたのでなく、相互救濟の爲めに行はれたものである。其が段々發

達して終に交換の爲に生産し、生産したものは必ず交換するやうになり、從つて自足經濟は自足的、排他的性質を失ふに至る。殊に其莊園經濟の範圍が狹く又其一地方に於ける土地の狀態、産物の種類等不平均な所に在つては早く交換が起る。但し此變化は俄かに起らず、又一たび起つた後も其進歩は甚だ遲々たるものである。從來の商業史家は人類は最古い時分から盛んに商業を營んで居たやうに說くが、是は大なる間違ひである(142)。所謂商業といふものも其取扱つたものを見れば今日の所謂商業とは大いに違ふことを發見する。歐羅巴の中古を通じて商業の目的物となつたものは、日常生活の必需品で無く、珍奇な天産物、特別の價値ある工業製品など多くは奢侈品に屬するものである。日常の生活品は他から交換によつて得るにあらず自ら生産するを原則として居た(143)。

(141) 羅馬の Villa, 獨逸の Grundherrschaft, 英國の Manor, 我邦の莊園皆然り。Bücher, a. a. O. S. 121.

莊園に關しては、——

前掲訳書 SS. 76——103. 井栗且先生雜著卷十參照。

Villa に關しては、——

Mommsen, Römische Geschichte Bd. I. S. 830 ff.

井に Max Weber, Römische Agrargeschichte 1891. S. 220 ff.——

Grundherrschaft に關しては、——

Inama-Sternegg, Die Ausbildung der grossen Grundherrschaften in Deutschland während der Karolingerzeit. 1878.

Derselbe, Deutsche Wirtschaftsgeschichte Bd. I. 1879. SS. 294. 491. Bd. II. 1891. SS. 33—107. Bd. III. 1899. S. 168.

Knapp, Grundherrschaft und Rittergut 1897.

Schmoller, Grundriss, S. 290—293. (11—12. Taus. S. 305—310.)

Manor に關しては、——

Ashley, English Economic History. vol I. pt. i. p. 6 et seq.——此書に掲げたる引用書目は最も研究者を助くべきものなり。——

Cunningham, Growth of English Industry and Commerce. I. 3. E. 1896. p. 163 et seq.

(142) Bücher, a. a. O. S. 447. Anhang.

西歐諸國に就ては學者の定論あり、從來の商業史と稱するものゝ學理研究上殆んどす

者の區別なきものなるべしと云ふ商業史家の認むる所なり——カンニングハム

We cannot, in tracing the growth of industry and commerce in their earlier stages, adopt the principles of division which we habitually use in the present day. Before the distinction between town and country emerges we cannot properly treat either of agriculture, industry or commerce apart from one another; still less can we distinguish between labour, capital and land till the structure of society has assumed a comparatively modern type. Both principles of division come to be useful in connection with the later stages of economic development, but they are not applicable throughout. Cunningham, Growth of English Industry and Commerce. vol. I. 3. E. 1896. p. 18.

La sociétè féodale s'était organisée non par calcul, mais par instinct et par nécessité, de manière à ce que chacun des petits états dont se composait le royaume de France pût se suffire à lui-même et fût obligé de compter le moins possible sur ses voisins.....

Il en est de l'industrie comme de l'agriculture: chaque fief veut produire les denrées et les matièrs premières nécessaires à l'alimentation, au vêtement et aux transports, chaque fief veut avoir aussi ses industries de première nécessité, son charpentier, son maçon, son potier, son forgeron, son armunier, son tisserand, son tailleur.....

Avec les barrières que les intérêts féodaux opposaient à la circulation des marchandises de première nécessité et la consommation restreinte des objets de luxe, le commerce ne pouvait prendre un grand essor. Ce qui contribuait encore à le réduire, c'était la difficulté des communications, la longueur et les dangers des voyages. Pigeonneau, Histoire du commerce de la France. I. P. 1885. p. 91. 94. 96.

(143) Bücher, a. a. O. S. 129. (12. u. 13. A. S. 111.)

Roscher, Ansichten. Bd. II. S. 321. XIV. Die Juden im Mittelalter betrachtet vom Standpunkte der allgemeinen Handelspolitik (1875).——

"Die germanischen Völker waren fast ausschliesslich von einem heissen Verlangen nach Grundbesitz geleitet, und auf der Landwirtschaft baute sich ihr Volksleben auf. Wie nun jede Wirtschaft versuchte, alle Bedürfnisse möglichst selbst zu decken, in der eigenen geschlossenen Hauswirtschaft alles zu erzeugen, zu verarbeiten und zu konsumieren, wie so eine Masse von durchaus selbständigen wirtschaftlichen Betrieben nebeneinander trat, war für einen Handel der Raum ausserordentlich eingeschränkt. Er erlosch in all jenen Artikeln, welche in einer jeden Wirtschaft hergestellt werden konnten und zum täglichen Bedarf gehörten, erhalten aber blieb er in jenen Dingen, die man aus

andern Ländern holen musste und die dennoch unentbehrlich geworden waren, erhalten also der Handel mit Luxusgegenständen, die der wohlhabende Teil einer einfachen bäuerlichen Gesellschaft verbrauchte. Er umfasste seltene Naturprodukte und gewerbliche Erzeugnisse von hohem specifischem Werte. Schulte, Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs zwischen Westdeutschland und Italien. Bd. I. 1900. S. 70.

Kiesselbach, Der Gang des Welthandels und die Entwickelung des europäischen Völkerlebens im Mittelalter. 1860. S. 37. ff.

Mais presque partout, aussi bien en Languedoc et en Provence que dans les pays du nord et du centre, le commerce des objets de luxe et celui des métaux précieux, c'est-à-dire le seul grand commerce qui existât alors dans l'Europe féodale, était entre les mains des Juifs. Pigeonneau, op. cit. p. 104.

第二節　都市經濟

自足的家屬幷に莊園經濟は、數世紀の間幾多の變遷を經て直接交換經濟となり、純然たる自己生産變じて顧客生産起るを見る。此時代を都市經濟時代と言ふ。其故は此時代の特色は西歐のチュートン並に拉丁諸國に於ける中古の諸都市が其重要なる經濟組織であるからである(144)。自足的家屬經濟は漸次經濟上の自足的性質を失ひ、全く土地にのみ依賴する自足孤立の經濟組織は漸次其需要する物を自己の經濟のみにて充すこと能はず、他の經濟と相互に依賴する必要に迫まられ純然たる排他的獨行獨立は稍々之を失ふに至る。然し乍ら此變化は一躍全く土地から離れ純然工業若くは商業のみに依賴する經濟の起ると云ふ樣な急激なものではない。依然出來得る丈けは欲望充足に當つべきものは土地から得ることを務め、唯だ之を施して餘力あれば、手工の熟練を用ゐて各種の工業品を生産するのである。此くして各地方に應じ特殊の業に精しき者起り、相互に分業し、直接需要以上に生産せる物は他と交換するに至る。此交換には今日の如き組織的商業の存在を必要としない、極めて簡單な流通の方法あるのみである。卽ち各人が其剩餘を持來す市なるものが發生し、一定の時、一定の所に住居して各々其製品を交換し合ふに至るのである(145)。蓋し此く一定の交換所たる市の存在するは商業の存在せざる證

であつて、商人のあるところ市なく、市のあるところ商人なしと言つて差支ない(146)。我邦にも上古の歴史には市に關する記事が甚だ多い、是等を目して直ちに商業が盛んであつたと想像するのは大なる誤りで寧ろ正式の商業存在せざるの證となすべきである(147)。是等の市は多くは神社佛閣の境内等の如き宗教的に神聖なる場所に於て行はるゝを常とする(148)。然る所以は此時代に於ても交換に對しては危險を感ずるを常とし、己の生産したるものを他人に與ふことは成るべく之を避ける。而して交換の相手方なる外國人は卽ち敵人である、外人と相見ゆる時には我彼を倒すか彼我を倒すか何れかでなければならない。然るに一たび平和的の交換が發生すると、干戈に訴えて輸贏を決することは已むが、平和的交換に於て成るべく我のみ利し彼に損をせしめやうとする。一たび市を去れば再び干戈に訴えて輸贏を決するの外はない。唯だ交換をする時のみ平和の狀態が支配して居るのである。此平和を保護する爲には彼と我、互に信仰する神の保護の下に其境内で之を行ふことが必要とせられる。此如き市が發達して都市となつたものが少くない(149)。此等の市には市に來るを專業とする人が集まるので無く、各地方の農夫が各其餘つた農産品、又は農業の傍らに營んだ工業の製品等を持つて來て相手方の所有品と交換し合ふのである。故に此意味に於ては普通謂ふ有無相通ずなる套語は中らない。各其有り餘つた不必要の物を交換し合ふのである。生活の必要品は決して交換の目的物とはならないのである。

(144) 都市經濟なる稱呼に特に西歐諸國にのみ適切なる名稱にして殊に都市の獨裁の範圍の廣大なりし大陸諸國に就て下せる考察なり、之れを英國に就て言ふときは事態既に悉くは同じからざるを見る可し、――Ashley 曰く、

A much more important peculiarity of English history is that there has never been a time since the Norman conquest when the towns were left altogether to themselves, and suffered to work out their own career, uncontrolled by a superior power. Nor was this control simply that exercised by a strong monarch, supreme in jurisdiction and taxation. From the time of Edward I. there was a national Parliament; and under the first and third Edwards national legislation took a firm grasp of business life, and issued statutes which were intended to override local privileges, and apply to the whole kingdom. Eng. Econ. Hist. vol. I. pt. 2. p. 8—9.

猶 Freeman, English Towns and Districts. 1883. pp. 52. 70—72. 參照。

Ochenkowski, Englands wirtschaftliche Entwickelung im Ausgange des Mittelalters. 1879 は殊に此點を主張するに勉むと雖も、其論旨は氏の他の所論と均しく好人で極端に亡るものと言はざる可からず Ochenkowski を讀むものは常に此點に注意するを要す。——

Ashley 猶注論じて曰く、

But the difference between England and other countries in this respect was probably more apparent than real. For the parliamentary movement of the fourteenth century was prematurethe increase in the quantity of legislation was certainly not accompanied by an equal increase in the control of local by central authorities; while the weak rule of the Lancastrians and the dynastic feuds of the fifteenth century left the towns free to pursue their own interests. Economic development had not yet reached the point at which there was any urgent need for an organization wider than that of the town and the work of creating out of isolated groups a national trade and a national industry, if, indeed, it had been begun in the thirteenth century, needed to be taken up afresh in the sixteenth. The stream of national legislation on economic matters never, it is true, altogether dried up; but his legislation was, to a large extent, but the confirmation of powers already exercised by the town authorities, or the grant of privileges for which they had petitioned. That a central Parliament should grant similar rights to a number of different towns could do little to bring about national unity, if the exercise of those rights stimulated the sense of town completeness, and could be readily resorted to against rival communities. op. cit. p. 9.

猶 Stubbs, Constitutional History of England. vol. iii. p. 288. 307.

Cunningham, Growth of Eng. Industry and Commerce. vol. i. pp. 173. 219. 225 等參照す可し、我邦に渡ては別に發揮れ抑して詳說を要するものあり、

(145) Rathgen, Entstehung der Märkte 1881.—Derselbe, Handw. d. Staatsw. Bd. IV. S. 1119 ff.

經濟進化論一一六頁以下參照、(經濟學研究第一八七頁以下)

Bücher, a. a. O. S. 19. 136 ff.

Bühsenschutz, Besitz und Erwerb im griechischen Altertum. 1869. S. 470 ff.

(146 Der Markt und der stehende Handel schliessen einander aus. Wo es einen Berufsstand von Kaufleuten gibt, braucht man keine Märkte; wo es Märkte gibt, braucht man keine Kaufleute. Bücher, S. 136.

然れども如此市場に顧はるゝ、當事者の何れか一方がそれを職業となすものなること

F. I, . 73

あり Bücher, S. 87 ff. 參照、――韓國內地に今尙盛なる市若くは我邦にても進步の後れたる地方に於ける市は生產者と消費者と直ちに相會する程の原始的市場にはあらずして多く其當事者の一方丈けは之れを以て職業となす「くろうと」なるが如し、而して其之れを職業として營む當事者の或は生產者を代表するものたり、或は消費者を代表するものたるとの別あるは其時、其處、其民族の特殊の事情あるよりして來るものにして、之れが研究は頗る趣味あるものたり。ブユヒアーは亞非利加の自然人に就て之れを說明すること詳なり。經濟進化論一二一頁以下參照、（經濟學研究一八七頁）

(147) 已れ必しも要するにはあらざれども、人の餘れる物を買ひてこれを貯蓄し需要の人を待ちてこれを賣り利益を得るを以てとする者いづこれを商人（あきひと）といふ、商人の聚集して賣買する地を市といふ、市は元來人の群集する所の名にして樂人の集合する所を天高市といひ、天皇の都城として百官の集會する地に高市の名あるが如きこれ其例なり、賣買は衆人の群集する地を便利とするが故に、市に於いてこれを行ふにより、後には遂に商人の群集して賣買する地の名とはなりぬ。

古へ人口稀少にして部落各所に散在したる時代に在ては有無相通ずるの道大むね市によりし者と見ゆ。市は衆人の群集する所なれば商業をなすには便利なりしならん。

これ古代商業に關しては市の事最も多く顯るゝ所以か。今其重なる物を擧ぐれば應神天皇の朝に輕市（大和）あり、市を立つるものに見えたる之を始とす。其後雄略天皇の朝に餌香市（河內）あり武烈天皇の朝に海柘榴市（大和）あり、敏達天皇の朝に阿斗桑市（大和）あり、文武天皇の朝藤原の都に始て東西市あり寧樂の朝に東西市小川市（美濃）深津市（備後）阿部市（駿河）辰市（大和）などありき。殊に餌香市、海柘榴市は最も有名のものにして雄略天皇の時齋田根命より沒收したる資財を餌香市の橘樹のもとに置きて賣却せしめ給ひしこと見え、又顯宗天皇の縮見屯倉首が家の室壽の御歌に吾儛者旨酒餌香市不以直買と誇り給ひしを見ゆ。こは高麗人が餌香市に來りて旨酒を釀しゝに時人競うて高價を以て買飲せし故なりといふ。海柘榴市の如きも武烈天皇の歌場衆に入りて歌ひ給ひしを見え、又推古天皇の朝唐客入京の日倭騎を遣して海柘榴市に迎へしめ給ひしを見ゆ、されば此の二所は當時繁昌なる市場とこそ覺ゆれ。この外交通便宜の地には市場もありしものと見え、常陸茨城郡高濱の海邊、出雲島根郡朝酌促戸渡などには百貨輻湊して市人の往來せしこともの見ゆればなり云々。

橫井時冬氏著日本商業史自二頁至四頁。

(148) 市の多く神社佛閣の境內にて行はるゝをは我邦にても其事例多し。緣日と稱

するものは何此古俗を想起せしむ可き一例なり。――獨語 Messe は市を意味し又宗教上の祭典をも意味す。即ち。――

Messe, Hauptteil des katholischen Gottesdienstes, Erneuerung des opfers Christi durch Emporhaltung der geweihten Hostie, Lehnwort aus dem lat. Subst. Missa des 4. Jhdts.....uebertragen auf einen kirchtichen Feiertag überhaupt, an welchem Messe gelesen wurde.....Markt, ursprünglich in der Nähe der Kirche an solchen Feiertagen auf einen grossen und wichtigen Jahrmarkt in gewissen Städten. Heyne, Deutsches Worterbuch. 1892. Bd. II. Sp. 801.

現今にてゝ Leipzig 并に Frankfurt am Main に其名殘を止めたる Messe は一年二回 Ostern と Michaelmas の祭日にそれを行ふ也。

佛國に於ける foire も亦宗教上の祭日に開かれそれが開開は信徒の可るものを多く又 abbayé の地内に開催する慣例となり。今其最も著名なる巴里の Saint-Denis の起源に關してルヴァスールは次の如く言へり。――

Ils s'approvisionnaient aussi à la foire du Lendit que la tradition faisait remonter au règne de Dagobert et qui se tenait dans la plaine Saint-Denis du 11 au 24 juin. En 1109 l'évèque de Paris ayant, dit-on, rapporté de Jérusalem, un morceau de la vraie croix, l'avait exposée dans cette plaine afin qu'il fût plus facile à la foule des fidèles d'y faire ses dévotions; un concours immense de peuple était venu toucher la relique. Des marchands s'étaieant établis dans le voisinage et la foire du Lendit (ou Landit, Indictum) avait ainsi pris naissance. Elle devint très importante au XIIIe siècle lorsque Paris fut devenu une des plus grandes vllles de la chrétienté. L'évèque de Paris en faisait l'ouverture et donnait sa bénédiction. Levasseur, Histoire des classes ouvrières et de l'industrie en France. 2. E. I. T. 1900. p. 441.

猶 Pigeonneau, Histoire du commerce de la France. I. P. 1885. p. 205 et seq. を參照す可し

英國に關してはカンニンガムは次の如く言へり。――

From very early times men have gathered to celebrate the memory of some hero by funeral games, and this has given the occasion for meeting and for trading, so that *fairs* were held annually at places of burial; to these the men of surrounding districts flocked, to take advantage of the best opportunities for making a satisfactory exchange. When Christianity was introduced, and monasteries sprang up at the grave of each early martyr, the commemoration of the saint became the occasion of a similar assemblage and thus religious gatherings served as great opportunities for trade. Shrines, which attained a great celebrity, and were constantly frequented, were spots where

trade could be carried on all the year round. Thus the origin of Glasgow may be traced from the burial-place of S. Ninian. It is to be noted too that a stream of pilgrims, even if they journeyed with no other than religious aims, opened up a route that could be used for other purposes; the regular establishment in the twelfth century of a ferry across the Forth was due to Queen Margaret's desire to provide for the transit of the pilgrims who flocked to S. Andrews. Such places as these would be suitable sites for annual fairs and would give opportunities for trade with more distant parts. Cunningham, Growth of English Industry and Commerce. vol. I. 1896. p. 94—95.

Bücher, S. 79 ff.

(149) Ashley, Eng. Economic History. vol. I. pt. i. p. 77. pt. 2. 5, ff.——

Alles spricht dafür, dass die ältesten Städte in erster Reihe als Handelsplätze zu einer Stellung im öffentlichen Rechte gelangt sind, der Ausgangspunkt für die Entwiekelung des Stadtrechts also im Marktrecht gesucht werden muss. In den ehemals römischen Städten, soweit sie Municipalrecht erhalten hatten, finden sich die Marktplätze fast allgemein innerhalb, in den aus Kastellen hervorgegangenen dagegen in der Regel ausserhalb der alten Römermauern. Die ersteren haben demnach das Marktrecht von vornherein besessen, während die übrigen es erst nach der Stadtgründung auf

Wegen, die sich nicht mehr ermitteln, lassen erworben haben. Dagegen gehen alle Städte des inneren Deutschlands bei denen der Anfang sich feststellen lässt, auf ausdräckliche Marktgründungen zurück. Schröder, Lehrbuch der deutschen Rechtsgeschichte. 3. A. 1898. S. 614. (Vgl. 6. A. 1922. S. 686.)

Waitz, Deutsche Verfassungsgeschichte. Bd. 7. S. 377 ff. 407. 411.

Schulte, Ueber Reichenauer Städtegrundungen. Zeits. f. d. Geschichte des Oberrheins. 44. S. 137 ff.

Rietschel, Markt und Stadt in ihrem rechtlichen Verhältnisse. 1897. I. S. 776 ff.

Sohm, Entstehung des deutschen Städtewesens. 1890. S. 114.

市が發達して其市に於ける平和が確立するや市場の自由なるものが發生し之を保護する爲には各種の特權設備が起り終には都市は繞らすに濠又は城壁の類を以てして四方の田舍に對して一の安全なる逃場たり局外中立の場所となる(150)。都市に住む住民も始は全く土地に依賴して居るこゝは毫も地方の農民と異らない。今日都市と言へば無論商工業の中心であるが此時代に在つては都市の住民は商工業者で無く其本業とする所は矢張り農業であつた。此點に於ては都市の住民も地方の住民も少しく異る所は無い(151)。異るところは地方の農民は領主に對しては臣下の關係があつて自由自主の權な

く、地主の欲する儘に貢物又は賦役を納めなければならぬのであつて、土地を所有せざる者は何等の行動の自由を有して居なかつた。之れに反して都市の住民は遙かに多くの自由を得、遙かに多く保護せられ又特權を有して居た。殊に戰亂の續いた中古に在つては外部の攻擊に對して充分の保護を受けて居るから安心して生業に從事することが出來たことは非常な相違である(152)。此く充分なる保護があり特權を有する都市住民の進歩は地方の農民に比して遙かに速かで、人口の數も增加し其富も亦殖へた。大きい領主程充分な保護が與へられるから其都市も亦早く進歩する(153)。住民の數が增すと、其所有する土地のみでは充分に欲望充足の手段を得ることは出來ない、そこで土地以外から欲望充足に充つる生産の手段を見出さなければならぬ。茲に於て專ら工業のみに從事する者と、專ら農業のみに從事する者との間に分業發生し、生産は專ら交換を目的として營むやうになる。伊太利、佛蘭西、白耳義、英吉利等に於ては羅馬時代からの都市の遺跡が存在して居るか、又は天然に開市場に適する事情の備はつた所に於ては十二世紀、十三世紀の頃、早く既に都市が發生した(154)。獨逸でもライン並にダニューブ沿岸地方は羅馬時代の文明の遺跡が存して居て茲に再び都市としての萠芽を開くに至つた(155)。其發達は獨逸に於ては十二世紀以後十三世紀に至つて起り殊に西北地方の獨逸に在つては非常に後れ十四世紀の頃に發生したのである(156)。此の如くにして獨逸でも亦都市と市といふものと同一の物になる。十三世紀から十五世紀の頃にかけては獨逸の都市が非常に繁昌を極めた。其故は、其頃の世界商業の通路に當つたからである。當時の世界商業は獨逸の西南部からダニューブ河に沿うて東洋地方に出るが最も重な行路であつた(157)。十字軍役が起つてからは、之に加えて伊太利と歐羅巴の北部との間の交通が盛んになつたが爲に、其通路に當つて居る獨逸は非常な繁昌を極めた。獨逸の繁昌は卽ち伊太利の繁昌、伊太利の繁昌は獨逸の繁昌であるといふやうになつた(158)。此くして都市が繁昌し其都の市場も非常に繁昌する樣になり、都市に往來するのを專業とする一種の階級が發生した、之を名けて商人といふ。此時代の商人は今日の商人とは正反對で、專ら買ふことを重にして居る商人である。都市の需要品を買ひ集める人間を稱して商人と言つたのである(159)。併し外國の商人に對しては未だ自由に門戸を開放しない、嚴重な公儀の干涉の

下に幾多の嚴重な規則を設けて交換することを許すのみであつた。外國の商人は此等煩雜なる干渉や羈束あるが故に非常に利益ある商業でなければ之れに從事しない。卽ち小商業は決して外國商人が從事する事で無く大商業のみが外國人の從事することであつた。此く外國人が集つて大商業を營む所は大市と稱して世界交通路の交叉點にあたる處に起つた(160)。其取扱ふ商品も決して日常の必要品で無く熱帶地方の果物香味料鹽乾魚毛皮精巧なる布帛葡酒等の奢侈品に限られて居つた(161)。

(150) Vor dem 12. Jahrhundert fasste man, im Gegensatze zu den Dörfern und offenen Märkten (fora), alle befestigten Plätze, wei die ehemaligen Römerstädte, ummauerte Märkte und einfache Burgen, ohne Unterschied unter Ausdrücken wie *burg, civitas, urbs* zusammen. Erst seit dem 12. Jahrhundert gehörte die Befestigung mehr und mehr zum Wesen der Stadt, wenn auch manche Städte erst im 13., einige nicht vor dem 14. Jahrhundert zum Besitz einer Stadtmauer gekommen sind. Die Befestigung bildet seitdem das Unterscheidungsmerkmal zwischen Land und Stadt, es entsteht das Sprichwort: "Bürger und Bauer scheidet nichts als die Mauer." Unter "Stadt" versteht man nunmehr einen mit Marktrecht, Immunität und politischer Selbstverwaltung ausgestatteten Ort, der sich, ganz abgesehen von dem sehr verschieden abgestuften Umfange der Selbstverwaltungund der Gestaltung ihrer Organe, von den offenen Märkten durch die Ummauerung unter sheidet. Schröder, Lehrbuch S. 612. 6. A. S. 678—9.

(151) Anfangs sind die dauernden Bewohner der Stadt auch hinsichtlich ihrer Beschäftigung in keiner Weise von den Bewohnern der Landorte unterschieden. Sie treiben Landwirtschaft und Viehzucht wie diese; sie nutzen Wald und Wasser und Weide gemeinsam; iher Wohnungen sind, wie noch heute an der baulichen Anlage vieler alten Städte zu ersehen, Bauernhöfe mit Scheunen und Stallngen und weiten Hofräumen dazwischen.....Sie sind ja sozusagen als eine stehende Besatzung in die Burg gelegt und haben reihum auf Thürmen und Thoren den täglichen Wachdienst zu versehen. Bücher, S. 137.—8.

Cunningham, I. pp. 2. 173. 215, 227.

Most of these (towns) were what we should now consider but large villages; they were distinguished from the villages around only by the earthen walls that surrounded them, or the earthen mounds that kept watch over them. Ashley, pt. 1. p. 68.

Rietschel, S. 144 ff.

(152) But it is readily seen that population would tend to congregate at places where high roads crossed one another, or where rivers could be forded; such places, indeed, would in many cases be of strategic importance, and so would come to be fortified. There is no reason to suppose that any monastic orders, before the Cistercians, "lived of set purpose in the wilderness;" monasteries and cathedral churches were placed where villages were already in existence. But beneath the shelter of the monasteries the villages soon grew into small towns; the labour services to which their inhabitants were bound, or the commutation for them which they paid, long testifying to the originally servile character of the holdings. Many a village around the fortified house or castle of some great noble had a similar history. Ashley, loc. cit p. 69.

櫻井時冬著日本商業史九十五頁以下。

Inama-Sternegg, Bd. II. S, 314 ff.

Schröder, S. 608 ff.

Below, Territorium und Stadt. 1900. S. 303 ff.

(153) 故に雜雜割據の時代には城主の繁榮と商業とは（都市へ商業へ意ナル可シ）常に相伴ふものなることを知るべし。櫻井時冬氏商業史九七頁。

Bücher, S. 149 參照.

(154) (155) 商政經濟論所載商權の消長と商業政策參照'（經濟學研究三七六頁）

(156) Bücher, S. 139. 商政經濟論二一七頁以下參照'

(157) Heyd, Geschichte des Levanthandels im Mittelalter. 1879. Bd. I. S1 85 ff.

Depping, Histoire du commerce entre le Levant et l'Europe. 1830.

(158) Schulte, Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs zwischen Westdeutschland und Italien mit Ausschluss von Venedig. 1900. Bd. I. S. 105 ff.

(159) Bücher, S. 139.

Die Besiedelung des Marktes, der eine reine *koufstat* sein sollte, erfolgte ausschliesslich durch Heranziehung von freien Gewerbetreibenden (Kaufleuten, Juden, Handwerkern), die man als *Konf.ints mercatores, negotiatores* zusammenfasste. Schröder, S. 615.

Rietschel, S. 143.

Steinhausen, Der Kaufmann in der deutschen Vergangenheit. 1899.

(160) 前掲註(152)參照'

同一著商業經濟政策二一一頁以下參照'

Roscher, Betrachtungen ber üdie geographische Lage der grossen Städte. Ansichten Bd. I. S. 317ff.

Schulte, Bd. I. S. 156 ff.

(161) Yet the trade with foreign countries cannot have been large, the wares which, in an old English dialogue, the merchant describes himself as bringing with him, seem to be all articles of luxury such as would be needed only by the higher classes,——"purple cloth, silk, costly gems and gold, garments, pigments, wine, oil, ivory and brass, copper and tin, sulphur, glass, and such like." The mention of merchants in the English laws is so infrequent that we can hardly suppose that any considerable trading class had come into existence. Ashley, p. 70.

Bücher, S. 147.

Schulte, S. 112—151.

都市の發生に伴ひ都市に特有な政治組織スタット・フェルファッスングが發生した。其起源に就ては未だ學者間に異論あるを免れないが(162)、其事は別に論ずるこゝとして經濟上最所要なる點は在來の孤立的莊園經濟並に村落經濟と異なつて、多數の人間が極く狹い所に集中し、周圍の地方の經濟上の中心となり、總ての經濟上の土臺は都市を中心點として動くやうになつた是である。都市には又非常に權力の强い領主僧正が住居し

て居つた。是等の都市の中には多くの村落を合併して出來たものもあり、莊園から發達して出來たのもあり、單に市があつた爲に其市のある所へ都市が發生したものもあり、或は名譽巨利のあつたが爲にそれから市が開け都市が發生したものもある(163)。英吉利に於ては到る處哥馬人が早くから入込んで建てゝ居つた堅固な城壁から、從來の都市が起つたものも少からずある(164)。

(162) 前掲註(149)參照。

Ashley, Surveys, pp. 167—212.

近來(大正十三—四年)予の研究室に於て宮下孝吉氏此問題を研究せり。其結果は他日公にするを期す

Pirenne, Origine des constitutions urbaines au M. A. Revue historique. 57. 1895.

Cunningham, I. pp. 173. 219. 225 f.

Sohm, Entstehung des deutschen Städtewesens. 1890.

Keutgen, Untersuchungen über den Ursprung d. deutschen Stadtverfassung. 1895.

Hüllmann, Städtewesen des Mittelalters. 1829.

Schröder, S. 614 ff.

Schulte. Ueber Reichenauer Städtegründungen im 10. u. 11, Jhd. Zeit. f. Geschichte des Oberrheins. 44. S. 137 ff. 143 ff.

Heusler, Ursprung der deutschen Stadtverfassung. 1872.

Rietschel, Markt u. Stadt in ihrem rechtlichen Verhärtnlss. 1897.

Lamprecht, Deutsches Wirtschaftsleben im MA. I. S. 1342. ff. II. S. 256 ff. S. 481 ff.

Bathold, Geschichte d. deutschen Städte. 1850—53.

Below, Ursprung d. deutschen Stadtverfassung 1892.

Derselbe, Entstehung d. deutschen Stadtgemeinde. 1889.

Hegel, Entstehung d. deutschen Städtewesens. 1898.

(163) Cunningham, I. pp. 172. 225.

Pigeonneau, I. p. 170 et seq.

獨逸にては羅馬時代の都市の遺跡にして國王の Palatium (Pfalz) 城あり及僧正の居所たりし所最も繁榮なる都市を生じたり。Worms, Kö'n, Speier, Strassburg, Regensburg, Augsburg, Trier, Metz のごときは皆然り。Schröder, S. 612 — 9. 124. 626. ——代々僧正の居所なりしが爲め雄なる都市となりしは Erfurt, Wurzburg にして寺院の設立と共に發生せる都市は St. Gallen, Fulda, Schaffhausen 等是れ也。Schröder, 617. —— Palatium の存せし處にして通の衝に當り四通八達の便ありしが爲雄大を極めしは Frankfurt a. M., Ulm, Aachen なり。Schröder, 732, 536 f. —— Hegel, Chroniken d. d. Städte 1862 — 96. は二十五卷より成り最も詳密に渉る都市沿革誌なり。

Worms, Speier. Mainz に就ては Schaube, Zur Entstehung der Stadtverfassung von Worms u. s. w. 1892.——

Köln に就ては Ennen, Geschichte der Stadt Köln 1863 — 1865. 此書には綱要あり Ein Auszug aus dessen grosser Geschichte. Volksausgabe in einem Bande. Düsseldorf. 1880 是也。——

Strassburg に就ては Schmoller, Strassburg zur Zeit der Zunftkämpfe. 1875. —— Strassburgs Blüte u. die volkswirtschaftliche Revolution im 13. Jahrhundert. 1875. ——

Regensburg に就ては Verhandlungen des historischen Vereins für Oberpfalz u. Regensburg. 37, (Gfrörer). —— Gengler, Beiträge zur Rechtsgeschichte Baierns. I. S. 214 ff.

Augsburg に就ては Gierke, Untersuchungen zur deutschen Staats-u. Rechtsgeschichte. Heft 5. 1879.——

Trier に就ては Westdeutsche Zeitschrift. Erg. Heft. I. 1884. (Schoop). ——

Metz に就ては Döring, Beiträge zur Geschichte v. Metz. 1886. S. 52 ff.

Erfurt に就ては Lambert, Entwicklung d. deutschen Städteverfassungen im MA. 1865. ——

Wurzburg に就ては Gengler 前掲書 459 ff. 幷に Gramich, Geschichte Wurzburgs. 1882. ——

Frankfurt a. M. に就ては Archiv für Frankfurter Geschichte, 8. S. 162 ff.—— Euler, Frankfurter Geschichte. 1872. —— Bücher, Bevölkerung von Frankfurt im 14. u. 15. Jahrhundert. 1886.

Ulm に就ては Rübling, Ulm's Handel im Mittelalter. 1900. —— Jäger, Schwäbisches Städtewesen des Mitttelalters. 1831. —— Aachen に就ては Haagen, Aachener Geschichte. 1874. 等を見る可し。

(164) Cunningham, Growth I. p. 93.

都市の住民は農民に與つた發達をなし自由の權早く起り殊なる都市法が發生した(165)。英吉利に在つては都市は國王から種々の特權を得た。例へば稅を納める時に各人之を納めないで都市全體として納め負擔額を都市住民の間に割當つるは都市の自治を以てするやうになつた(166)。

(165) 前掲註(162)に引用せる諸書參照。

Ashley, Economic History. vol. I. pt. II. pp. 3—5 の書目幷に pp. 55—65 に涉る Notes 併せ見る可し。

(166) Ashley, loc. cit. pp. 12—42.

Cunningham, I. p. 216 et seq.

Stubbs, Constit. History. I. pp. 627. 671.

フェヒアーの言ふ所に據れば獨逸の中古に在つては都市は凡そ四五時間の距離を隔てた所に存在して居つた其の理由は四方の百姓が一日に往返の出來る丈けの距離に見積つて出來たものであると言ふ(167)。伊太利に在つては是等の都市が非常に發達して都市自ら政治上の團體となつた。佛蘭西や英吉利に在つては都市を基として中央の君主權が發達し獨逸に在つては各都市はそれ〴〵の諸侯を戴いて居つて此等諸侯の權が發達した爲に中央の權は發達しない中央の帝室は都市に對して非常に敵意を挾んで屢之

と衝突した例がある(168)。都市と君主又は諸侯とは屢々爭鬪をしたこともあるが、都市は漸次に勝を占めて政治上の獨立を得、四方から農民が多く集り來るやうになる。地方の封建制の領主の下に在る農民の狀態よりは、都市に住む市民の狀態の方が遙かに自由であるからどうしても此處に多勢の人が集まつて來る。都市は又四方の地方に對して經濟上に於て全然之を支配するやうになる(169)。

(167) Bücher, S. 141. (12. u. 13. A. S. 121.)

今日現存の都市に就て之れを見れば一都市に對する總面積平均は下の如し、

バーデン國	132	平方基米突
ウルテンベルヒ國	134	〃
ヒルサス・ロトリンゲン州	137	〃
ヘッセン	118	〃
サクセン王國	105	〃
ヘッセン・ナッサウ	145	〃
ライン州	193	〃
ウエストフアーレン	196	〃
サクセン州	175	〃
ブランデンブルグ	291	〃
バイヒルン王國	328	〃
ハノーヴアー	341	〃
シユレスヴヰツク・ホルスタイン	350	〃
ポメルン	412	〃
西プロイセン	473	〃
東プロイセン	552	〃

元より中古以來桑溟の變遷からざりしと雖も以て當時を考ふるの料となす可し、思ふに我邦に就ても亦同樣の事實あらん、唯我邦統計家、人文地理家の未だ此種類の研究を試みたるものなきは甚遺憾とす可し、但我邦は地勢獨逸と異り幅狹く縱長きが故に之れを面積に就て見るときは獨逸と比較の當を失するものあらんも大體に於て一日の往返を標準として郡邑の存することは地方を旅行するものゝ必ず注意する處なり、――韓國北部にありては此理最も顯著にして人口稀少なる處は我邦と異なり沿道殆んど人影を認

めず況んや人家の加きは淡して之れを見ることなしと雖も大抵我四乃至五里毎に站驛の設在すあり故に旅行者或事情によりて途に數里を失ふか數時の遲遲を生ずるとき は悲酸宿泊惡く序を失し時に空腹を忍んで數里行かざれば一片の果餅をも得る能はざる ことありて我邦の如く到處殆んど人家を見るものと頗ぶる事情を異にす之れ站驛の一日の往返半日の行程を標準として存するのみにして其他に散在するものなきが爲なり、一又市も候我四乃至五里を距てたる都邑毎に順を逐ふて開かるゝの例あり、是は一都邑の市の終りて一日の行程を距てたる次の都邑に到りて市を開くの便より來れる習慣にして、一度市と同時に都邑に出入すれば常に到處の都邑にて市に際會すると云ふは是が爲めなるなり、——以て本文と對照するに足らん。

(168) Below, Territorium u. Stadt. 1900.

Schröder, S. 633.

Leo, Geschichte der italienischen Staaten II. S. 388.

Raumer, Geschichte der Hohenstaufen u. ihre Zeit. 6 Bde. 3 A. 1857.

Nitsch, Geschichte des deutschen Volkes. 1883. II. III.

Ferrari, Histoire des révolutions d'Italie ou Guelfes et Gibelins 1858.

猶 Giry, Documents sur les relation de la royauté avec les villes de France 1180 —— 1314, 1885. は必ず參照すべき可とす。

英國に就ては Ashley, pt. II. p. 7. 42 ff.——Cunningham, I. p. 373.——Stubbs, Constitutional History. I. p. 667 et seq. II. p. 221.

(169) Schmoller, Strassburgs' Blüte (前掲)

Gierke, Rechtsgeschichte der deutschen Genossenschaft. 1868. SS. 252. 344. 463 ff.

Maurer, Geschichte der Städteverfassung in Deutschland. 1870. II. S. 254. 513.

Scherer, Allgemeine Geschichte des Welthandels. 1852. I. S. 396.

Beer, Geschichte des Welthandels. 1800. I. S. 224.

Kiesselbach, Der Gang des Welthandels im MA. 1860. S. 66.

Falke, Geschichte des deutschen Handels. 1859. I. SS. 104. 194 ff.

土地を基礎とせずして經濟上の進歩發達を遂げ又社會上重要の地位を占めるゝことが出來るやうになつたゝことは最所要の點である之れより動産が經濟上社會上非常に重要なものとなり資本の發達を速にし土地迄も亦資本化せらるゝに至る。蓋し資本化は動

產化である。而してそれは凡ての經濟上の財に流通的性質を與へる貨幣の全勝の結果である(170)。此の都市が一の經濟組織となり都市經濟の組織の中に於ては、各經濟單位は田舍に於けるよりは遙かに縮少す。各個人の自由は確立し經濟單位は多數人の集合體でなくなつて、個人が主體となる。他方には多數の經濟單位を集めた綜合體としての都市經濟が其の地位を固める。此の經濟組織は政治上の組織と合致することもある。又政治上の統一なき所に於ても、經濟上には各種の特權、各種の制度設備を以て、事實に於て領土內に於ける經濟單位を支配するやうになる(171)。是に於てか都市は其發達を確めるが爲めに種々な經濟政策を實行する樣になる。都市經濟政策の重なるものは第一は都市の住民の欲望充足に必要なる物は之を交換するに公然嚴重なる儀式を用ゐて、公けの場所に於て之をなさしめ、其交換は成るべく中間人の手を經ずしてなす樣に干涉、規定することである。此目的を達する爲めには都市には公けに認められた度量衡の制あり、度量衡を司る役人があつて、都市の吏員は都市に開く市を嚴重に監督し、其の取締の爲めに繁雜なる規程を設けた(172)。中間商業は全く禁ぜられ、市場以外に在つては如何なる種類の物でも交換、賣買を嚴禁せられた。地方の農民は食料品並に原料品を都市の市場に持ち來り、之に換へて都市住民の作つた工業品を買入れて歸つて行く。卽ち自己生產の時代を脫するのみならず顧客生產が段々重要を占むるに至る。言葉を換えて言へば、生產者は其生產した物を直ちに自ら消費せず、總ての經濟上の財は中間者の手を經ずして直接に生產者から消費者の手に渡る狀態である、從つて此時代に行はれて居つた工業は賃仕事である(173)。

(170) 企業心理論第三章參照、

(171) (172) Schmoller, Umrisse u. Untersuchungen. SS. 4-10.

Cunningham, I. p. 293.

Ashley, II. pp. 12 ff. 23 ff.

Roscher, N. O. des Handels u. Gewerbfleisses. 1899 SS. 14. 28. 97. 802. 808.

(173) Bücher, SS. 144. 149 f.

都市經濟政策の第二は、都市住民の要する工業品は成るべく其都市內に於て生產すべ

きものとし、此目的を達する爲には都市の工業者のみ都市の市場に於て其工業品を賣捌く特權を與へられる。都市以外では生産した工業品は之を販賣することを全く禁ずるか、又は或時期を限つて其時期丈けは販賣することを許すのみである。例へば一年に一回若は二回丈けは都市以外の工業品を持つて來て都市の市場で賣買するを許した(174)。此場合でも更に之を他に販賣する爲に賣買することを許さない、直接自分に必要な物のみを買入れるに限るといふ原則を執つた。而して都市の工業者が此の如き特權を充分に維持し得たは手工業組合(175)制度あるが爲である。此組合に這入つて居らぬと都市に於て工業に從事する權利が無い、此組合に這入つて居る者は工業に從事する權利があるのみならず同時に市民たる權利を得る。此手工業組合制度のある爲めに工業上に於て競爭は全く杜絶せられて居た。而して都市以外から入り來る工業品の中、都市にて生産出來ない物に對しては成るべく之を都市で生産し得るやうに保護奬勵を加へる。例へば輸入工業品に高率の市場税を掛けたり(176)、其他色々の方法手段を用ゐて此目的を達する爲めに力を盡した。同時に都市の工業者に對しては其生産物に一々綿密な規程があつて自分の勝手に生産することは出來ない。一定の法律上の規程に從つて生産しなければならぬ。例へば生産物の種類、或は分量品質並に其の生産したものゝ賣價等の如きも公定物價表があつて、之れに從つて賣買せなければならぬ(177)。殊に品質に關しては都市の役人が嚴密に監査して少しでも違背する者は嚴罰を課した(178)。此く都市で要する物は凡て其都市で生産する主義を執つたが故に、商業の發達は妨げられた。都市の商業は極く小規模の小賣商業のみで、大商業又は卸賣、直接消費者に賣るので無く他人に賣買する目的を以て買ふ人に賣渡すことは都市の住民は之れに當らず、外國の商人のみが營んで居つたのである(179)。是等外國商人が重もに出入するは大市のみである。又都市の生産した物を隨意に他の都市へ持つて行つて賣ることは禁ぜられてあつて、都市に於て必要な物は假令今買手が無くても之を貯えて置いて、都市の市場に必ず一定の時に一定の分量を賣出さなければならなかつた(180)。即ち一種の輸出禁止が勵行せられて居つたのである。

(174) Bücher, S. 145.

Roscher, N. O. des Handels u. Gewerbeleisses SS. 789 f. 870 f.

(175) Roscher, a. a. O. S. 794. 814 f.

日本の座に關しては横井時冬氏著日本工業史參照。

(176) Roscher, a. a. O. SS. 13. 39. 154. 846.

(177) Roscher, S. 798.

(178) Roscher, S. 797.

(179) 前掲註(143)參照、

並に英國に就に付ては Cunningham, I. p. 194 f. Ashley, II. p. 12. 227.

(180) Bücher, S. 145.

Stapelrecht に就ては Roscher, S. 148. 151. 並に同書に引用せる諸書參照、

此く中古の都市經濟は自足的の家屬經濟や莊園經濟と比較すれば遙かに範圍が廣く、遙かに進歩した經濟組織であるが其根本的の性質が自足的排外的である點は全く同一である。即ち之を自足的都市經濟と言ふことが出來る所以である。此意味に於ては都市經濟は莊園經濟又は家屬經濟の範圍が廣くなつた組織に過ぎない。併し此莊園經濟と異るところは、都市の住民と百姓との間に分業が發生し、都市の住民間にも亦た分業が行はれ其生産するところのものは必ずしも悉く消費するので無く、各々需要以外の物たりとも其專ら適する生産業に從事するに至つたことゝ之れである。此分業は職業の分立(181)であつて、農夫は農業を以つて職業とし、商人は商業を以て職業とし、手工業者は工業を以て職業とし、各職業者の階級は又各自足的性質を帶びて居て、無暗に他人が這入つて來ることを許さない、極て排外的の性質を帶びたものである。從つて都市經濟の組織が全體として自足的であるのみで無く、其組織内の各經濟單位たる職業階級も亦自足的經濟を營んで居つたものである。

(181) Schäffe, Bau u. Leben des socialen Körpers, I. S. 325. Bücher, S. 340.

Schmoller, Grundriss, S. 350. (2. A. S. 376.)

此の如き自足的排外的職業が當時の社會上の階級となつた。中古に於ては農工商の階級の區別は儼然と確立して居つて容易に打破することは出來ない(182)。此く階級の生

したとは經濟上の進步であつた(183)。昔日の自足的家屬經濟や莊園經濟に比較すると、此く各種の階級間に分業が行はれ、人間の生產する物が均一でなく、各々天禀技能に應じて其の最も適した物を生產し、生產した物は他の物と交換することが出來るやうになつて、欲望の充足は遙かに僥かに又複雜なるを得るに至る。其結果として人間生活の一部分は、經濟上の欲望充足の爲めに費すを要せず、更に其他の高尙な事柄に向て用ゆることを得るやうになる(184)。是に於てか都市經濟は漸々に其範圍を擴めて、終に國民經濟が發生する。

(182) (183) Schäffle, Bau u. Leben. a. a. O. Schmoller, S. 399 f.

Durkheim, Division du travail social 2. E. 1902.

Spencer, Sociology. III. pp. 334—337.

(184) Schäffle, S. 558

Simmel, Sociale Differenzierung. 1890.

Paulsen, Ethik. II. S. 325 ff.

第三節　國民經濟

國民經濟の發生は、近世的民族國家の發生と同時代である。西歐羅巴に付て見れば、西班牙が先づ一番始めで葡萄牙之に次ぎ、佛蘭西、和蘭、英吉利又之に次いで出て來た。獨逸並に伊太利の如きは、遙かに遲れて國民經濟を完成したものである(185)。中世から近世に移るに際して封建制度は打破せられ、中央集權的國家發生し、之に伴つて近世の民族的統一國家が完成したのである。此傾向は亞米利加發見並に東印度航路の發見と伴つて、世界商業の中心點が、地中海を去つて大西洋に赴いた時に其萌芽を發した(186)。近世國家の發生には、中央權が地方々々に個々に分立割據して居る權力を併合し、全國を包含する大きな政治機關を作り、此政治機關を動かす爲に中央集權的の行政、殊に金給の官吏並に常備軍を設くるに至つて、其勢ひを早めたのである(187)。亞米利加と、東印度航路の發見とは、

西歐諸國を東洋の文明に接觸せしめ、之に依て歐羅巴の人々は新らしい欲望を惹起した。此新らしい欲望を充すには、從來の經濟組織では不充分となり(188)。都市經濟は之に應ぜんとしても最早其力に及ばない。殊に各種複雜な欲望を充す道は、政治上個々に分立して居る範圍狹少な、都市の經濟組織を以つては充することが出來ない。全國を包含し、包含せられたものが、全國を通じて少しも隔てを置かず此經濟組織の範圍を汎め、多々益々上進し、複雜に赴く經濟上社會上の必要に應ずることを肝要とする。他方に於ては、經濟組織の範圍の益々大きくなることは、又同時に其組織内の各經濟單位が益々小さくなることを必要とするのである。益々增進して行く欲望を充すには、生產力の發達が必要である。生產力の發達は其の淵源たる各經濟單位が、充分な權利と、充分な義務とを負擔する個人を主體とするにあらざれば望むことは出來ない。此の各經濟單位が個々に分化して各々其力を發展して行くと、之を包含する組織としては、都市經濟の如き小さい組織では足りない、全國民を統一した民族的國家を土臺として築いた國民經濟でなければ、是等の經濟單位を包含する經濟組織としての職分を盡すことは出來なくなる(189)。殊に東印度航路の發見、並に亞米利加新大陸の發見は、歐羅巴諸國が其力を伸ぶべき新領土とを澤山に與え、植民地が殖え、植民地との間に商業交通が起つた。此等植民地を經營して行くには、强大なる中央集權的の國家でなければならなくなつた(190)。

(185) 商政經濟論附錄參照。

(186) Brentano, Zukünftige Handelspolitik des deutschen Reiches. Schmoller's Jahrbuch. IX. S. 1 f.

Kiesselbach, Der Gang des Welthandels. SS. 272. 302.

(187) Schmoller, Umrisse u. Untersuchungen SS. 32 f. 137. 殊に SS. 247—288 (Entstehung des Preussischen Heeres von 1640-1740).—— SS. 289——313 (Der deutsche Beamtenstaat vom 16—18. Jahrhundert) を見よ。

Brentano, a. a. O. 參照。

Cheruel, Histoire de l'administration monarchique en France. 1855.

Forbonnais, Recherches et considérations sur les finances de la France. 1758.

F. I. 75.

(188) Kiesselbach, S. 306.

亞米利加發見・印度航路發見は西歐人の經濟活動の範圍を廣大ならしめたるは著大の結果なるが如しと雖も實は之れを欲望の急激なる增進と之れが結果として起れる經濟組織の急速なる擴張的發展とに比するときは遙かに重要の度に於て劣るものなり。

(189) 拙稿經濟單位の發展に關する舊說と新說（內外論叢二の二）（經濟學研究第二頁）

(190) 近世植民政策は其淵源を茲に發するなり、世の植民政策を口にするものゝ全く看過する處なり、—— P. Leroy-Beaulieu, Colonisation chez les peuples modernes 1902. —— Roscher, Kolonien, Kolonialpolitik und Auswanderung. 3. A. 1885. —— Häbler, Wirtschaftliche Blüte Spaniens und ihr verfall. 1883.

此の統一的國民經濟は其源を都市經濟に發したことは言ふまでも無い。其の最も早く發達したは伊太利である。伊太利の都市經濟は、既に都市經濟の範圍を稍々脫却して國民經濟に餘程近いたものである。伊太利の都市は純然たる都市でなく國家的性質を餘程帶んだもので、之れを都市國家都市共和國など稱へる(191)。併ながら伊太利の發達は、完全なる統一的國民經濟を完成せざる前、早く既に世界商業の大勢が變動し去つて、伊太利は歐洲の經濟上の中心で無くなつて仕舞つた(192)。從つて國民經濟完成の嚆矢たる名譽と利益は、伊太利に代つて世界商業の中央舞臺となつた大西洋沿岸の西班牙に讓らなければならぬやうになつた(193)。獨逸も亦伊太利に甚だ類して居る。殊に世界商勢の變遷から來つた衰運は、之れを伊太利と共に分たなければならなかつた。獨逸の各地方に於ては都市經濟としては充分な組織はあつたが、地方分權の勢ひが强く獨逸全國を包含する國民經濟は、終に成立するに至らなかつた(194)。是に於て獨逸には他國に其例を見ない一種特有の經濟組織が起つた。シュモラーは之を領域經濟と名けて居る。領域經濟とは、各封建諸侯が銘々出來得る丈け經濟單位を集めて、都市經濟よりは稍々範圍の廣い經濟組織を、自己の領域を基礎として其上に作つたのを云ふのである(195)。是は獨逸特有の發展で、都市經濟と國民經濟の中間に位する特殊の經濟組織である。我日本の江戸幕府時代は勿論純然たる自足的封建經濟でなく、優に國民經濟の發生期に屬すべきものであるが、仙臺藩とか、金澤藩とか、薩長土肥と云ふ樣な大藩は、又或る意味に於て領域經濟に

類似な經濟組織を作つて居たものと見るべきであらう(196)。之に反して英吉利和蘭佛蘭西では充分なる意味に於ける國民經濟が發生するに至つた。殊に佛蘭西と英吉利は此點に於て最も成功したものである(197)。

(191) Leo, Geschichte der italienischen Staaten. I. S. 253. 376.

(192) Schulte, a. a. O. I. SS. 674—680.

(193) Häbler, Wirtschaftl. Blüte Spaniens. S. 19 f.

Derselbe, Zur Geschichte der Fugger'schen Handlung in Spanien. 1897.

Zimmermann, Europäische Kolonien.II. Kolonialpolitik Portugals u. Spaniens. 1896. S. 225 f.

Scherer, Handelsgeschichte II. SS. 142—272.

Beer, Handelsgeschichte. I. SS. 213—218. II. SS. 113—167.

(194) Scherer, II. S. 602—655.

Falke, Geschichte des deutschen Handels. 1860. II.

Beer, II. SS. 395—481.

Biedermann, Deutschlands trübste Zeit, oder der 30 Jährige Krieg in seinen Folgen für das deutsche Culturleben.

Ranke, Deutsche Geschichte im Zeitalter der Reformation.

Roscher, Geschichte der N. O. in Deutschland. 1874 SS. 32—207.

Schmoller, Umrisse. S. 30.

(195) Schmoller, Umrisse. S. 10 ff.

Bücher, S. 157.

(196) 拙著 gesell. u. wirtschaftl. Entw. S. 116—142.

(日本經濟史論第一八一—一二二頁)

(197) Schmoller, a. a. O. S. 156. f. (11—12. Taus. S. 158.)

Ashley, op. cit. pt. 2. p. 9.

Bücher, S. 158.

國民經濟の發達して來た最初の形態は國家經濟であつた。當時の思想に於ては國家

と國民國家經濟と國民經濟の區別が充分判然して居なかつた。今日でも國家經濟と國民經濟の區別の不十分なる事例は澤山ある。英吉利人は國民經濟のことを政治經濟と稱して居る。是れは國家經濟の意味であつて、區別が十分出來て居ない一の證である(198)。伊太利は大きな都市經濟で、ヂエノヴエジは之れを民事經濟と稱して居る(199)。此の如く獨逸では領域經濟、西班牙、英吉利、和蘭、佛蘭西では政治經濟と稱して居るが、其目的は皆悉く一樣であつた。即ち都市經濟より遙かに大きな範圍、殊に民族的國家並に民族的國家を基礎とする經濟組織即ち國民經濟を、出來得る丈け自足獨立ならしめ、此發達を妨ぐべき地方個々の經濟組織を打破して、都市寺院、各階級の貴族等の所領(200)の如き、個々に散在して居た經濟上の權力を打破し、他方には都市に存して居た手工業の組合の如き排他的の獨占特權制度を一掃し、是等を綜括して中央政府から統一的に總てを支配する經濟組織を作らうとするにあつた。此く統一された國民經濟は、外國に對しては完全なる獨立を保ち、完全なる自立をなすものでなければならぬといふ考から、外に對しては成るべく門戸を鎖ち、全體としての外は成るべく外國の國民經濟とは接觸することを避ける。之に反して國民經濟の內に在つては、個々の小經濟組織の關門は悉く之を打破して、絕對的自由の交通を得せしめ、都市と都市、村落と都市、或は一階級と他の階級間に存在して居つた各種の懸隔は、悉く之を打破するに力を盡した。而して內國に於ける經濟上の產業は力を極めて之を發達させ、之に依つて以て國富を充實し、外に對して充分なる經濟上の獨立を保つことを勉め、强力な植民政策を行つて新しい領土を得、國民經濟の範圍を愈々擴張し、是から澤山な富を求めるに汲々たるに至つたのである。

(198) 前掲註(65)引用諸書參照。

Wagner, I. S. 353 f.

Ashley, Surveys. p. 263.

Roscher, System I. S. 41 ff.——

Giammaria Ortes は既に國民經濟なる語を使用す、即ち彼れは其著を名けて Dell' economia nazionale と呼ぶ 1774 の出版に係るものなり。

(199) Genovesi は其著を名けて Lezioni di Commercio, ossia d'economia civile (商業教科書一名民事經濟教科書) と云ふ 1765 の出版に係る、economia civile の名稱の不當なることは

Roscher 其 System I. 1854. S. 24 に於て非難を試みたり、――第二十二版には S. 43 註(1)中に載せたり、就て見る可し。

(200) Grundherrschaft (Frohnhof), manor, seigneurie の發達して Territorium となれるものあり然らざるものあり、而して英國に少くして獨逸に多し。

今此等各國が、國民經濟建設の初期に方つて執つた經濟政策を總稱してメルカンチル・システム又はメルカンチリズムと言ふ。メルカンチル・システムは、何れの國に在つても必ず國民經濟を完成しやうとする際に、政治家が執つた政策であつて、チャーレス五世からしてフレデリック大王、又は露西亞のペートル大帝、佛蘭西のコルベア英吉利のクロムウエル等に到る迄の政策は皆之れである。我邦に於ても德川氏の執つた經濟政策は、最も完全なる意味に於けるメルカンチル・システムの目的を達したものである(201)。メルカンチル・システムが最絶頂に達したは、佛蘭西に於てコルベアが執つた政策之れである。之れをコルベア主義と名ける。其外の國に在つても皆メルカンチル・システムの目的を達するに於て一日の長たりし國は、又た國民經濟建設の上に於て一日の兄であつた。メルカンチル・システムは、何れから源を發したかといふと、都市經濟時代に在つて各都市が執つた經濟政策を模倣したに過ぎない。唯だ範圍の大きいにつれて規模を大きくした違ひがあるのみである。都市が一箇獨立の經濟組織となつて外に對して自足的性質を保たうとしたと同じく、メルカンチル・システムの務めた國民經濟政策は、一つの國民經濟を外國に對して全く自足的ならしめやうとしたのである。之を日本語に譯せば自足的國家經濟主義或は國家自足經濟主義とするを最適當とする。從來我邦の學者がメルカンチル・システムを譯して重金主義、重商主義等としたのは大なる誤りである(202)。貨幣幷輸出を重んじたは要するに國家自足經濟主義から割出した一の方法手段たるに過ぎない、其目的ではなかつた。何故メルカンチリズムと稱ふるかといふと、都市の執つた政策に眞似たといふ意味で、都市は其政策は何に依つて定めたかといふと、商人が執る主義に倣つたのである。故に若し詮議立をしてメルカンチル・システムを直譯しやうと思へば倣商主義とするが宜い。何故國家自足經濟が倣商主義といふ名を取つて出て來たかといふと、商人は早くから外國人と交通する者である、然るに外國人と交通するに方つては、

前に述べた通り始めは干戈に相見えて我彼を倒すか彼我を倒すかであつた。然るに商人となつて貿易交換に從事する時には、干戈に訴えて彼れを倒すのでは無いが、牙籌に訴へて彼れを負かさうとするのである。貿易の上に於て成るべく彼から利益を得て來やう、成るべく彼が損をして我は利益を得ることを主眼としたのである(203)。此商人の精神を採つたのが自足排外的都市經濟の經濟政策で、此都市經濟政策の主義を眞似たのが國家自足經濟、メルカンチル・システムである。故にメルカンチル・システムは、第一に自國を富すを以て目的とする。自國を富す爲めには外國の國民經濟は幾ら損をしても構はぬ。成るべく商人の精神に倣つて、與ふる物少くして得る物の多からんことを欲したのである。植民地に對しても、決して野蠻地を開拓しやうといふ文明的精神から出でたのでなく、出來る丈け植民地から搾り取つて其の富を自國に持つて來、自國の產品を高く賣り付け、植民地其自身は如何に荒廢しても少しも顧るところでないのである(204)。是がメルカンチル・システムの植民政策である。此精神を實際に於て應用するのが卽ちメルカンチル・システムで言はゞ國民經濟を經營し之を發達せしむるに最好い方法は町人の根性、經濟的の利己主義であることの考から、メルカンチル・システムと言つたのである。其主義は、範圍の大小の差こそあれ根本的精神に於て都市經濟と少しも違はぬのである。一國民經濟で要するものは成るべく其國民經濟の中で之を生產し、外國に求めることを少くすることを云ふ排外自足主義を取り、之に反して內國で生產した物は成るべく丈け外國に賣附け、之に換えて成るべく丈け外國の貨幣を我に收めることいふ利己主義を奉ずるので、輸出を奬勵し、輸入は成るべく杜絕することに務めた。言葉を換へて言へば、可成外國に餘計賣付けて可成彼れから買はぬ樣にする、彼に損せしめても我は最大の利を收め樣と云ふのである。

(201)　是れ前人未だ嘗て道破せざる所なり、德川時代を以て Feudalism の最も發達したる時代なりとの謬想普き間に立つて克く其眞相を得るもの尠なきは嘆ず可き事なり、參照拙著 Gesell. u. wirtschaftl. Entw. S. 116, 142. ——本書初版印刷校正の際史學雜誌十四編十一號に接するに、其三六頁以下に載せたる阿部秀助氏の論文の明かに予が本文所說の趣意を布演するものなるを見るは予の最も會心に堪へざる處なり。

(202) Leser, Merkantilsystem. Handwötterbuch. d. Staatsw. Bd. IV. S. 1168 f.——

Lexis, Merkantilsystem. Wörterbuch d. Volksw. Bd. II. S. 251.

Gobbi, La concorrenza estera e gli antichi econonmisti italiani. 1884.—

(203) Mercantile System なる名稱は Adam Smith の命名なる處なり'——W. σ. N. Bk. IV. Routl. E. p. 323 et seq.

Bücher, S. 159.

Schmoller, Umrisse u. Untersuchungen. S. 42.

Brentano, Classische Nationalökonomie. S. 10.

Leser, a. a. O. S. 752 f.

(204) 前稿註 (190) 參照。

A. Smith, loc. cit. p.428 et seq.

Sombart は 曰 ~'

Es ist vor allem die ungeheure Steigerung der extensiven wie intensiven Wirksamkeit aller Accumulationsweisen, die der Kolonialwirtschaft ihr eigentümliches Gepräge giebt. Es ist die

Schrankenlosigkeit bei der Aneignung von Produktionsanteilen, die Kolonialwirtschaft charakterisiert. Deutlicher gesprochen: die unverblümte Ausbeutung und Ausplünderung fremder Länder und Völker, ohne alle Rücksicht auf Sitte und Gesetz, die in der Heimat einige Schranken auferlegen, macht ihr inneres Wesen aus und begründet ihre specifische Bedeutung für die Genesis des Kapitalismus in dem Masse, als das Explotationsgebiet des einzelnen europäischen Staates ein räumlich mehr oder weniger ausgedehntes im Verhältniss zur eigenen Bevölkerungsziffer ist.....Man sollte nicht vergessen, dass Westeuropas wirtschaftliche Entwickelung die Ausplünderung dreier Erdteile zur notwendigen Voraussetzung gehabt hat, dass der Wohlstand unzähliger blühender und reicher Völher der alten und neuen Welt erst die Mittel geschaffen hat, die den europiäschen Kapitalismus ins Leben riefen. Der Reichtum der italienischen Städte ist ebenso undenkbar ohne die Auspowerung der übrigen Mittelmeerländer, wie Portugals, Spaniens, Hollands, Frankreichs, Englands Blüte nicht denkbar ist ohne die vorherige Vernichtung der arabischen Kultur, ohne die Ausraubung Afrikas, die Verarmung und Veröduug Südasiens und seiner Inselwelt, des fruchtbaren Ostindiens und der blühenden Staaten der Inkas und Azteken. Mod. Kapitalismus. I. S. 325—6,

と身西歐の人にして箇中の消息を喝破して一の忌憚する處なき Sombart は、人種的偏見自負心を脱却する能はざる幾多歐米學者の群中にあつて燦然として光彩を發つものと云ふ可し、予の深く Sombart に傾倒推服する所以亦實に氏の學理的客觀の大膽なる遠く愛國的偏見の上に超然たるものあるを念ふが爲ならずんばあらず、――予は Sombart の思想を企業心理論中に祖述せり。

此目的を達する爲めにメルカンチル・システムの執つた手段は、內國に於ては各種の內國關稅を廢し、國內個々の經濟單位間の流通を自由にする、之に反して外國に對しては、國境に設けた稅關に於て高い稅を掛ける、內國の交通を奬勵する爲めに道路を修築し、運河を開鑿し其他交通機關の改善に力を盡くし、又國內工業に必要な原料品並に食料品は成るべく容易く且成るべく廉價に供給するを務め、是れを外國に輸出することを禁止する。之に反して內國にて生產した精製品は成るべく輸出して外國から貨幣を得ることを務める。此の爲めには各種の國立工場を設けて產業を奬勵し、度量衡を劃一し、殊に貨幣制度を統一的にして、中央政府の鑄造した貨幣を一般に使はしめるやうにし、個々の領主の發

した貨幣は成るべく之を回收するに務めた。

メルカンチリズムの國家自足主義を行ふに最も助けとなつたものは植民地である。植民地は唯だ母國の富を充實する手段として經營されたのである。從つて植民地に於ては、日常の要用に供する外は總ての工業の發生を抑へ其要する所の工業品は悉く母國から供給を仰がせるやうにし、之に反して農業は充分に之を營ましむる。卽ちプランテーションを盛んに行つた。さうして外國から食料品を買ふことを成るべく少くするが爲めに、自國で出來ないか又は足りない農產物は、成るべく植民地に生產させるやうにする。何故殊更に貨幣の輸入に力を盡したかといふと、當時の經濟狀態に在つては貨幣は國民經濟の完成に最必要なものであつたからである。當時貨幣の使用は普くなつて來たが、未だ充分なる貨幣經濟を完成するに至らなかつた。然るに交通を自由自在にし經濟上充分なる發達するには、貨幣經濟を確立することが必要であり、貨幣經濟を確立するには國內に成るべく多くの貨幣を留めて置くことが必要である、然るに外國との貿易關係に於て輸出が輸入より少く、國內に存在する貨幣が外國に流出することになると、折角

骨折つて完成し掛けた貨幣經濟は其土臺を失ふ譯になる。是に於てか貨幣が內國の交換交通に必要な分量丈け國內に存在して居るといふことは實際國民經濟の存亡に關係する重大な事柄である。今一つは各國が銘々排外的の自足經濟を立てやうとするから、其の間自然衝突を免かれぬ。卽ち何時戰爭が破裂するか分らぬ。戰爭をするに付ては第一に必要なものは貨幣である。國內に鑛山のない國にあつては、戰爭の用に供する爲めには日常必要の外に此の目的に向つて貨幣を貯えて置く必要が大である(205)。此點からも國內に存在する貨幣を成るべく外國に流出させず、外國から可成餘計な貨幣を國內に流入せしめ之を保留して置くことが必要であつた。此目的を達する爲にも輸出生產を主とし精製品の輸出を奬勵し、輸入を杜絕して輸出入の差額としての貨幣の輸入高を增すことが急務であつた(206)。正統學派がメルカンチル・システムを攻擊して富と貨幣を混同したと責めるのは標的を外れた非難である(207)。成程正統學派の學者の見た時の國民經濟は旣に完全に發達したものであるから、斯く貨幣を國內に留めて置く必要は無くなつたが、メルカンチル・システムの時代に在つては決してさうではなかつたのである。

卽ち其時代の必要に應じて執つた政策で、學說上貨幣と富を混同したものでもなければ亦貨幣を無暗に過重した譯でも無い。況んや此れを以てメルカンチリズムの目的であつたとするのは大誤謬である、これは單に手段たるに過ぎなかつたのである。

(205) 當時の格言に是れあり Pecunia nervus belli「戰爭の主腦は貨幣なり」と Ehrenberg, Das Zeitalter der Fugger. Bd. I. 1896. SS. 2. f. 9. 參照す可し。

(206) Scheel, Handelsbilanz. Handw. d. Staatsw. Bd. IV. S. 980 f.

(207) Mercantile System に對する攻擊は A. Smith 之れが端緒を開きたるものにして其後の經濟學者は多く唯徒らに其口吻を摸倣するに過ぎず、眞に獨創の研究を Mercantile System に對して遂げたるの後其の誤謬を匡さんとせるにあらず、彼等は彼等自身が Mercantile System の誤謬なりと信ぜるものに對して攻擊の矢を放つのみ、之れを稱して天に唾し空氣を掃つの類となす亦妨げざる可し、——猶上田貞次郎氏著外國貿易原論、左右田喜一郎氏メルカンチル・システムに關する學說の發展（經濟叢書第二十號以下續揭）等參照す可し。——

此國民經濟の發生は、又同時に資本制生產組織の發生と時を同くする。資本制生產組

織の發生は先づ金錢の貸借に利子を授受することを以て始まる。中古の教會法の學說(208)に於ては金錢の貸借に利子の授受を嚴禁してあつた。當時は金錢は消費の用に供するに過ぎないから實際利子を生ずべき理由もなく、隨つて生じない利子を付するを不當と見たのは決して無理では無い。併し既に信用が發生して他人から借りた貨幣を以て更に生產の用に供し餘剩の生產をする道が起れば、之に對して利子を拂ふことは當然である。又た利子を拂はなければ資本を貸す人の無いのも當り前である。信用の發生と利子の授受とは同時に起つたので、二つのものが亦最も商業の發達を助けたのである(209)。自足的家屬經濟に在つては資本は無い。都市經濟に在つても資本が存在するは唯だ商業のみで農業又は工業には資本と名くべきものは殆んど無い。然るに商業は初めから資本が無ければ營むことが出來ないので、商業と資本とは到底離れることの出來ない密接な關係を持つものである。農業又は工業は自足經濟時代にあつては唯だ己の欲望を充足するに當つるものを生產するに過ぎない。故に人が農工生產物を幾ら授受してもそれが增殖して多くなる譯は無い。然るに商業は己の欲望を充足すべきものを直接に生產するので無く、其目的物は貨幣の數量で表はされた價格である。貨幣に換えて總て他の物を得ることが出來ることを信ずればこそ商業が成立つのである。此貨幣の形に現はれた資本は、之を人に貸して利子を生じ得るものである。利子が生じなければ貸借は起らない。即ち國民經濟の發生は貨幣經濟の發生である。貨幣經濟の發生は商業の發生である。貨幣經濟に基いた商業が全經濟生活を支配するやうになつて、茲に企業が生ずるやうになる(210)。企業が生ずれば工業も亦今までの自足的性質を脫却して商業と同じき企業的精神に依つて導かれるやうになり、賣ることを目的とする工業が起る。手工業が變じて家內工業又は工場制工業が發生することは是である(211)。農業者も又漸次に商業の影響を受けて自足といふことのみを目的としないで、賣ることを以て目的とするやうになる。是に於て國民經濟時代の生產は、都市經濟時代の顧客生產で無くして市場生產となる。市場生產とは、直接に消費者の手に渡すを目的として生產するのでなく、生產するは之を市場に賣出すが爲で最後に之を消費すべきものは誰であるかは少しも顧みないことが其特性である。市場生產は一つの商品に對する販賣市場が非常に廣く

ならなければ起るもので無い。買手の數が限られ其の範圍が狹ければ、市場生産は起らない。一定の註文者があつて初て生産に從事するのでなければ危險であるから誰も註文なき生産を敢てしない。然るに非常に大きな市場、少くも全國民を買手とする國民的市場が發生すれば、必ずしも一定の註文に應じて生産するのでなく、註文はなくとも自分の思惑に從つて勝手に生産し、生産した物を以て市場に出せば、澤山の人の中必ず誰か之に向つて買手となつて現はれて來る者がある。卽ち國民經濟といふ大きな經濟組織が出來て來て初めて大きな市場が出來、大きな市場が出來て初めて市場生産が出來るやうになるので、國民經濟が市場生産と相伴ふといふは此意味である。

(208) 拙稿トマス・ダキノの經濟學說、國家學會雜誌第百九十六號以下續揭（此文經濟學研究第五七一頁以下に收む）參照。關係書目は同所に引用しあり就て見るべし。

(209) 信用を貸借と關連せずして論ずるは從來經濟學の弊なり、――信用は元より心理的研究を要す可きものなれども之れを信任の形態と離して考ふるは甚不可なり、利子の授受なき信用は信用にあらざるは唯に其發生期の同時なるが爲めのみにあらざるなり、――猶後編の詳述を要す、――(208) 參照。

(210) 企業心理論第二章。

市場生産は同時に大量生産である。大量生産とは僅かなものを生産するので無く、同じ物を分量に於て澤山に生産することである。是も市場が非常に擴がつて其市場に現はれて來る買手の數が多くなければ出來ないことである。市場が廣ければ一つの物を多量に生産することが出來る。大量生産を營むことゝなれば生産技術の熟練は增し、總體の上に於て經費を要することが比較的に少くて濟む。卽ち生産費は益々低廉になる。生産費を安くすることは啻に內國の市場に向つての大量生産の結果として顯はれるのみで無く、必要已むを得ない原因に迫られて起つて來るものである。國民經濟は外に對しては自足的性質を帶びて外國からの輸入を杜絕する。之に反して外國へ成るべく餘計に輸出して之れに換へて餘計な貨幣を得やうとする。然るに輸出品を販賣すべき外國の市場は唯だ自己ばかりが賣手たるのでは無く、他に澤山競爭者がある。多勢の競爭者が同一の生産品を以て競爭するのであれば、誰が其中で勝を占めるかと云へば、一番廉

く賣ることが出來る者其人たる可きは當然である。一番廉く賣り得るには生産費が一番廉くなければならぬ。そこで生産費を減ずることは、總ての經濟行爲の主眼となり、此目的を達する爲には大量生産を爲し、大仕掛の生産をしなければならぬのである(212)。獨り工業ばかりで無く、農業其の外總ての産業も、皆悉く生産費を廉くする必要に迫られ、經濟上の進歩改良を促す。此くして全國に渉る國民的企業、國民的市場、國民的交通機關、國民的商業が起り、一國内の人民は悉く自由に交通の便を得るやうになつた。故に國民經濟は最も完全なる意味に於ける流通經濟(213)である。

(211) 勞働經濟論五三頁以下參照、――法政新誌七ノ十二號、拙稿企業形態の變遷。

(212) Brentano, Ueber die Ursachen der heutigen socialen Noth. Ein Beitrag zur Morphologie der Volkswirtschaft. 2. A. 1889. S. 14 f.

(213) 我邦の學者が社會經濟と云ふは自足經濟に對し社會的關係が要素たるを表するの意ならん、少くとも金井延博士の用語は之れに屬す Sombart が Gesellschaftswirtschaft と云ふとは其意同じからざるなり、――然れども我邦にては交通經濟と云はゞ交通運輸に關する經濟の意に解せらる可し、故に金井博士の用語は寧ろ穩當なりと云ふ可きか。

かくて各國民經濟が各々國富を充實する爲に、外國貿易を盛んに營む結果總ての國民經濟が相互に競爭する共同の舞臺が生じて來る。此舞臺が發達して世界經濟(214)となる。

(214) 前掲註 (77) 參照。

國民經濟が一たび發生してから後幾多の變遷變化を經て今日の世界經濟に達せんとするに至つた道行を見るに、凡そ三時期がある。第一專制主義の時期、卽ち其發生以後佛蘭西革命又は國によりては十九世紀の半に至る迄の間を指して云ふのであつて、此時代はメルカンチリズムの盛んに行はれた時代である。我邦江戸幕府の時代は封建制度とは、外形ばかりで其眞相は卽ち此國民經濟の第一期たる專制的時代である(215)。メルカンチリズムを行ひ、一國民經濟を完全にする爲には先づ中央權が强くなければならぬ。是に於て中央國家は專制的の形を取る之を名けて專制的の警察國家と稱する。其意味は總ての産業生活、社會生活が非常に綿密複雜な警察的干渉保護奬勵を受け、之れが爲めに

は何等の犧牲をも辭さないからである。殊に國民經濟の初期に當つて居る專制時代には、各地に在る手工業組合、各都市の權力、諸侯の權力といふものが未だ充分破れ切らぬので、之れを打破する爲には專制的經濟政策を執らなければならなかつた。

(215) 我邦學者が慣用する封建なる成語は其內容極めて茫漠たるものなり、普通之れを以て郡縣に對するものとす、――若し果して然らば Feudalism, Lehnswesen を邦譯するに封建を以てするは中らず、德川時代は明かに Fudalism の時代にあらざればなり、然れども封建の語は德川時代に至て當時の制度を指稱せんとて學者の普く用ゐたる語なるが故に或は德川時代は封建時代なりとは云ふを得可し、然るときは封建制度とは Feudalism の窓にあらずして却て其漸次崩壞するに方り生じたる專制的警察國家の制度を意味するものと解するを要する也、――蓋し我邦近來の學者が深く此間に儼然たる差異あるに意を注ぐもなく封建を譯するに Feudalism を以てし、Feudalism を譯して封建の二字を當てたるはやがて非常の誤謬と紛亂を招くの因をなせるものと云はざる可からず、――思ふに從來此間の區別に着目せるもの必ずしも之なきにはあらざる可し（若し眞に無しとせば驚歎の外なきなり）唯德川時代を Feudalism の時代にあらずと斷言するの學問的勇氣を缺きたるならん、予は之れを拙著 Gesell. u. wirtschaftl. Entw. S. 116 f.（日本經濟史論第一八一頁）に明言するを敢てせり、就て參照すべし。――

內田銀藏氏著日本近世史（一、上、一）が猶未だ舊套を脫せざることは史學雜誌十四編五號八十一頁以下阿部秀助氏の批評を參照す可し、史學專攻者の內より漸やく予が所論に贊同する評者の如き人士の出るに到れることは予の最も喜ぶ處なり。――

第二は自由主義の時期である。是は佛蘭西革命から十九世紀の末年に至るまでの間を云ふのである。自由主義は專制主義に對して反對な主義であるけれども、その爲した跡に就いて見れば、自由主義は專制主義が爲し掛けた仕事を更に完成したものである。專制主義に依つて割據的の個々の權力を打破して中央集權を建設し、其の爲めに種々の保護干涉を爲し、保護干涉の機關として各種の制度を生じた。しかし國民經濟の基礎が稍〻堅くなつた後は、此の如き障へる道具は要らなくなる。恰も子供の時には老母の世話を要するけれども、一たび成長すれば老母の保護干涉は、其の進步を妨げること同じである。是に於て自由主義が出て來て、老母的干涉道具を悉く打破し、殊に個人の法律上の自

由所謂自由競爭を凡ての經濟行爲の原則とするに至る。職業の自由、契約の自由、住所轉換の自由、農民解放、幷に各種特權、專賣權の廢止が實現された。殊に自由主義は私有財產制度を確立し、契約の自由を充分認め、分業はいよ〳〵細く行渡る。自由主義の最高潮に達したのは英吉利に於ける自由貿易主義である(216)。自由貿易主義の完全に行はれたのは英吉利のみであつて、大陸諸國では行はれないが如くであるが、此時代には大陸に在つても、英吉利の自由貿易主義の風潮を受けて其の方向に向つて各種の變革は行はれたのである。國民經濟といふ大きな經濟組織の發生する爲めには、個々の權を打破ることが必要である、其の打破せられた個々の權に換ふるに完全なる個人的の經濟單位が、圓滿な發展を遂ぐことは根本的の必要條件である。乍併全體の組織の確立しない內に餘りに早く部分たる經濟單位が發展すれば、國民經濟の發達は之れが爲めに遲れることは已むを得なかつたのである。然るに經濟組織が完全に出來上つた曉には、經濟組織を組成して居る各經濟單位が、完全な圓滿な發達を遂げることが非常に必要になつて來て、自由主義は法律上自由平等、職業の自由、契約の自由、住所轉換の自由、農民の解放、私有財產制度の確立といふやうな色々な發展を呼び起した。是等は何れも經濟單位の圓滿なる發展個人性の圓滿なる伸張といふ大目的の爲めに出て來たのである。固より自由主義を執つた政治家、或は自由主義を主張した學者は必ずしも此の如き理想を抱いて居つたものでは無い、唯だ絕對的の自由は何れの場合、何れの條件の下に於ても最善であるとして、之を主張し之を實行したに相違ないが、其爲した跡に就いて見れば之も亦一の時勢產物であつた(217)。然るに自由主義も專制主義と同じく、其必要を充たして仕舞へば却つて弊害を生じて來るは已むを得ないことである。極端なる個人主義、極端なる宇宙主義に墮落して、經濟上の進步發達に非常な害がある。所謂マンチエスター學派(218)の唱へる經濟學說は、既に時勢が之を必要としなくなつた時代に、未だ舊說を黑守するもので、日三竿より高くなつても、當人は未だ曉の夢が醒めないのである。殊に個人と世界との間に、國家を認めぬといふに至つて自由主義は却つて國民經濟の存立をすらも危くし樣とするに至つた。併し自由主義が出た爲めに國民經濟は都市經濟からして傳來し來つた自足的排外的性質を、全然脫却することが出來たので、世界經濟の發生には、非常に寄與する所があつた。

固より世界經濟の發生には此自由主義のみが與つて效績があつたといふことは出來ない。此外に與つて力あつたものは、十九世紀に於ける各種の發明發見學問の進歩、殊に交通機關の改良、蒸氣力、電氣力の應用などである。是等總ての力が働いて國民經濟を存立するに方ては、自足主義を以ては之に應ずることは出來ない。國家自足主義は幼稚な國民經濟を障える爲めに必要なものであつたが、既に成人した經濟組織に向つては全然不必要なものである。完全なる意味に於ける流通經濟を完成した功は、主として之を自由主義に歸して宜いが、世界經濟の發達を助け、自足的性質を全然脱却した時代に在つては、自由主義は最早其用を爲し了つたもので、却つて種々な弊害が出て來た、是に於て第三の民族主義の時代が起る。

(216) 關一氏著商業經濟政策二四五頁以下參照、

(217) 拙稿經濟史と時事問題、經濟叢書第二十號、――拙稿經濟單位の發展に關する舊說と新說第二章、內外論叢二の二、(經濟學研究第三六六頁及第八頁)

(218) Palgrave, Dictionary of Political Economy. vol. II. 1896. pp. 678—680.

民族主義とは、十九世紀の終から現在に涉つて最近歐米各國が執つて居る主義である。其主とするところは更らに廣い範圍を基礎とする國民經濟の發展である。此傾向に於て最近著しきものは伊太利と獨逸に於ける統一的國家の完成である。獨逸並に亞米利加に於て英吉利の自由貿易主義に反對した主義を執つたにも拘らず其經濟上の進歩發達は將さに英吉利の進歩と相接近するやうになつた。外見上から之を見ると第三期の經濟政策は、再び元のメンカンチル・システムの時代に立戻つたやうに見える。殊に第三期に於て執る經濟政策が、絶對的自由主義を捨てゝ或程度までは國家が經濟政策を以て保護干涉をしなければならぬといふ原則を認めるやうになつたは、如何にもメルカンチル・システムに近寄つたものゝ如く見える。今日各國の國民經濟政策の施設は、外形の上に於てメルカンチル・システムの執つた色々な制度設備に餘程似たものである。併し其根本的精神に於ては非常な差異がある。今日の民族主義の經濟政策は自足的經濟政策を立てんとするので無い。先づ各經濟單位の充分なる發展を爲し得るに必要の條件として、國民經濟の範圍を確定することに最も力を用ゐなければならぬ。勿論國民經濟の

範圍を確定するは各經濟單位に活動を充分ならしむる爲に必要な條件であつて、それ自身が目的では無いは言ふまでもないが、所謂世界政策幷に帝國主義の經濟政策が發生して、自由主義の本家本元たる英吉利ですら、稍々其政策を變じて、再び元ミのメンカンチリズムに近づくやうに見える經濟政策商業政策を執らんとするやうになつた(219)。帝國主義は國民經濟の範圍を更に擴めて、英吉利の主權の下に立つ各植民地を打つて、一つの大きな統一的組織と爲して、國民以外に渉る大經濟組織を拵えやうといふ主義である。世界政策は獨逸が獨逸現在の領土、獨逸現在の國民經濟範圍を以て滿足しないで、他の領土と他の國民を其經濟組織の內に入れて、今まで獨逸の歷史上曾つてなかつた大きな經濟組織を拵え、其經濟組織を益々大きくするに依つて其內にある經濟單位の活動を益々助けやうとするに外ならぬのである(220)。

(219) Beiträge zur neuesten Handelspolitik Deutschlands. Bd. II. (Rathgen, Hewins 二氏論稿參照)。——關一氏前揭著二六九頁以下、並太平洋十號二〇頁以下參照。

(220) 是れ前人未だ說かずして而して事實の發展上正さに斷然として疑ふ可からざるの眞相なり、內外論叢二の二拙稿參照、

他の意味から言へば第三期は又之を稱して社會的時代と言つても宜い。殊に經濟上の弱者卽ち勞働者並に下層人民又は中產階級の保護或は交通機關の國有其外色々なことに於て所謂社會政策を執ることを是認するやうになつた。故に或は社會政策の時代と稱しても差支ない。此社會政策時代の專制主義の時代と異るところは、第一期の專制主義の時代に在つては、國民經濟の爲めには私人を犧牲にし、それが爲めに經濟生活に色々な干涉をすることであつた。然るに第三期の經濟政策は、國民經濟の存立の爲めに各箇々の經濟單位の行動に制限を加へるのでなく、各箇々の經濟單位間の關係を圓滑ならしめ、自由競爭の爲めに起る各種の弊害を除くが爲めに、國民經濟なる大きな組織が自分の利益といふ點のみでなく、各單位全體の利益の爲めに施す政策の謂である。

* * * * * *

以上自足經濟、都市經濟、國民經濟、三つの時期を劃したが、決して嚴然たる區劃を其の間に立て、昨日からは第一期であつて今日から第二期であると云ふことは出來ない。人類

社會の進化發展は極めて徐々に進行して、恰も草木が生育して行くやうに、何れの時何れの日に於て第一期より第二期に移ること云ふことは、確言することは出來ない。今日に在つても自足的家屬經濟は全然其跡を絶つたといふことは出來ない。況や顧客生産の如きは決して消滅したのではない。田舍の農民の大部分は、まだ自足經濟の狀態に在つて、小都會の商工業者は半ば顧客生産に從事して居ると言ふべきである。併し以上の區劃をした所以のものは、其時代〳〵を支配する根本的の主義は何處に在るかを示めしたのである。其意味から云へば今日は第三の國民經濟の而も第三期に在るとして少しも差支ない。國民經濟は今日の歐米各國、殊に英吉利、佛蘭西、獨逸、和蘭、白耳義、北亞米利加合衆國に於て最も圓滿に發達して居るのであつて、南歐羅巴諸國、東歐羅巴諸國の如きは、國民經濟は存在して居るが、或はまだ第一期に入りかゝり居るものあり、或は第一期を充分に脱し切らないものもある。我邦の如きも國民經濟は既に明治維新と共に完成して居ると云つて差支ないが、完全なる意味に於ける國民經濟に至つては、未だしと云はなければならない。支那や朝鮮に至ては未だ自足經濟のやゝ國民的にならうとして居る時代にある。國民經濟の特徴は今まで述べた所で大抵明かであるが、之を要言すれば個人の自由、殊に職業の自由、契約の自由、幷に私有財産の制度を基調とし、其上に交換と分業とが、根本的必要條件として行はれて居る。各經濟單位はそれ自身が目的である。各經濟單位は獨立獨歩して行かなければならない。之に對して充分な權利を與ふると同時に、權利に相當するだけの義務は充分に之を遂行する力がなければならぬのである。各人は各々其好む所に隨つて權利を伸張することが出來ると同時に、伸張した權利に伴隨する義務は、一點一劃も之を逃かれることは出來ないといふのが其の主義である。併ながら全體の經濟組織の利益と經濟單位の利益と衝突する時には、經濟單位の權利の伸張は之を制限する必要も亦之を認めて居る。此制限を行ふが爲に、國家が其力を用ゐて各種の保護干渉を加ふることを許す。併し國家が加ふる保護は、自から助けらるべきやうに助けるを以て主義としなければならぬことは一般に認められて居る。社會政策又は勞働保護政策は、當に勞働者若くは社會の下層階級を保護するといふことのみが目的で無く、之を保護することに依つて、全體の經濟組織の發展の進行を早からしめやうと云ふ大目的から

出て來るので、偏愛的に一の階級或は個々の人間を保護するのではない。一國に存在する職業、例へば商工業農業間の衝突も、或度までは商工業を進歩せしめ農業を奬勵すると云ふ必要があるが、工業を偏愛し、農業者を憐む等の念から來るのでは無く、國民經濟全體の進歩發達の上に於ては農業を保護することが必要であるから保護するので、必ず農業のみを保護せねばならぬ、工業は必ず奬勵せねばならぬと云ふ事は決して無いのである。

以上三つの時代を叙述し來つたので最早此章は終つたのであるけれども、尙茲に三つの時代の差異を明瞭にするが爲に、ブュヒァーに從て諸種の經濟上の現象に付て區別を立て、比較對照して見れば左の如くである。

第一、自足經濟時代に在つては、人間の共同は血族の關係に基いたものである。都市經濟時代に在つては、此共同は領域的の關係、卽ち住ふ地方を同じくして居る所から結合せられた人々によつて支へられる。國民經濟時代に在つては、更に進んで國民的結合となり、全國民が悉く共働する。要するに原始の血族經濟から今日の國民經濟に至るまで、勞働の協合は漸次に孤立的自足的の性質を脱却して、社會的相互的になつて來た。是によつて欲望充足の道は益々豐かになり、同時に各個の經濟單位は互に相依り相須つて複雜なる關係を生じ、人一人の行動は單に一個の存在として行動するのみに止まらず、其波及する關係は非常に廣くなつた。

第二、自足經濟時代に在つては、財は發生と消滅と、語を換えて云へば其生產と消費とが悉く同一經濟內に終つて仕舞ふ。都市經濟時代に在つては、生產と消費とは經濟を異にするが、生產經濟から出た財は直ちに消費經濟に移つてそこで消費せられて仕舞ふのである。國民經濟に在つては、財は一たび生產者の手を離れて消費者の手に入るまでには數多の經濟を通過して行く。此道行が卽ち財の循環である。卽ち第一期に在つては、總ての生產物は皆消費財である。消費財とは消費すべきが爲にある財と云ふ意味で、生產財で無く又交換財でも無い。然るに第二期に在つては、此消費財は一部分は既に交換財になつて居る。第三期に在つては、總ての財は啻に交換財たるに止まらず、皆一度は商品の形態を取つて後、消費せられる。第一期に在つては、財の使用價値が最重要な現象であつたが、今日の國民經濟に在つては財の交換價値が重要となり、進んでは財に換へて得る

ことの出來る貨幣の高、卽ち客觀的の價格が最重要となり、財其物を得るにあらず、財が換へて得ることの出來る貨幣を得ることを主眼とするやうになつた(221)。

(221)　企業心理論第一章、

第三、自足經濟時代に在つては、特殊經濟は經濟單位たると同時に經濟組織である。都市經濟時代に至つては經濟單位と經濟組織との間に差異を生じ、經濟組織は幾多の經濟單位を包含するものとなり、第三期の國民經濟時代に至つては、兩者の間の差異は非常に著明になつて、無數の小さな經濟單位が大なる國民經濟といふ經濟組織の中に在つて活動するやうになる。第一期にあつては、家屬共產體は經濟組織であると同時に經濟單位である。今日に在つては純然たる個人若くは個人的の家族が經濟單位である。個人は國民經濟なる大きな經濟組織の中の極く小部分たるに過ぎない。此の如く經濟單位が經濟組織の發展に伴つて、第一期から第三期に至る間に變遷して社會的性質が漸次發達して來る。第一期にあつては社會は血族間のみに限られる。第二期には一定の領土內に限られる。今日の國民經濟に至つては全國民が一の社會を形造り、進んでは全世界をも或意味に於ては一の共通團體と看做すやうになつて來た。

第四、第一期の自足經濟にあつては、生產經濟は消費經濟と全然合致する。第二期は其間に稍々分岐を生じ、第三期は二者全く分離して所謂企業と家計との二つになり、企業は全然生產のみを掌る經濟で、家計は全然消費のみを掌る經濟といふやうになる。而して企業と家計との間を結附ける爲に交換と分業が生じて來る。

第五、第一期にあつては、勞働は主として自分自らの力作で、他人の勞働を買入れるといふことは無い。他人をして自らの爲に勞働せしめても、其他人とは同一經濟內にある奴隸從屬であつて、働くものと働かすものとの關係は强制關係である。第二期には、他人の勞働を雇ふ關係は君臣奉公的の關係で、封建制度の君臣の間のみならず、一經濟內に在つて勞働に從事する奴婢は、一定の年限を定めて奉公するもので、個々の勤勞に對して報酬を得るのでない、勞働するも、せざるも一定の期間は養つて呉れる代り、主人の爲めには一命をも差出さなければならぬのである。商工業に在つては所謂見習、徒弟の制度が存し、同じく主從君臣的の一種の勞働關係を保つ。第三期の國民經濟時代に在つては、勞働と

言へば他人の爲に營利の目的を以てする心身の活動を言ふに外ならぬやうになり、雇主と被傭者との間の關係は、自由契約に基く給付、反對給付の關係で、相互に對立する契約關係である。雇傭關係の期間は契約に基いて之を定めるので、第一期の如く生涯に亘り若くは第二期に於けるが如く一定の期間は、どうしても其狀態を脫せられることの出來ないもので無く、契約に基けば何時にても勞働關係を解くことが出來、又其勞働に對しては必ず反對給付として所謂一定の勞銀を仕拂ふやうになる。

消費者と勞働者の關係より見れば、第一期にあつては消費者自ら勞働者であるか、又は自分自ら勞働者で無くとも、自分の所有物たる奴隷が勞働に從事する所謂家內仕事時代である。第二期に在つては、消費者自ら勞働者を兼ねなくなつたが、勞働者から直接に其勞働を買入れる賃仕事であるか、又は其勞働の生產品を直接に勞働者から買ふ、所謂手工業である。第三期の國民經濟は、消費者と勞働者の間に何等の關係なく、殆ど互に相識らない。消費者は其欲する商品を企業者又は商人から間接に買入れ、其勞働者の誰人なるかを知らぬのみならず、直接に勞働者に對して其勞働の價を拂ふことは無い。勞働者に價を拂ふどころでは無い、企業者が先づ勞働者に勞銀を拂つて其勞働を買つて置き、其作つた品物を消費者に賣渡すに當つては、其賣渡した品物に換えて反對給付として代金を取るばかりである。企業者の勞働者に於ける關係は、所謂自由意思から出る契約に基いて賃銀を支拂ふを以て足れりとする、今日の工場制之れである。

第六、自足經濟時代に在つては貨幣は全く存在しない、或は存在しても、實際直接の消費財たるもので、財寶として保藏するに過ぎない。都市經濟にあつては貨幣は交換の要具として用らるゝ。國民經濟時代に至つては貨幣は以上の職分の外に尙流通の要具並に營利の要具となる。

第七、資本に付て見れば、第一期の自足經濟時代には、資本は殆ど全く存在しない、存在する物は唯だ消費財あるのみ。第二期には生產の要具は既に資本の性質を帶びて居るが、生產の原料に至つては未だ資本の性質を帶び無い。資本の性質を帶びた生產の要具も、生產資本たるに過ぎない、營利資本といふ性質を備ふるものは殆ど無い。若しありとすれば商業上に存するのみ。然るに第三期に於ては總ての財產は悉く資本の性質を取り、

而も大部分は生産資本たるのみならず營利資本である。要言すれば、第一期は無資本時代第二期は資本敵視時代第三期は資本制經濟時代である。

第八、所得と財産に付て見れば、第一期に在つては二者は殆ど分つことが出來ない。二者を分ち得るは地代が生じて、財産と異なる一種の所得の形を具えることと是れである。都市經濟に至つては資本に對する利子も地代と同じ性質を帶びて居つた。企業の利得は手工業以外に殆ど存在しない。勞銀も一般に存する現象で無く、消費者が直接に手工業者に拂ふ手間賃に過ぎない。故に純然たる所得は、未だ存在せずと言ふ可きである。所得のみに依つて生活を立てることは出來ない。所有全財産を人手に渡して、其れに對する報酬として年々年金を受取る者は、所得に依つて生活することが出來たが、其以外の場合にあつては今日の勞働者、企業者等の如く少しも財産を所有せず所得のみで生活を立つること能はず、必ず財産あるを要した。然るに第三期の國民經濟時代にあつては、以上四種の所得は全然分離する。財産は享樂財産と生産財産又は營利財産に分れ、消費に充て用ゆべき財産即ち享樂財産ですらも、或意味に於ては資本の性質を取る。例へば貯蓄金を銀行に預け入れる場合には、享樂財産なる貯蓄金も利子を生ずる利殖資本、即ち營利財産又は生産財産と言つても宜いのである。

第九、分業に付て見れば、第一期は特殊經濟内にのみ分業が存在したが、一の特殊經濟と他の特殊經濟との間には分業は少しも存せぬ、何れの特殊經濟も他の特殊經濟と全然同じことをしなければならなかつた。唯だ一の特殊經濟の中にあつては男女若くは老幼、賢愚、身體の强弱等に隨つて業を分つて居た。然るに第二期の都市經濟時代に至つては、都市の中に各種の異つた職業が發生し、又都市と田舍との間に生産の分割即ち商工業と農業といふやうな風に生産業の分割が起つて來る。第三期の國民經濟に至つては分業は總ての點に於て起る。殊に職業の分立、生産の分割に加へて所謂勞働の分解が起り、一の生産經過を各種の細かき勞働經過に分解するに至る。勞働分解は啻に生産業を分割するばかりで無く、自己の計算、自己の危險に於て生産を掌る企業者と此企業者に資本若くは勞働の使用を貸與へ、之に對して報酬を納める資本主又は勞働者間に分業生じ、而して此の如くに分業した企業の中に於て生産經過を分解する勞働の分解が又起つて來る、

アダム・スミスの說いた分業とは此勞働の分解のことである(222)。

(222) Bücher, S. 334.

第十、第一期にあつては、工業は農業から獨立したもので無く、農業の片手間仕事に從事したのみである。第二期に至つては、工業を專業とする者が出來るが其目的とするところは專ら自活自存である。然るに第三期の國民經濟時代に至つては家內工業並に工場發生して、自活自存に止まらず進んで營利の爲に工業を營むやうになる。

第十一、企業は第一期には全く無く、第二期にあつては自存の目的で營まれるに過ぎない。第三期になつて初て營利の爲に企業するやうになる。

第十二、商業に付て見れば、第一期にあつては殆ど商業は無いと言つて差支ない唯だあるは所謂旅商の類に過ぎない。第二期にあつては商業の主として行はれた中心は市場で、商業は市場商業に止まり、商人は市場と市場との間を常に轉輾して其業に從事して居つた。然るに第三期になつては定住商業が起り、一定の店舗を設けて商業に從事するやうになる。必ずしも多勢の商人が一の中心點なる市場に集まらぬでも宜い。之に反して有形的で無い無形的の廣い市場、卽ち處と時とに於て限られない抽象的の市場が起る。必ずしも一定の所に集り、一定の時に集らぬでも、一國民經濟の間に存在して居る所の各商人の間に、一定の所に集り一定の日に相會するよりも遙か密接な關係が存する。物價の變動相場の浮沈等の如きは數百數千里の間に直に波及するやうになり、所謂世界市場が起つて來る。

第十三、交通に付て見れば、第一期には主として交通の業に衝つて居るは、奴隸若くは僕で、其主人一己の爲めにするのである。第二期になつては、公用向の爲に都市が主として交通を掌り側ら私人の需に應ずるに過ぎなかつた。然るに第三期に至つては、一般公衆の爲に各種の交通機關が出來、而して交通が他の產業から分業して、一つの特別な產業として發達するやうになる。

第十四、信用に付て見れば、第一期には純然たる消費信用ばかりで人の身體又は全財產を擔保として初めて之を得られたのである。第二期に至つては消費信用の外に、不動產に對して營利信用卽ち生產信用が起る。併し此營利的信用は未だ對物信用たるを免か

れない。然るに第三期に至つては、此營利的の信用は不動産に對するのみで無く動産に對しても發生し、尚其上に進んで對人的生産信用が發生する。

以上を以て經濟組織の形態に關するブユヒアーの說の大要は之を述べ盡した。

ブユヒアーが一度此說を公けにして以來、歐羅巴の進步した經濟學者の間では此區別に從つて、經濟の發達進步並に經濟組織の特性を區別することが一般になつて居る。

ビユヒアーの說が學者間に好評を博し、盛んに行はれるやうになつて來た結果、之に對する異論亦少からず發生して來た。最も有力な反對者はベローとエドワード・マイヤーの二人である。此二氏は共に經濟學者で無く、專門の歷史家であつて、歷史家の見地からブユヒアーの說に對して、有力な批評を下して居る。併し今日の處ではベロー並にマイヤー共に未だブユヒアーの說を打破するに至つたと言ひ難い。二氏がブユヒアーの說を攻擊する要點はブユヒアーが、希臘並に羅馬の經濟組織を自足經濟と言ひ其の自足經濟時代には商業は殆ど存在しない、縱し存在したとしても生活の必要品を販賣したもので無い、商業歷史に唱えるやうな古代の人民が盛んに貿易に從事したといふことは有り得ない事であると言ふに對して、事實上希臘羅馬否、更に其以前のカルタゴ、フエニシヤ等に於て商業貿易が行はれたことを擧げて反對するのである。此點に關しては成程ブユヒアーの說は、多少事實を枉げた感が無いでも無い。併しブユヒアーは必ずしも歷史上の箇々の事實を組立てゝ議論をしたので無く、各國各時に通ずる史的發展の階段を構成して見たに過ぎないのである。詳細の點から言へば、或は偶まに此三つの階段に當篏まらぬやうな時代もあるであらうが、其は寧ろ例外で原則として見ることは出來ない。且又所謂希臘羅馬の盛んなる商業といふことに關しては、必ずしもベロー並にマイヤー兩氏の言ふところの事實が悉く正しいといふことは出來ない。ブユヒアーは兩氏の攻擊に對し、希臘經濟史を特に著はして自分の立場を明かにすることを公けに約束して居る。此ブユヒアーの希臘經濟史は未だ出版されないが、若し出版せらるれば再び學者間に議論の花を咲かすことであらうと思ふ。今日の所（大正十四年）予輩はブユヒアーの此著の現はれることを只管待つて居るのである。尚マイヤーのブユヒアーに對する攻擊は同氏の著、『古代諸國の經濟上の發達』と題する小册子に揭げてある。ベローの

攻擊は『經濟學統計學年報』第三篇第十八卷に『古代世界商業の盛大』といふ論文並に『領土と都市』と稱する小册子の中に掲げられてある(223)。更らに其後刊行せられた同氏の論文集同氏著『經濟史の諸問題』にも關係論文が收錄せられてある(224)。

(223) 關係書目を見よ、

Bücher の之れに對する辯駁は Entstehung. 3. A. S. 447. ff. に掲げあり就て見る可し、——猶 Sombart, Gewerbliche Arbeit. Braun's Archiv. XIV. 1899, SS. 370 386. Losch, Das Mikroskop, das Brillenglas, der Feldstecher und das Fernrohr in der deutschen Volkswirtschaftslehre. Braun's Archiv. XVI. (1901) S. 511 f. 等に Bücher に對する攻擊を載せたり併せ考ふ可し。

(224) Below, Probleme der Wirtschaftgeschichte, eine Einführung in das Studium der Wirtschaftsgeschichte. Tübingen 1920.

右の歷史家の批評の外に最近時に至つてブユヒアーの說を經濟學者の中から有力に批評した人が一人ある。其はブユヒアーが生產と消費との間の距離を標準として、自己生產、顧客生產、市場生產の三期を劃し、之れを以て經濟組織發展の三時期の、重な特徵とするに對して非難して居るのであるが、是れは少しく攻擊の標的を外づれて居ると言はなければならぬ。ブユヒアーは說明を簡便にするが爲めに此くしたので、自足經濟と都市經濟と國民經濟の三期を限たのは既に前に述べた通り、色々な特徵があるため之をなしたので、啻に生產と消費との間の距離のみを標準としたので無いことは明かである。併し此攻擊をする爲めに己れ自ら更に新しい說を立てやうと試みた結果として出て來た說は、學問上頗る注目すべき價のある說である。之を次の章に紹介しよう。」

第四章　生產の主義より觀たる經濟組織の性質の發展

是は卽ちゾムバルトの說である。ゾムバルトは經濟組織の發展を叙するにブユヒアーの如く唯だ一の眼點よりするは不可である、色々の點よりして見なければならぬと主張し、之れを爲すは經濟階段、經濟制度、經濟形態並に經濟主義の四つの點から區別を下す

必要があるを主張する(225)。

(225) Sombart, Der moderne Kapitalismus. I. S. 56 ff.

經濟階段とは、其時々に於ける經濟組織の取る社會性の度合に由て定められるものである。孤立的狀態から漸次社會經濟の度合の進歩するに從つて、其社會性に伴つて發展の度合が定められ、其發展の度合は又經濟上の分化の度合を定めるので、經濟上の分化が進歩する程、經濟上の社會形成の力も亦多くなる、此二つは共に生產力の增進に與つて最も缺く可からざる根本の現象である。分業が發達し經濟上の分化が進むのは各箇々の經濟單位が、完全な獨立を失ふ所以である。何となれば一の大なる團體の欲望を充すには、各人は各々其局部に當るのみである。故に他人と離れて仕事をすることは出來ない、相互に依賴することが必要である。是に於てか社會性は益々發達しなければならぬやうになる。分業は經濟上の社會性の發達を必要とし經濟單位の縮少は經濟組織の生產力を大にする。此意味から經濟の階段には古往今來三つの階段があつたと言つて宜い。即ち第一期は孤立經濟時代、第二期は中間經濟時代、第三期は社會經濟時代之れである。

第一期の孤立經濟とは、ブユヒアーの所謂自足經濟時代、鎖封的自然經濟時代に當るもので、消費經濟と生產經濟が全然合致し、一つの經濟と他の經濟と相涉ることがない、各々孤立して居るといふ意味から此名前を附けたので、要するに名異にして其實ブユヒアーの說く所と同じものである。第二期の中間經濟も亦ブユヒアーの所謂都市經濟時代に當るものでゾムバルトは之を稱して低度の社會經濟と言ふが、寧ろ流通經濟の初期と言つた方が宜い。第一期と異るところは、消費經濟と生產經濟との間に永久的分離が發生して來たことで、一つの經濟が自足的に其欲望を悉く充すこと能はず他の經濟と共同して、初めて之を充足するを得る狀態を言ふ。從つて各經濟の間に分業が起り經濟上の分化が發生して來る。第一期に比較すれば經濟上の合成即ち社會性も亦稍々發生するに至る。第三期の社會經濟は、生產經濟と消費經濟とが全く分離した時代を言ふ。各經濟單位は、箇々に分業して經濟上の分化の度は非常に發達し、各經濟單位が亦相依り相須つ必要は、愈々多くなるから社會性は益々進んで行く。即ち完全なる意味に於ける交通經濟又は社會經濟となるのである。

F. I, 78.

經濟制度とはゾムバルトに據れば經濟生活が其時代に付て一定の經濟上の秩序並に一定の經濟主義によつて定められて出來上つて居る一定の具象的の制度を言ふのである。經濟制度を分つて孤立經濟時代にあつては第一血族經濟第二家屬共產體經濟第三生產消費の合致せる自然經濟時代とする。中間經濟時代には第一生產消費の合致せざる經濟時代第二村落經濟時代第三都市經濟時代とする。社會經濟制度は第一上古の奴隷經濟第二近世植民地に於ける奴隷經濟第三自由賃銀勞働に基く資本制經濟第四社會主義制經濟即ち社會的國家經濟の四とする。

經濟形態とは經濟行爲の目的を達する方法即ち財の獲得に方り其全經濟行爲を主導する具象的組織の形態を云ふ。孤立經濟時代には希臘のオイコス羅馬のファミリア並にヴヰラ獨逸のフローンホフ英吉利のマノア日本の莊園等が其の具體的經濟形態である。村落經濟時代の形態は農夫經濟と地方團體經濟とである。都市經濟時代の經濟形態は所謂手工業是である。上古の奴隷經濟植民地に於る奴隷經濟並に今日の賃銀勞働に基く資本制經濟時代の經濟形態は之を稱して資本制の企業と名ける。或は近世企業と稱しても差支ない。ゾムバルトは社會主義經濟が起れば其取る所の經濟形態は第一中央生產局の制度第二生產組合の制度であらうと言つて居る。

經濟主義とは其時代の經濟生活に特性を與える經濟心理的の根柢であつて其時々の經濟主體の行動を支配する最重要なる動機を稱して言ふ。ゾムバルドの經濟主義には二つある。第一は欲望直接充足經濟主義である。第二は營利經濟主義である。孤立經濟中間經濟並に社會經濟の中で社會主義制の經濟は悉く欲望直接充足經濟主義に支配せられ直接に人間の欲望を充足するに必要な手段を得るが爲めに各種の經濟行爲をするを根本主義とする。血族經濟にあつても家屬共產體經濟にあつても村落經濟にあつても都市經濟にあつても將又社會主義の理想とする中央生產局から管理をする經濟組織でも其目的は悉く人類の經濟上の欲望を直接に充足するといふ主義から出て來るのである。之に反して營利經濟主義は今日の經濟制度殊に資本制企業が掌つて居る今日の社會經濟の根本主義で當に欲望の直接充足即ち自活自存するばかりで無く更に進んで利を營み貨殖することを根本精神とするを稱して言ふのである。

ゾムバルトの此說は、マルクス說を出立點とし、ブユヒアーの說若くはシユモラーの說を參酌して詳しく分類して見たに過ぎない樣なものであつて、決して眞の創思といふことは出來ないが根本的の區分に着眼した點に於ては頗る參考の價値があるから、特に此處に章を設けて紹介したのである。以上の說明はやゝ込入つて居るから、それを明瞭ならしめる爲に次に一つの表を掲げて置く。

Sombart 經濟の區分 "Der moderne Kapitalismus" Bd. I. S. 67. Leipzig 1902

經濟階段 Wirtschaftsstufen	經濟制度 Wirtschaftssysteme.	經濟形態 Wirtschaftsformen.	經濟主義 Wirtschaftsprincipien.
孤立經濟 Individual (isolirte)=Wirtschaft	一、原始の血族經濟	オイコス、莊園 manor, villa, Frohnhof.	
	二、家屬共產體（大家族）經濟		
	三、生產消費統一せる廣義自己經濟		
中間經濟	四、生產消費分離せる廣義自己經濟		
低度社會經濟 Uebergangswirtschaft.	五、村落經濟	地方團體經濟	欲望直接充足經濟 Bedarfsdeckungswirtschaft.
	六、都市經濟（交換經濟）	農夫經濟	
		手工業	
社會經濟 Gesellschaftswirtschaft.	七、社會主義制經濟	生產組合	
	八、上古の奴隸經濟	中央管理局	
	九、近世植民地の奴隸經濟	資本制企業	營利經濟 Erwerbswirtschaft.
	十、自由賃銀勞働に依る資本制交通經濟（現時の國民經濟）		

關係書目

第一編

此編に論ずる經濟生活の根本概念に關しては何れの經濟書も之れを論ぜざるはなければ參考書類を悉く掲ぐる能はず茲には其内最も重要なるものにして本編起草の際渉獵したるもののみを掲ぐ

G. Schmoller, Grundriss der allgemeinen Volkswirtschaftslehre. Leipzig 1900. 11—12. Taus. 1919.

F. J. Neumann, Grundlagen der Volkswirtschaftslehre. Tübingen 1889.—Wirtschaftliche Grundbegriffe in Schönberg's Handbuch, 4. A. SS. 146—186.

F. B. W. v. Hermann, Staatswirtschaftliche Untersuchungen. München 1. A. 1830. 2. A. 1870.

Schönberg, Handbuch der politischen Oekonomie Bd. I. 4te. A. Tübingen 1896.

Roscher, Grundlagen der Nationalökonomik. Stuttgart. 16. A. 1882. 22. A. 1897. 27. A.

Wagner, Grundlegung der Politischen Oekonomie. I. Grundlagen der Volkswirtschaft. 3. A. Leipzig 1892—3.

Menger, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. Wien 1872. 2. A. Leipzig 1923.

Schäffle, Das gesellschaftliche System der menschlichen Wirtschaft. Tübingen 1873.

Dietzel, Theoretische Socialökonomik. Leipzig 1895.

Marshall, Principles of Economics. 1. E. 1890. 4. E. 1901, 8. E. 1920.

Pierson, Lehrboek der staathuishoudkunde. 2. druk. Haarlem 1896. ff. Eng. tran. (Principles of Economics) 1903.

Cauwès, Cours d'economie politique 1. E. 1884. 3. E. 1893.

Philippovich, Grundriss der politischen Oekonomie. 4. A. Tübingen. 1901. S. 1—8. (14. A. 1919.)

Fuchs, Volkswirtschaftslehre. 1900. S. 1—16. 4. A. 1922. S. 15.

Gide, Principes d'économie politique. 1. A. 1878, 6. E. 1898. 24. E. 1923.

Walker, Political Economy. 3. E. 1889.

Duke of Argyll, Unseen Foundations of Society. 1893.

Kleinwächter, Lehrbuch der Nationalökonomie. 1902.

Bücher, Entstehung der Volkswirtschaft 3. A. Tübingen 1901. 12. u. 13. A. 1919.

J. Lehr, Grundbegriffe u. Grundlagen der Volkswirtschaft. 1893.

Knies, Die Politische Oekonomie vom geschichtlichen Standpunkte. 2. A. 1883.

Schmoller, Grundfragen der Sozialpolitik und der Volkswirtschaftslehre. Leipzig 1898.

W. Sombart, Der moderne Kapitalismus. Leipzig 1902. I. Bd. 3. A. 1919

J. Conrad, Grundriss zum Studium der Politischen Oekonomie 1. Theil. 1900. 11. A. 1923.

G. Cohn, System der Nationalökonomie. I. 1885.

E. Sax, Grundlegung der theoretischen Staatswirtschaft. 1887.

Gossen, Entwickelung der Gesetze des menschlichen Verkehrs. 1887.

Meyer, Wesen des Einkommens 1887. S. 118. ff.

Böhm-Bawerk, Rechte und Verhältnisse vom Standpunkte der volkswirtschaftlichen Güterlehre 1881. Gesmmelte Aufsätze 1923. SS. 1—126

Wieser, Ursprung des Wertes. 1884. S. 42.

Derselbe, "Gut" Handwörterbuch der Staatswissenschaften. Bd. IV. S. 926—930.

Böhm-Bawerk, Grundzüge der Theorie des wirtschaftlichen Güterwertes. Jahrbücher f. N. Oe. u. S. 1896. 46 Bd. S. 22.

Wieser, Der natürliche Wert. 1889. § 2.

G. Cohn, Gemeinbedürfniss und Gemeinwirtschaft. Zeitschrift für Staatswissenschaften. 37 Bd.

Nicholson, Principles of Political Economy. 1893—1901.

Loria, Costituzione economica odierne. 1899.—Basi economiche della costituzione sociale. 2. E. 1902.

Mischler, Grundsätze der National-Oekonomie. 1857.

Sir Wm. Petty. Economic Writings. Ed. Hull. 1899.

A. Smith, Wealth of Nations. 1776. Routledge Ed. 1893. Cannan Ed. 3. Ed. 1923.

J. S. Mill, Principles of Pol. Economy. 1848. People's. Ed.

Schäffle, Das gesellschaftliche System der menschlichen Wirtschaft. 3. A. 1873. Bd. II. Der Organismus der Volkswirtschaft. S. 1—115.

Bischof, Grundzüge eines Systems der Natianalökonomie. 1874. S. 19 ff.

Roscher, Ansichten der Volkswirtschaft aus dem geschichtlichen Standpunkte. 3. A. Bd. I. 1878. SS. 1.—50. 205 238. 317—362.

Laveleye, De la propriété et de ses formes primitives. 4. E. 1891. passim. Deutsch von Bücher, Das Ureigentum. 1879.

Marshall, Principles of Economics. vol. 1. 2. E. 1891 pp. 10-70. 8. E. 1920. pp. 723—769,

Schönberg, Handbuch der Politischen Oekonomie. 4. A. Bd. I. 1896. S. 1—76.

Derselbe in Jahrbücher f. N. u. S. Bd. IX. 1867. S. 14 ff.

Schmoller, Grundriss d. allg. Volkswirtschaftslehre. 1900 S. 3. ff. 11—12. Taus. 1919. S. 3—6.

Philippovich, Grundriss der Politischen Oekonomie. 1901. S. 15—31.

Aristoteles Politik übers. von C. u. A. Stahr. 1860 (Ed. Bekker). Buch I u. II.

Adam Smith, An Inquiry into the nature and causes of the Wealth of Nations. 1776. Routledge Ed. 1893. pp. 290—323. Cannan Ed. pp. 355—394.

1986. Ashley's Edition. 1909.

Ricardo, Principles of Political economy and taxation. 1817. 2. E. 1919

第二編

既に第一編に掲出せるものは特に密接の關係あるものゝ外は凡て省く以下亦同じ

Brentano, Die Volkswirtschaft und ihre konkreten Grundbedingungen. I. Zeitschrift f. Sozial-u. Wirt.-G. Bd. I. 1893. S. 77ff. jetzt im "Der wirtschaftende Mensch in der Geschichte" 1923. SS. 1—102.

Wagner, Grundlegung der Politischen Oekonomie. I. Grundlagen der Volkswirtschaft Bd. II. 1893. S. 761 ff.

Knies, Politische Oekonomie vom geschichtlichen Standpunkte. 2. A. 1883. SS. 44—156. 254—304. 349—385. 386—422. 423—553. 殊に S. 364 ff. S. 582 ff.

Gross. Wirtschaftsformen und Wirtschaftsprincipien. 1888.

Sax, Grundlegung der theoretischen Staatswirtschaft. 1887. SS. 172. 179. 183. 198.

Cohn, Gemeinbedürfniss und Gemeinwirtschaft Zeitschrift f. ges. Staatsw. Bd. XXXVII, SS. 464—495.

Roscher, System der Volkswirtschaft. I. Grundlagen der N. O. SS. 131. 151—157. 170—175. 176. 230. 335.

Cohn, System der Nationalökonomie. I. Grundlegung der Nationalökonomie. 1885. SS. 356—452.

Roscher, System. II. Nationalökonomik des Ackerbaues und der verwandten Urproductionen. 12. A. 1888. S. 17—71.

Hildebrand (Richard), Recht und Sitte auf verschiedenen wirtschaftlichen Kulturstufen. I. 1896. 2. A. 1907.

Simmel, Philosophie des Geldes. 1900. SS. 3—87. 183—249. 3. A. 1920 SS. 3—100.

Schäffle, Bau und Leben des socialen Körpers. 2. A. 2. Bde. 1896.

Tarde, Psychologie économique. 2 vols. 1902.

Le même, Psychologie sociale. 1900.

Le même, Les lois de l'imitation. 3. E. 1900. pp. 66—98. 99—157. 239—266.

Spencer, A System of Synthetic Philosophy. Principles of Sociology. vol. I. 1893. pp. 249. 280. 435—590. 674. 745. vol. II. 1893. pp. 229. 288. 331. 515. 538. 557. 603. 643. vol. III. 1897. pp. 179. 269. 321—601.

Zenker, Gesellschaft. I. 1899. II. 1903.

Comte, La Sociologie. res. p. Rigolage. 1897. pp. 278. 443.

Letourneau, Sociologie d'après l'éthnographie. 1. E. 1880. 3. E. 1892. 10—47. 379—400. 401—430. 431—439. 563—577.

Gumplowicz, Grundriss der Sociologie. 1885. SS. 105. 121. 127. 139—146. 167. 174. 202. 214. 217.

Loria, Basi economiche della costitutione sociale. 3. E. 1902. P. III. P. 1 et seq.

Lostesso, Analisi della proprietà capitalistà. 1889.

Ammon, Die Gesellschaftsordnung und ihre natürlichen Grundlagen. 1900. SS. 14. 16. 18. 21. 25. 35. 65. 84. 94.

Tönnies, Gemeinschaft und Gesellschaft. 1889. 4—5. A. 1922.

Giddings, Principles of Sociology. 1899. pp. 153—170. 186. 256—298. 299—308. 334—355. 420.

Simmel, Soziale Differenzierung. 1890.

Durkheim, De la division du travail sociale. 1893.

Kidd Social Evolution. 1895.

Ashley, Introduction to English economic history and theory. vol. 1. 2. E. 1893. p. 1. 3. E. 1894. p. 2.

Do, Surveys historic and economic. 1900.

Cunningham, Growth of English Industry and Commerce. 2 vols. 1. E. 1890—92. 2. E. vol. 1. 1896.

Do, Western Civilization in its economic aspects. I. 1868 II. 1900.

Pigeonneau, Histoire du Commerce en France. 2 vols. 1889.

Levasseur, Histoire des classes ouvrières et de l'industrie en France. 2. vols. 2. E. I. 1900. II. 1902.

Brunner, Deutsche Rechtsgeschichte. I. 1887. II. 1892. 3. A. 1906

Schröder, Lehrbuch der deutschen Rechtsgeschichte. 3. A. 1898. 6. A. 1919.

Lamprecht, Deutsches Wirtschaftsleben im Mittelater 1886.

Derselbe, Deutsche Geschichte. 1894—1902.

Inama-Sternegg, Deutsche Wirtschaftsgeschichte. 3. Bde. 1879—1901.

Meitzen, Siedelung und Agrarwesen der Westgermanen und Ostgermanen, der Kelten, Römer, Finnen und Slawen. (Wanderungen, Anbau und Aglnrrecht der Völker Europas nördlich der Alpen. I. Abth.). 2 Bde u. Atlas. 1895.

Maxime Kovalevsky, Oekonomische Entwickelung Europas bis zum Aufkommen der kapitalistischen Wirtschaftsordnung. I. 1901. II. 1902.

Fustel-de-Coulanges, La cité antique. 17. E. 1900. pp. 39—130. 131—290.

Le même, Recherches sur quelques problemes d'histoire 1885. pp. 189—318.

Le même, Nouvelles recherches sur quelques problèmes d'histoire. 1891.

Fukuda, Die gesellschaftliche und wirtschaftliche Entwickelung in Japan. 1900.

Fuchs, Epochen der Agrargeschichte und Agrarpolitik. 1898.

Friedrich List, Das nationale System der Politischen Oekonomie. 1. A. 1843. 7. A. (Eheberg). 1883.

Ernst Grosse, Die Formen der Familie und die Formen der Wirtschaft. 1896.

Bruno Hildebrand, Nationa ökonomie der Gegenwart und Zukunft. 1848. S. 276 ff.

Derselbe, Natural-, Geld-, und Kreditwirtschaft. Jahrbücher f. N. u. S. Bd. II. 1864. S. 1. ff.

Derselbe, Die gegenwärtige Aufgabe der Wissenschaft der Nationalokonomie. a. a. O. Bd. I. 1863 SS. 5. 137.

Derselbe, Geschichte der deutschen Wollindustrie. a. a. O. Bd. VI. 1866.

Karl Knies, Das Geld. 2. A. 1885 passim.

Derselbe, Der Kredit. 1879. S. 205 ff.

Adam Smith, Wealth of Nations. (前揭) pp. 323—519. Cannan Vol. 1. p. 395—462. Vol. II. p. 1—160.

Schmoller, Umrisse und Untersuchungen zur Verfassungs-, Verwaltungs-, und Wirtschaftsgeschichte besonders des Preussischen Staates im 17. u. 18. Jahrhundert 1898. SS. 1—60.

Derselbe, Grundriss. 1900. S. 229 ff. 2. A. S. 234 ff.

Derselbe, Geschichtliche Entwickelung der Unternehmung. Schmoller's Jahrbuch. 1890—1893.

Brentano, Ueber eine zukünftige Handelspolitik des Deutschen Reiches. Schmoller's Jahrbuch. Bd. IX. 1885. S. 1. ff.

Bücher, Entstehung der Volkswirtschaft. 3. A. 1901. SS. 101—174. SS. 447—456. (12. u. 13. A. SS. 83—160.)

Derselbe, Gewerbe. Handwörterbuch der Staatswissenschaften. Bd. III. SS. 926. 929—931.

Derselbe, Aufstände der unfreien Arbeiter 143—129 v. Chr. 1874.

Rodbertus, Zur Geschichte der agrarischen Entwickelung Roms unter den Kaisern. Jahrbücher f. N. u. S. Bd. II. 1864.

Max Weber, Sociale Gründe des Untergangs der antiken Kultur. "Wahrheit." Bd. VI. No. 3. Gesammelte Aufsätze zur Sozial-u. Wirtschaftsgeschichte. 1923. SS. 289—311

Francotte, L'industrie dans la Grèce ancienne. 2 vols. 1900.

Schmoller's Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reiche. 1893. S. 1269 1895, S. 318. シュモラー、ブレヒアー兩氏論難掲載.

Below, Territorium und Stadt. 1901.

Derselbe, Theorieen der wirtschaftlichen Entwickelung der Völker. Historische Zeitschrift. Bd. LXXXVI.

Derselbe, Grossartigkeit des antiken Welthandels. Jahrbücher f. N. u. S. Bd. XVIII. S. 628 ff.

Derselbe, Entstehung des Handwerks in Deutschland. Zeitschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte. Bd. V. 1897. SS. 124—164. 225—257.

Derselbe, Probleme der Wirtschaftsgeschichte—1921

Eduard Meyer, Wirtschaftliche Entwickelung des Altertums. 1895.

Funk-Brentano, Les luttes sociales au XIVe siècle. 1897.

Fornari, Delle teorie economiche nelle provincie Napolitane

del secolo. XIII al MDCCXXXIV. 1882.

Jourdain, Sur les commencemennts de l'economie politique dans les écoles du moyen âge. 1874.

Lampertico, Giammaria Ortes e la scienza economica al suo tempo. 1865.

Doren, Entwickelung und Organisation der Florentiner Zünfte im 13. u. 14. Jahrhunderte. 1897.

Derselbe, Studien aus der Florentiner Wirtschaftsgeschichte. Bd, I. 1901.

Sohm, Städtische Wirtschaft im 15. Jahrhundert. Jahrbücher f. N. u. S. Bd. XVII. 1879.

Derselbe, Entstehung des deutschen Städtewesens. 1890.

Rathgen, Die Entstehung der Märkte in Deutschland. 1881.

Cusumano, Dell' economia politica nel medio evo. 1876.

Gobbi, La concorrenza estera e gli antichi economisti italiani. 1881.

Lostesso, L'economia politica negli scrittori del secolo XVI—XVII. 1889. pp. 52—57. 269—302.

Häbler, Die wirtschaftliche Blüte Spaniens im 16 Jahrhundert und ihr Verfall. 1888.

Born, Spaniens Niedergang während der Preisrevolution des 16. Jahrhunderts. 1896.

Laspeyres, Geschichte der volkswirtschaftlichen Anschauung-

en der Niederlander. 1863. S. 134 ff.

Pringheim, Zur wirtschaftlichen Entwickelungsgeschichte der vereinigten Niederlande im 17 u. 18. Jahrhundert. 1890.

Forbonnais, Recherches et considerations sur les finances de la France. 1758.

Hewins, English trade and finance chiefly in the 17th century. 1892.

Neurath, Grundzüge der Volkswirtschaftslehre. 1885. S. 8. ff.

Schanz, Englische Handelspolitik gegen Ende des Mittelalters. 1881.

De Viti, Saggi di economia e finanza. 1898.

Bunge, Le systeme mercantiliste. 1897.

Cohn, Colbert. Zeitschrift f. ges. Staatsw. Bd. XXV. 1869. S. 369 ff. Bd. XXVI. 1870. S. 390. ff.

Contzen, Einleitung in das staats-und volkswirtschaftliche Studium. 1870. Abt. III.

Mengotti, Il. Colbertismo, ossia della libertà di commercio de prodotti della terra. 1792. N. E. 1901.

Genovesi, Lezioni di commercio, ossia d'economia civile. 1. E, 1765. N. E. 1852 (nella Bibloteca dell' Economistà vol. III. S. 1.)

Clément, Histoire de Colbert et de son administration. 2. E. 1875.

Sombart, Der moderne Kapitalismus. 1902. Bd. I. S. 1—50. 3. A. 1919.

Derselbe, Die Deutsche Volkwirtschaft im 19. Jahrhunder 1903. SS. 23—48. 49—70. 114 ff. 455. 512. 933.

經濟原論教科書